

紺屋遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —



2000.3

紺屋遺跡発掘調査団
長坂町
峡北土地改良事務所

紺屋遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —

2000.3

紺屋遺跡発掘調査団
長坂町
峡北土地改良事務所

序

本書は、県営広域農地農道整備事業に伴って発掘調査された川梨県長坂町長坂上条字紺屋に所在する紺屋遺跡の発掘調査報告書であります。

この紺屋遺跡は、八ヶ岳山麓の標高660メートル付近の台地上に立地し、東側には龍角西遺跡、谷を挟んだ西側には古墳時代前期の方形周溝墓が発見された北村遺跡が存在するなど歴史性の豊かな地域にあります。

同町教育委員会によって1998年12月から翌年3月にかけて実施された当遺跡の西側の発掘調査では、縄文時代や平安時代の住居跡や中世の墓地跡が発見され、同地域が当該期の遺跡に恵まれた所であることはよく知られておりましたが、今回の調査でも平安時代や中世の遺構群が多数確認され多くの成果を取ることができました。

遺跡の内容については、本報告書で詳細にのべておりますので参照していただきたいと思いますが、平安時代の竪穴住居跡はおおよそ10世紀前後の所産で、「丁」「臼」「長」などの墨書き器も多数出土し、またムラの農工具を作りなおした作業場的な小鍛冶遺構を伴うなど、八ヶ岳山麓を舞台に営まれた古代村落の様相をここでもよくあらわしたものとなっています。

本遺跡でとくに特色となったものは、14世紀末から15世紀ごろにつくられた「方形竪穴状遺構」あるいは「方形竪穴建物」と呼ばれている遺構群であります。調査区域内に合計7棟確認されていますが、地下1メートル以上のところに床をもち、柱を建て、イロリ状の施設も有し、当該期に盛んに利用された施設の状況をよく示しております。こうした遺構群は近年、東日本を中心各地域から発見されるようになり、倉庫とか住居とか、あるいは作業小屋、墓跡などといった諸説が交わされていますが、本遺跡の遺構群は良好な状態で検出されておりますので、この分野の今後の研究に大いに資するものと思われます。また、本遺跡と従前のこの地域の調査成果を重ねあわせてみると、紺屋遺跡の中世のムラの様相が意外に計画性を帯びて浮かびあがってくるようにも思われ、今後の研究に大きな課題を提起するのではないかと思います。本調査報告書がこうした地域史研究に大いに資するすれば誠に幸いとするところであります。

最後になりましたが、発掘調査の準備段階から本報告書刊行にいたるまで、地元長坂町当局をはじめ各関係者各位、また発掘調査や整理作業に携わった多くの方々には多大なお世話をいただきました。ここに、深く感謝申し上げ序といたします。

2000年3月

紺屋遺跡発掘調査団

団長 萩原三雄

まずははじめにお読み下さい

この本は、山梨県北巨摩郡長坂町長坂下条字紺屋にある紺屋遺跡の発掘調査の結果を記録したものです。山梨県が進めている、北巨摩地域をめぐる県営広域基盤団地農道を建設する前に、遺跡があることがわかりましたので発掘調査を行いました。道路を建設するため遺跡が壊されて無くなってしまう前に、昔の人が使った土器などを掘り出したり、住んだ家の跡などがどのような形だったのかなど、できるだけ細かい記録を取りたり、写真を撮ったりしました。

この本は、無くなってしまう遺跡の身代わりとも言えるものです。ですから、遺跡の発掘調査から得られたさまざまな情報（家の形がどのようなものだったのか、土器がどこからどのような状態で発見されたかなど）を、後世の人に伝えるためにできるだけ細かく書いています。そのため、なかには専門的な言葉を使っているところも多く、一般の方々にはなかなか読みにくいものとなっていると思います。こちらに遺跡の内容を簡単に書きましたので、まず、こちらをお読みになってから、本文を読んでいただきますとよりわかりやすいかと思います。

紺屋遺跡は、H野春小学校から200mほど北の県道茅野・小淵沢・蘿崎線（通称 七里岩ライン）の西側にあります。紺屋遺跡の周りにもたくさんのお跡があり、これまでに龍角遺跡、龍角西遺跡、北村遺跡などが発掘調査されています。

紺屋遺跡の発掘調査は、1999（平成11）年6月から12月まで行われましたが、その前年にも町教育委員会によって、遺跡西側の約300m²が発掘調査されました。調査によって今から4500年ほど前の縄文時代の竪穴住居跡2軒、今から1000年ほど前の平安時代の竪穴住居跡3軒、戦国時代頃の五輪塔の集積地点、墓地などが発見されています。

今回の調査は、前年度に引き続いて東側を発掘したものでした。発掘調査の結果、今から1000年ほど前の平安時代の竪穴住居跡7軒、小鍛冶遺構1棟、15世紀頃造られたと考えられる中世の建物跡7棟、溝16条、用途不明の穴の跡45、柱穴状の跡48などが発見されました。

平安時代の住居跡は、発見された上器の特徴などからいすれも10世紀前後に作られたものでした。住居のなかにはカマドを作られていて、住居内で煮炊きをしたことがわかっています。住居内からはたくさんのお土器と呼ばれる素焼きの上器をはじめ、愛知県地方で作られた陶器類も発見されました。上器の表面には「千」、「百」、「長」などと墨で文字を書いた墨書き上器と呼ばれるものも発見されました。何のために土器に墨で文字を書いたのかは、実際よくわからっていません。平安時代の建物跡のなかの一つからは、たくさんの土器類とともに鎌や刀子（小形のナイフ）などの鉄製品、鍛冶の際に排出される鉄滓（鉄のくず）などが数多く発見されました。どうやらムラの鍛冶屋さんだったようです。長坂町のある八ヶ岳山麓は、今から1000年ほど前に盛んに農地の開発が行われました。おそらくこの鍛冶屋さんも、開墾や農作業に必要な農具や工具を作ったり、修理したのではないかと考えられます。

今回の発掘調査で注目される調査成果として、中世の建物跡がまとめて発見されたことが挙げられます。この建物跡は、近年北巨摩地域で発見が相次いでいるもので、方形竪穴建物、方形竪穴建築址、方形竪穴状遺跡などと呼ばれるもので7棟発見されました。地面を1~1.5mほどの深さで四角に掘り、床には屋根を支えた柱穴や火を焚いた炉戸裏のような跡もみられました。

また、深く掘り埋めたために、出入り用の階段状のものが見つかっています。これは、木などで作られたものではなく、礎穴を掘る際、地面を掘り残して階段状に作ったものです。床は入口部を中心堅く踏みしまっていたことから、土間ないし板敷きの床構造を持っていたことが考えられます。建物は廃棄にあたって柱を抜き取ったようで、人の手によって埋め戻された様子が埋められた上の観察から確認されています。建物内からは、愛知県地方の焼き物である古瀬戸や常滑の陶器類や、中国のお金である北宋銭などが見つかっています。どれもこの建物内で使用されたものではなく、どうやら建物を埋める上と一緒に捨てられ、埋まったのだと思われます。しかし、建物がいつ作られたのかおおよそ推定する資料にはなります。およそ14世紀後半から15世紀前半頃に作られた陶器類がほとんどですので、建物が埋められたのは14世紀末から15世紀頃かと思われます。周辺の遺跡でもこのような中世の建物跡の調査例がありますが、建物内からほとんど上器などが発見されず、いつ頃作られたかわからない例が多いのですが、紺屋遺跡の場合、作られた時期がおおよそ特定できることは貴重な調査例となつたといえます。

このような地面を深く掘り埋める中世の建物跡は、東日本を中心として城や館内で多く発見されているようです。機能については、住居のほか倉庫、作業小屋、戦闘時の緊急避難小屋などの用途があると考えられています。紺屋遺跡でみつかった建物跡は、囲炉裏状の施設などがあり、明らかに火を使用したことがわかつており、倉庫的な施設としてではなく、建物のなかで一定期間の生活や何らかの活動をしたものと考えられますが、それが何だったのかは明らかではありません。

県道を挟んで東にある龍角西遺跡からは、現在の県道に沿って中世と推定される道の跡が発見されています。紺屋遺跡の真ん中付近からは、中世と思われる溝が3本平行して掘られているのが見つかっています。道の跡と一番東の溝はほぼ平行しており、道を基準に溝が掘られたものと思われます。先ほど紹介した中世の建物跡は、すべてこの道と溝に挟まれた所にあり、溝の外側からは中世の建物はまったく発見されていません。どうやらこの字状の溝に囲まれた屋敷のような建物が、道に面してあったようです。今回の調査では、古瀬戸の梅瓶と呼ばれる酒徳利のような形をした瓶や茶壺、天目茶碗など、一般的な村からはじめてに見つかることのないようなものが発見されました。おそらく、今回発見された方形堅穴状遺構と呼ばれる土を深く掘り埋めた建物だけではなく、太い柱を規則的に並べて作った大きな屋敷か何かが溝で囲まれた中にあったものと考えられます。また、前年度の発掘調査により紺屋遺跡西隅からは中世のお墓が発見されています。このようにみると、道を基準として溝がめぐり、その中には中世の建物群があり、溝で囲まれた屋敷地とは離れたところに墓地が作られていたようです。実に計画的に、それぞれのものが配置されていたことが、今回の発掘調査で明らかとなりました。

農道の幅10mほどと、限られた発掘調査ではありましたが、以上のようなことがわかつてきました。紺屋遺跡の周辺には、さまざまなもののがまだ地中に埋まっています。今後調査する機会があれば、古代や中世の人々の暮らし가もっと鮮明になると思います。

例　　言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡長坂町長坂下条字紺屋1480-1番地外に所在する、紺屋遺跡の第2次埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県営広域営農団地農道整備事業に先立って実施されたもので、長坂町の委託を受けた財団法人山梨文化財研究所が紺屋遺跡発掘調査団を組織し、発掘調査および整理作業にあたった。
3. 本書の執筆は宮澤公雄が、編集は宮澤とり東千代美の両名があたった。
4. 本報告書作成のための作業分担は、以下の通りである。
遺物洗浄・汁記・接合 小沢恵津子・齋藤ひろみ・竜沢みち子・田中真紀美・保坂真澄
遺物復元（石膏入れ） 齋藤ひろみ
遺物実測・拓本 小沢恵津子・齋藤ひろみ・竜沢みち子・田中真紀美・保坂真澄
遺構写真撮影 宮澤公雄
遺物写真撮影 佐野靖子
遺構・遺物トレース 伊東千代美・小沢恵津子・齋藤ひろみ・竜沢みち子
図版作成 小沢恵津子・齋藤ひろみ・竜沢みち子・田中真紀美・保坂真澄・岩崎満佐子
表作成 保坂真澄
その他 石川昭江・井出仁美・長田加代子・川中裕二・小林貴子・小林広美・斎藤拓弥・清水純代
奈良裕子・野沢南海子・橋本はるみ・初鹿野博之・山向登茂子・深沢憲子・山本理奈・米村祥央
鉄器保存処理 宇津宮則子・尾原 薫・巣沢峯子・広瀬悦子・藤井多恵子
5. 発掘調査および整理作業において一部の調査・業務を以下の機関に委託および依頼した。

基準点測量	(株) 東雲
航空測量	(株) フジ・テクノ
石器・石材鑑定	山梨文化財研究所
測量データ図化・整理	(株) コンピュータ・システム
6. 本書に関わる記録図面・写真・出土遺物等は、長坂町教育委員会に保管している。
7. 本遺跡の発掘調査および整理作業にあたっては、以下の各位・諸機関から多くなるご指導・ご協力を賜った。ここに記して深く感謝の意を表す次の次第である。
岐北土地改良事務所・長坂町・長坂町教育委員会・財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター・青木 修、
秋山圭子・飯村 均・植松生郎・川道 亨・小林金吾・小林静明・小林修一・齋木秀雄・佐野 陞、
藤澤良祐・河西 学・畠 大介・櫛原功一・平野 修
8. 引用・参考文献は、執筆者順に巻末にまとめて記載した。
9. 紺屋遺跡の概要については、山梨県考古学協会 2000 『山梨考古』第75号、北巨摩市町村文化財担当者会 2000 『八ヶ岳考古』(平成11年度年報)で紹介・記載しているが、本報告書をもって本絆とすることとする。

凡　　例

1. 遺跡全体におけるX・Y座標は、平面直角座標第Ⅷ系のX=-21,530.000m、Y=-10,900.000m（北緯35°48'21"、東経138°22'45"）を基点（X=0、Y=0）とした座標値である。なお、各遺構平面図中に示す方位は、すべて座標北を示している。

なお、真北方向角は0°04'14"となる。

2. 遺構・遺物実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。

遺構 壓穴住居・小鍛冶遺構・方形竪穴状遺構・土坑・ピット—1/40

カマド・火廻—1/20、溝—1/80・1/100

遺物 土器—1/3、大形土器—1/6、石製品—1/2、大形石製品—1/6、

土製品—1/2、鉄製品—1/2、錢貨—1/1

2. 遺構図版中で使用したスクリーントーンの凡例は以下の通りである。

石 烧土 炭化物

粘土 遺構地山

3. 遺構図版中の遺物分布図のマークは以下の通りである。

● 土師器 ■ 須恵器 ▲ 陶器 ▼ 錢貨
○ 石・石製品 □ 繩文土器 △ 鉄製品 ▽ その他 ★ 鉄滓

4. 遺物図版中で使用したスクリーントーンの凡例は以下の通りである。

須恵器 陶器
 黒色土器 土器・石器磨面

5. 遺構図版中の遺物番号は遺物図版番号であり、現地での遺物取り上げ番号とは一致しない。遺物図版番号と取り上げ番号との対応関係は出土遺物観察表（第2表）および遺物一覧表（第7表）に示した。また、遺物分布図中の遺物接合線については、実線は接合関係を、破線は接合しないが同一個体であることを示している。

6. 遺構同一図版中の水系レベルは、原則的には統一してあるが一部異なるものがある。また、遺構図版中の柱穴の深さは一覧表に示し、その際の深さは床面からの深さ(cm)であり、()内の数値は現状値である。

7. 遺構図版中および出土遺物観察表中の色調名は、農林水産省技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 1993年版)による。

8. 各遺構の床面積はブランメータ(牛方 X-P L A N 360d)を使用して測定したが、その範囲はカマドや柱穴も一部含む壁下端内の面積である。

9. 本書で用いた地図は、長坂町発行の長坂町全図(1:10,000)および都市計画基本図(1:2,500)である。これらの地図の一部を複写ないし一部改変して転載している。

目 次

序

まずははじめにお読み下さい。

例 言

凡 例

第1章 序 説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 試掘調査の状況	1
第3節 調査の経過	2
第4節 調査の方法	3
第5節 遺跡概要	4
第6節 基本層序	4
第2章 遺跡の立地と環境	10
第1節 遺跡の地理的位置	10
第2節 周辺の歴史的環境	10
第3章 遺構と遺物	15
第1節 平安時代の遺構	15
第2節 中世の建物跡	52
第3節 土坑・ピット	70
第4節 溝 跡	70
第4章 調査の成果	110
第1節 平安時代の遺構・遺物について	110
第2節 中世の遺構について	110
引用・参考文献	115
おわりに	151

挿図目次

第1図 調査区設定図	3
第2図 遺構配置図	5・6
第3図 遺物分布図	7・8
第4図 遺跡基本土層	9
第5図 遺跡の位置と周辺の遺跡	11
第6図 遺跡周辺の地形	13・14
第7図 1号堅穴住居平面図	16
第8図 1号堅穴住居遺物出土状況	17
第9図 1号堅穴住居遺物分布図・カマド検出状況	18
第10図 1号堅穴住居カマド平面図	19
第11図 1号堅穴住居周辺カマド平面図	20
第12図 1号堅穴住居出土上土器	21
第13図 2号堅穴住居平面図・遺物出土状況	22
第14図 2号堅穴住居遺物分布図・カマド検出状況	23
第15図 2号堅穴住居カマド平面図	24
第16図 2号堅穴住居出土土器	25
第17図 3号堅穴住居平面図	26
第18図 3号堅穴住居遺物出土状況・遺物分布図	27
第19図 3号堅穴住居カマド平面図・土坑平面図	28
第20図 3号堅穴住居出土土器	29
第21図 4号堅穴住居平面図	31
第22図 4号堅穴住居遺物出土状況・遺物分布図	32
第23図 4号堅穴住居カマド平面図	33・34
第24図 旧4号堅穴住居平面図・カマド平面図	36
第25図 4号堅穴住居出土土器(1)	37
第26図 4号堅穴住居出土土器(2)	38
第27図 5号堅穴住居平面図・遺物出土状況	39
第28図 5号堅穴住居遺物分布図	40
第29図 5号堅穴住居出土土器(1)	41
第30図 5号堅穴住居出土土器(2)	42
第31図 6号堅穴住居平面図	43
第32図 6号堅穴住居遺物出土状況	44
第33図 6号堅穴住居遺物分布図	45
第34図 6号堅穴住居カマド平面図	46
第35図 6号堅穴住居出土土器	47
第36図 8号堅穴住居平面図	48
第37図 8号堅穴住居出土土器	49
第38図 1号小鍬沿遺構平面図・遺物出土状況	50
第39図 1号小鍬沿遺構出土土器(1)	51
第40図 1号小鍬沿遺構出土土器(2)	52
第41図 1号方形堅穴状遺構平面図	53・54
第42図 1号方形堅穴状遺構縫隙山状況	55

第43図	1号方形堅穴状遺構遺物分布図	56
第44図	1号方形堅穴状遺構火候平面図	57
第45図	2号方形堅穴状遺構平面図・遺物分布図	59・60
第46図	2号方形堅穴状遺構火候平面図	61
第47図	3号方形堅穴状遺構平面図	63・64
第48図	3号方形堅穴状遺構礫検出状況	65
第49図	3号方形堅穴状遺構遺物出土状況	66
第50図	3号方形堅穴状遺構遺物分布図	67
第51図	3号方形堅穴状遺構火候平面図	68
第52図	4・6・7号方形堅穴状遺構平面図	69
第53図	4号方形堅穴状遺構平面図・遺物分布図	71・72
第54図	5号方形堅穴状遺構平面図・遺物分布図	73・74
第55図	6号方形堅穴状遺構平面図	75・76
第56図	6号方形堅穴状遺構遺物分布図	77
第57図	7号方形堅穴状遺構平面図・遺物分布図	78
第58図	方形堅穴状遺構出土土器(1)	79
第59図	方形堅穴状遺構出土土器(2)	80
第60図	上坑平面図・断面図(1)	81
第61図	土坑平面図・断面図(2)	82
第62図	土坑平面図・断面図(3)	83
第63図	上坑平面図・断面図(4)	84
第64図	土坑平面図・断面図(5)	85
第65図	上坑平面図・断面図(6)	86
第66図	土坑平面図・断面図(7)	87
第67図	ピット平面図・断面図(1)	90
第68図	ピット平面図・断面図(2)	91
第69図	ピット・土坑平面図・断面図	92
第70図	土坑・ピット出土土器	93
第71図	1~12号溝平面図	95・96
第72図	1~12号溝遺物分布図	97・98
第73図	13号溝平面図・遺物分布図	99
第74図	14号溝平面図・遺物分布図	100
第75図	15号溝平面図・遺物分布図	101
第76図	16号溝平面図・遺物分布図	103・104
第77図	溝・遺構外出出土土器	105
第78図	鉄製品実測図	106
第79図	銭貨拓影	107
第80図	土製品・石製品(1)実測図	108
第81図	石製品(2)実測図	109

表目次

第1表 土坑・ピット一覧表	88
第2表 出土遺物觀察表(土器)	116
第3表 墨書き・線刻土器一覧表	124
第4表 出土遺物觀察表(金属製品)	125
第5表 出土遺物觀察表(錢貨)	125
第6表 出土遺物觀察表(石・石製品)	125
第7表 出土遺物一覧表	126

図版目次

図版1 調査区全景(1)	
図版2 1 調査区全景(2) 2 調査区中央付近航空写真(1)	
図版3 1 調査区西側航空写真 2 調査区中央付近航空写真(2)	
図版4 1 調査前状況(1) 2 調査前状況(2)	
図版5 1 調査風景(1) 2 調査風景(2) 3 調査風景(3) 4 調査風景(4) 5 遺跡基本土層(西側) 6 遺跡基本土層(東側)	
図版6 1 1号竪穴住居全景 2 同遺物出土状況(1)	
図版7 1 1号竪穴住居遺物出土状況(2) 2 同遺物出土状況(3) 3 同カマド 4 同カマド遺物出土状況 5 同臼カマド	
図版8 1 2号竪穴住居全景 2 同遺物出土状況(1)	
図版9 1 2号竪穴住居遺物出土状況(2) 2 同カマド検出状況 3 同カマド 4 同カマド遺物出土状況 5 3号竪穴住居全景	
図版10 1 3号竪穴住居遺物出土状況(1) 2 同遺物出土状況(2) 3 同カマド 4 同カマド検出状況 5 同カマド遺物出土状況	
図版11 1 4号竪穴住居全景 2 同遺物出土状況(1)	
図版12 1 4号竪穴住居遺物出土状況(2) 2 同遺物出土状況(3) 3 同遺物出土状況(4) 4 同遺物出土状況(5) 5 同カマド 6 同カマド遺物出土状況 7 同カマド石組み状況 8 同臼カマド	
図版13 1 5号竪穴住居全景 2 同遺物出土状況(1)	
図版14 1 5号竪穴住居遺物出土状況(2) 2 6号竪穴住居全景	
図版15 1 6号竪穴住居遺物出土状況(1) 2 同遺物出土状況(2) 3 同カマド 4 同カマド遺物出土状況 5 8号竪穴住居全景	
図版16 1 1号小鍛冶遺構全景 2 同遺物出土状況(1)	
図版17 1 1号小鍛冶遺構内土坑 2 同遺物出土状況(2) 3 同遺物出土状況(3) 4 同遺物出土状況(4) 5 同遺物出土状況(5) 6 同遺物出土状況(6) 7 同遺物出土状況(7) 8 同遺物出土状況(8)	
図版18 1 1・2・4・6・7号方形竪穴状遺構全景 2 1・2号方形竪穴状遺構全景	
図版19 1 1号方形竪穴状遺構全景(1) 2 同全景(2)	
図版20 1 1号方形竪穴状遺構検出状況(1) 2 同縦検出状況(2)	
図版21 1 1号方形竪穴状遺構土層堆積状況(1) 2 同土層堆積状況(2) 3 同出入口施設 4 同張り出し部 5 同1号火坑 6 同2号火坑 7 同2号火坑炭化物検出状況	

- 8 同2号火葬炭化物・遺物出土状況
- 図版22 1 2号方形竪穴状遺構全景(1) 2 同全景(2) 3 同出入口施設 4 同火葬
5 同火葬炭化物出土状況
- 図版23 1 3号方形竪穴状遺構全景(1) 2 同全景(2)
- 図版24 1 3号方形竪穴状遺構縫検出状況(1) 2 同遺物出土状況(1)
- 図版25 1 3号方形竪穴状遺構縫検出状況(2) 2 同縫検出状況(3) 3 同縫検出状況(4)
4 同縫検出状況(5) 5 同縫検出状況(6) 6 同出入口施設
7 同柱穴検出状況(1) 8 同柱穴検出状況(2)
- 図版26 1 3号方形竪穴状遺構遺物出土状況(2) 2 同遺物出土状況(3) 3 同火葬
4 同火葬遺物出土状況 5 4・6・7号方形竪穴状遺構全景(1)
- 図版27 1 4・6・7号方形竪穴状遺構全景(2) 2 4号方形竪穴状遺構全景(1)
- 図版28 1 4号方形竪穴状遺構全景(2) 2 6号方形竪穴状遺構全景
- 図版29 1 4・6・7号方形竪穴状遺構上層堆積状況(1) 2 同土層堆積状況(2)
3 6号方形竪穴状遺構上層堆積状況 4 4・6号方形竪穴状遺構土層堆積状況
5 7号方形竪穴状遺構全景
- 図版30 1 5号方形竪穴状遺構全景(1) 2 同全景(2)
- 図版31 1 5号方形竪穴状遺構焼土検出状況(1) 2 同土層堆積状況(1)
3 同土層堆積状況(2) 4 同出入口施設 5 同柱穴列検出状況
- 図版32 1 5号方形竪穴状遺構焼土検出状況(2) 2 同焼土検出状況(3) 3 7・9号土坑
4 8号土坑 5 13号土坑 6 15号土坑縫検出状況 7 20号土坑 8 21号土坑
- 図版33 1 23号土坑 2 25号土坑・41号ピット 3 31号土坑 4 35号土坑 5 36号土坑
6 30・39号土坑 7 40号土坑 8 3~7・21号ピット
- 図版34 1 38・39号ピット 2 40号ピット 3 1号集石土坑 4 同完掘
5 1~12号溝全景
- 図版35 1 1~8号溝 2 13号溝全景
- 図版36 1 14号溝全景 2 13・14号溝全景
- 図版37 1 15号溝全景 2 同土層堆積状況
- 図版38 1 16号溝全景(1) 2 同全景(2)
- 図版39 出土土器(1)
- 図版40 出土土器(2)
- 図版41 出土土器(3)
- 図版42 墨書き器
- 図版43 鉄製品・鉄滓
- 図版44 銀貨・土製品・石製品

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

山梨県では、八ヶ岳南麓を縦横断する広域營農団地農道整備事業を進めており、長坂町に対しても、1993(平成5)年に事業案の提示が行われた。これを受け、長坂町教育委員会では同年より事業地内の確認調査を実施している。その結果、当事業用地内においていくつかの遺跡の存在が明らかとなり、長坂下条字細巣地内においても平安時代の住居跡等の確認がされ、遺跡の存在が明らかとなった。当事業においてはこれまでに多くの遺跡の発掘調査が実施されており、長坂町内でも北村遺跡(1994・1995年)、龍角西遺跡(1997・1998年)などの調査が行われている。

1999年4月、長坂町教育委員会から財団法人山梨文化財研究所に対し、広域農道建設に伴う紺屋遺跡発掘調査の正式な依頼があり、長坂町と協議した結果、委託契約を結んで遺跡の発掘調査および整理作業にあることとなった。財団法人山梨文化財研究所では発掘調査を実施するにあたり、遺跡発掘調査団を組織して調査にあたることとした。委託者は長坂町長 小澤澄夫、受託者を紺屋遺跡発掘調査団団長 萩原三雄とし、同年6月1日付けで委託契約を締結した。

発掘調査は、1999年6月2日より12月10日まで実施した。また、報告書刊行に向けての整理作業は、一時発掘調査と平行して同年9月より2000年3月まで財団法人山梨文化財研究所において実施した。

紺屋遺跡発掘調査団組織

団長	萩原 三雄	財団法人山梨文化財研究所 所長代行
副団長	鈴木 稔	財団法人山梨文化財研究所 保存科学研究室長
参与	小宮山 隆	長坂町教育委員会学芸員
	村松 佳幸	長坂町教育委員会学芸員
調査員	宮澤 公雄	財団法人山梨文化財研究所 考古第1研究室長
調査補助員	伊東千代美	財団法人山梨文化財研究所 研究助手
	森原智恵子	財団法人山梨文化財研究所 研究助手(非常勤)
事務局	五味 芳子	財団法人山梨文化財研究所 事務主任

発掘調査参加者

相吉いはと・植松重雄・小林加正・小林春代・小林八千子・高橋純子・田中利美・長沼欣一・
早野ふじ子・八巻重子

整理作業参加者

小沢忠津子・齋藤ひろみ・佐野靖子・竜沢みち子・田中真紀美・保坂真澄・岩崎満佐子・石川昭江・
井山仁美・長田加代子・川中裕二・小林貴子・小林広美・齊藤拓弥・清水純代・奈良裕子・野沢南海子・
橋本はるみ・初鹿野博之・日向登茂子・深沢憲子・山木理奈・米村祥央

保存処理作業参加者

宇津宮則子・堀原 薫・高沢峯子・広瀬悦了・藤井多恵子

第2節 試掘調査の状況

本遺跡の試掘調査は、1994年6月に長坂町教育委員会によって実施された。試掘調査では2m×2mのテ

ストピットを9ヶ所に設置し、掘り下げを行っている。その結果、調査対象地区中央付近において焼土を伴う遺構のプランを数カ所確認した。

また、1998年11月には、地中レーダー探査も併せて実施された。探査の結果、調査区西側ではピット次の反応が多数確認された。調査区の中央では、溝状の遺構の存在が推定された。また、東側地区では、地下式土壙が陥没したような強い反射物がいくつか存在することが想定された。

以上のことから、調査区全体に遺跡が展開していることが推定されたため、開発予定地全体にわたり発掘調査を実施することとした。

第3節 調査の経過

6月2日	事務所設置、東側より表土剥ぎ開始。	9月13日	2号堅穴住居遺物出土状況写真撮影、1号方形堅穴状遺構完掘写真撮影。
6月4日	機材搬入。	9月14日	1号と3号方形堅穴状遺構の間に方形プランを確認（5号方形堅穴状遺構）。
6月9日	調査開始、東側より精査。	9月17日	5号堅穴住居調査開始、2号方形堅穴状遺構火堀掘り下げ、3号方形堅穴状遺構柱穴、火堀調査。
6月10日	調査区中央付近精査、方形のプラン4ヶ所、溝跡など確認。	9月20日	1号方形堅穴状遺構出入口施設を確認、5号方形堅穴状遺構調査開始。
6月14日	調査区西側精査、堅穴住居跡と思われるプラン2ヶ所ほど確認。	9月28日	6号堅穴住居調査開始、5号方形堅穴状遺構出入口施設確認。
6月15日	東側より掘り下げ開始、搅乱がはとんどである。	10月1日	4号方形堅穴状遺構調査開始。
6月17日	杭打ち。	10月8日	4号方形堅穴状遺構に重複した遺構があることが判明、5号方形堅穴状遺構焼土・炭化物範囲検出。
6月23日	溝掘り下げ。	10月12日	4号方形堅穴状遺構に重複した遺構を6号方形堅穴状遺構として調査、さらに西側で遺構の重複を確認（7号方形堅穴状遺構）。
7月6日	性格不明遺構（3号方形堅穴状遺構）調査開始。	10月19日	1号堅穴住居完掘全景写真撮影。
7月26日	3・4号堅穴住居調査開始。	10月26日	4・6・7号方形堅穴状遺構柱穴半数。
7月27日	1号堅穴住居（1号方形堅穴状遺構）調査開始。	10月29日	5号堅穴住居完掘全景写真撮影。
8月4日	1号堅穴住居、中世の方形堅穴状遺構であることが判明。1号方形堅穴状遺構とする。	11月4日	7号堅穴住居（1号小銀治遺構）調査開始。
8月5日	1号方形堅穴状遺構東側に重複遺構があることが判明。2号方形堅穴状遺構とする。	11月5日	7号堅穴住居（1号小銀治遺構）南壁際に遺物多数出土。
8月11日	3・4号堅穴住居遺物出土状況写真撮影。	11月9日	8号堅穴住居調査開始。
8月12日	性格不明遺構も方形堅穴状遺構であることが判明。3号方形堅穴状遺構とする。	11月11日	5号方形堅穴状遺構完掘全景写真撮影。
8月17日	1号堅穴住居調査開始。	11月18日	航空写真測量、16号溝完掘全景写真撮影。
8月27日	1号堅穴住居遺物出土状況写真撮影。	11月19日	堅穴住居掘り方調査開始。
8月30日	1号方形堅穴状遺構柱穴半数、土坑平面図作成開始。	11月22日	1・4号堅穴住居IHカマド検出。
9月1日	ピット調査開始。	11月29日	13・14号溝底割り。
9月2日	2号堅穴住居調査開始。	12月3日	埋め戻し・機材撤収準備。
9月6日	1号方形堅穴状遺構、火堀掘り下げ。3号方形堅穴状遺構、石臼、陶器出土状況写真撮影。	12月8日	機材撤収。
		12月10日	調査終了最終確認。

第4節 調査の方法

辯屋地内における農道建設予定地は約1800m²であったが、西側の300m²については1998年12月～翌99年3月にかけて、長坂町教育委員会によって発掘調査が実施されており、それを除く約1500m²を調査対象面積とした。調査にあたっては全面調査を行うこととしたが、対象地東側の県道沿いには上水道管が埋設されていることが判明し、県道沿い2mほどは調査地区から除外したため実際の調査面積は1400m²ほどとなっている。

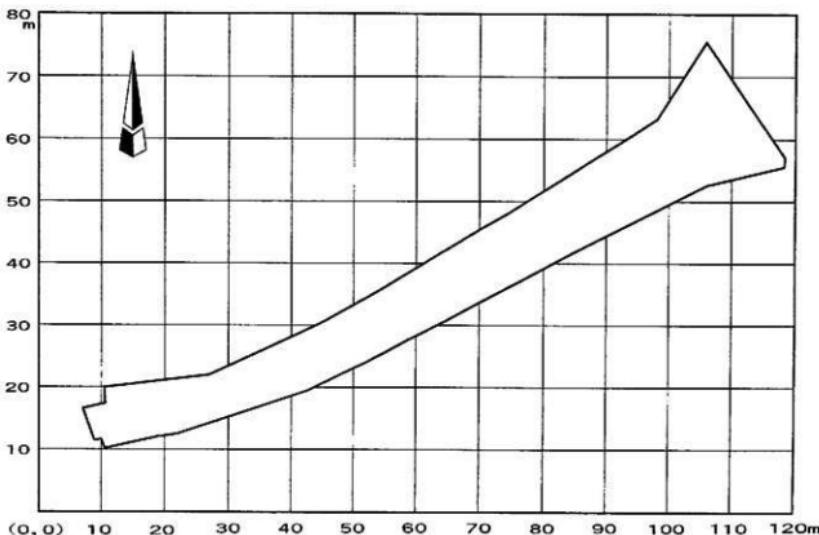
調査区設定の後、重機により表土を除去し、引き続き人力による遺構確認作業を行った。確認された遺構は、構築年代の新しいものから順次調査を行ったが、一部新旧関係が不明な重複した遺構については、同時に調査を行い土層観察により新旧関係の決定を行った。

出土した遺物は、遺構に伴うものかどうかに問わらず、すべて光波測量器を用いて個別に取り上げを行った。遺物微細図は、デジタルカメラによる測量と簡易造り方による手作業図化を適宜選択して実施した。遺構図の図化は、光波測量器による実測を基本として、一部デジタルカメラによる測量と簡易造り方、航空写真測量によって補完した。

測量に用いた機器およびシステムは以下の通りである。

光波測量器	TOPCON GTS-3
コンピュータ	EPSON HC 45
取り上げ・図化システム	コンピュータ・システム株式会社製 SITE IV
デジタルカメラ図化システム	〃 SITE EDG

重機による表土剥ぎ終了後、調査区全体を被うように国土座標にあわせ南北方向をX軸、東西方向をY軸とするメッシュをかけ、南西隅を基点とした。国土座標X=-21,530.000m、Y=-10,900.000mを原点(X=0、Y=0)とし、調査区内に5mメッシュの杭打ちを行った。調査では、光波測量器による測量を用いたため、東西、南北とも1mのグリッドとして両軸とも算用数字を用いて表現した(第1図)。



第1図 調査区設定図

第5節 遺跡概要

長坂町教育委員会による第1次発掘調査では、縄文時代中期中葉の竪穴住居跡2軒、平安時代の竪穴住居跡3軒、時期不明の竪穴状遺構1基、五輪塔の集中地点2ヶ所、中世の墓壙9基、火葬施設ないし火葬墓と思われる土坑2基、土坑22基、ピット8基、溝1条などが発見されている。

今回の第2次発掘調査では、平安時代の竪穴住居跡7軒、平安時代の小銀治遺構1棟、中世の方形竪穴状遺構7棟、中世の溝3条、近世以降の溝13条、土坑44基、集石土坑1基、ピット48基が発見された。

平安時代の竪穴住居跡および小銀治遺構は、立地からおおよそ2つのグループに分けることができる。調査区の中央付近に4軒がまとまっている。また、調査区の西側にも4軒がまとまりをみせる。第1次調査でも隣接して3軒の竪穴住居が検出されており、これらは一つのグループとして考えることができる。2つのグループの間は約25mほどであるが、その間に平安時代の建物跡は全くみられない。多くの住居が主軸を北東に向かって、石組みのカーブを東壁の中央よりやや南側に造っている。柱穴は全く確認されておらず、周溝をもつものが半数ほどみられる。出土遺物には、土師器や須恵器をはじめとして鉄製品などがある。小銀治遺構は、頭初7号住居として調査を進めたが、調査範囲が狭く明確な遺構は検出できなかったものの、刀子の未製品や鉄滓がまとまって出土し、床面には金床石も掘えられていたことから小銀治遺構であると判断した。

中世の建物跡は、調査区の中央、やや東側の微高地に位置する。「方形竪穴建築跡」、「方形竪穴状遺構」などとも呼ばれ、一辺4m前後の方形プランをもち、地表下2m近くまで掘り込んだ施設である。地川を掘り残した階段状の出入口施設がみられ、床には地床炉ないし匂炉のようないわをもち、壁際を中心として柱穴列が並ぶ。遺物はほとんどみられないが、古瀬戸の陶器や常滑の甕、北宋銭などが出土している。殉器類はおおよそ14世紀後半から15世紀初頭に比定されるものであることから方形竪穴状遺構は、14世紀末から15世紀頃のものと考えられる。

土坑、ピットは、総数95基ほどが発見されている。調査区の東側ではほとんど分布がみられず、西側に多く分布している。土坑は、調査区西側と中央よりやや東の微高地に分布が集中する。ピットは、調査区のはば中央からやや西側にかけて集中する傾向にある。時代や性格を特定するものはほとんどみられない。そのうち15号土坑からは、石鉢が出土しており3号方形竪穴状遺構出土の石鉢と接合関係にあり、同時期のものと考えられる。また、40号土坑は、長方形プランの四隅に柱穴をもつ特異な形態をもつものである。5号方形竪穴状遺構に隣接しており、付属施設とも考えられる。ピットでは、獨立柱建物跡の柱穴となるようなものは確認できていない。

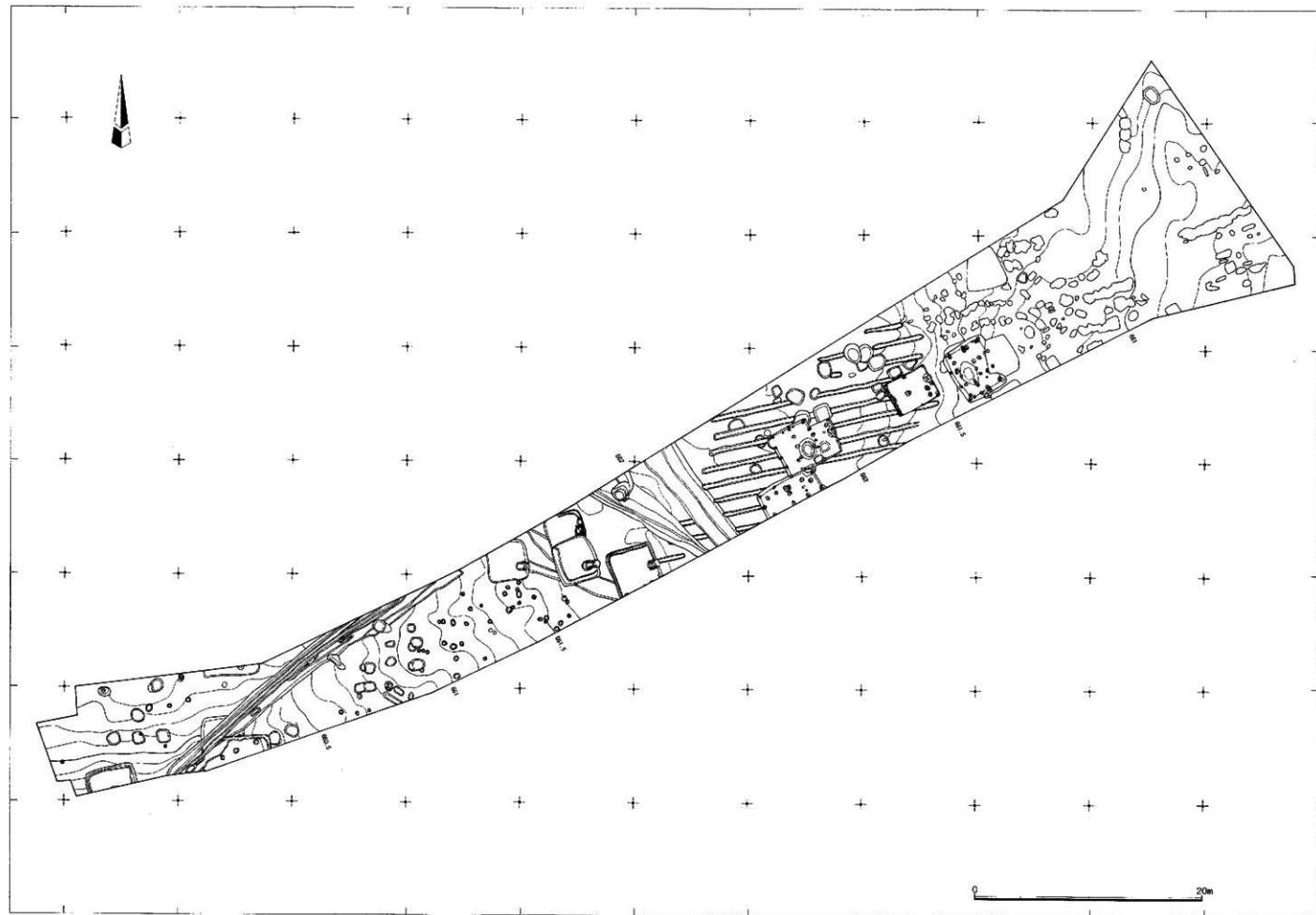
溝跡は、16条発見されている。調査区東側に並列する12条の溝跡は、近世以降の耕作に伴うもので、畠状遺構ともいえるものである。調査区中央に位置する3条の溝は、平安時代の住居跡を切っており、中世に掘られたものだと思われる。この溝より東側に方形竪穴状遺構が分布し、西側には全くみられることから、方形竪穴状遺構と一体のもので、同時併存していたものと考えられる。

このように尾根上に展開する遺跡は、それぞれの時代や遺構の性格においてその立地を異にしており、計画的に遺構が配置されていたものと考えられる。

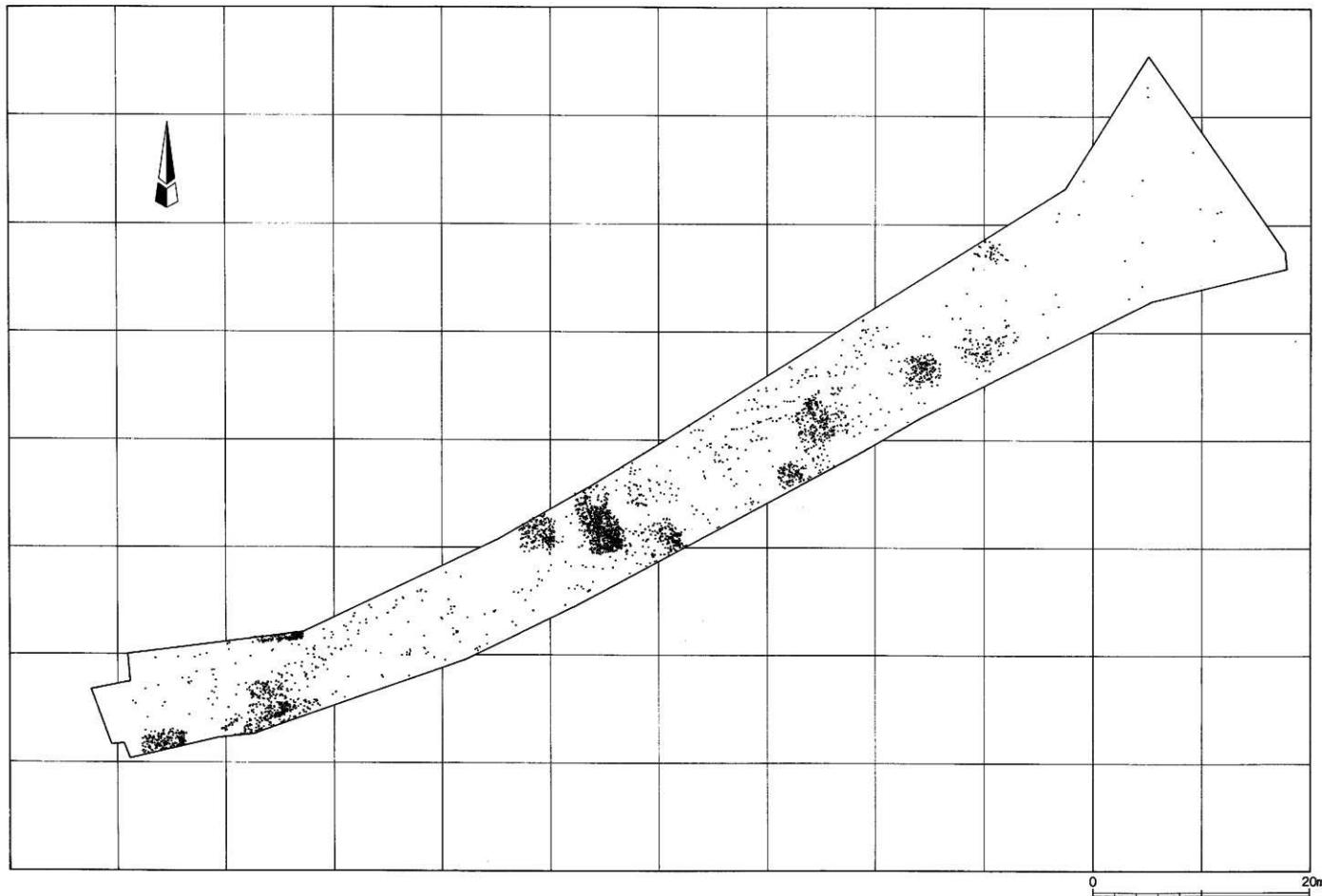
遺跡は南北に細長い尾根上に立地することから、遺跡の範囲は南北方向に広がりをみせるものと思われる。調査区は道路幅約10mと限定されていたために、遺跡の一節を調査したに過ぎず、遺跡の全体像を把握するには至っていない。

第6節 基本層序

本遺跡は、尾根上に立地しているため、遺構確認面までは上層の堆積は浅く、50cm足らずのところが多くみられる。そのため、基本層序はおおよそ3層ほどに分けられるのみで複雑な状況にはない。ここでは、遺跡西側の21-21グリッド付近と遺跡中央よりやや東側の44-68グリッドの十層堆積状況を概観する(第4図)。21-21グリッドでは3層に分かれ、第1・2層が耕作土となる。第3層は、暗褐色土(10YR3/3)で平安時

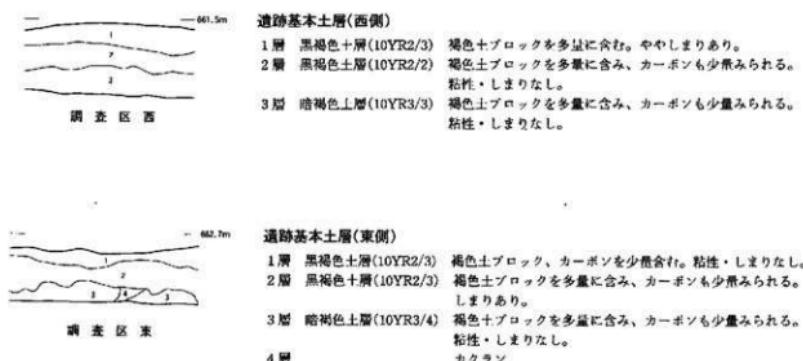


第2図 遺構配置図



第3図 遺物分布図

代以降の土器の包含層となるとなる。上層は耕作による搅乱を受けており、一定したレベルにはない。第4層は図示していないが、黄褐色土(10YR5/6)のローム層となり、本遺跡における平安時代以降の遺構確認面となる。また、3層と4層の境界付近が縄文土器の包含層となる。44-68グリッド付近はちょうど毛根頂部にあたり、遺構確認面までの土層堆積は浅い。堆積状況は、先に見た堆積とはほとんど同様な方を示す。



第4図 遺跡基本土層(S-1/20)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の地理的環境

紺屋遺跡の所在する北巨摩郡長坂町は、山梨県の北西部八ヶ岳南麓に位置している。八ヶ岳の標高岳を頂点とし、南北に細長い扇状の形となる。町域は八ヶ岳の山体崩壊期に起きた並崎火砕流によって形成された台地上に広がりをみせる。北半は急斜面となるが、南半は比較的緩やかな地形となっており、南端はこの淀瀬台地を釜無川の浸食作用によって形成された通称七里岩と呼ばれる浸食崖によって、大きく切られている。

八ヶ岳南麓には、比較的多くの湧水があり、これを水源とする小河川は南流し浸食作用によつていくつもの尾根を形成している。豊富な湧水を利用した灌漑用水や灌漑用溜池の開発によって八ヶ岳南麓地域でも有数の水田地帯となっている。

気候は内陸性で寒暖の差は大。年間降水量1100mm、気温は年平均11.5℃ほどである。

紺屋遺跡の所在する長坂下条地区は、町域南部のほぼ中央に位置し、標高660mほどを測る。東には旗川の支流である鳩川が南流し、西側を古井川、女取川などを集めた大深沢川がやはり南流して釜無川に合流している。両河川の間に台地が形成され、JR中央本線や県道茅野・小淵沢・菲崎線（通称 七里岩ライン）が南北に継続する。台地の幅は約2.5kmほどあるが、この台地上にも小河川による浸食によって大小の谷地形が形成されている。本遺跡は南北に細長い尾根上に立地するが、西側には谷があり水田として利用されている。東側にも北西から南東に向かって谷があり込んでおり、起伏の激しい地形となっている。

第2節 周辺の歴史的環境

八ヶ岳南麓の台地上には多くの遺跡が分布している。とくに長坂町内は遺跡が数多く知られ、これまでに200カ所ほどの遺跡が確認されている。紺屋遺跡の立地する台地上も遺跡分布が濃密な地域であり、数多くの遺跡が分布している（第5図）。長坂下条遺跡（9）は、縄文時代後晩期の配石墓群が発見されているが、山梨県下初の学術発掘調査がなされた遺跡として著名である（大川 1941）。また、現山梨県酪農試験場地内にある酒呑母遺跡は、山梨県教育委員会によって1995～96年にかけて発掘調査が実施され、縄文時代前期から中期の住居跡100軒以上が発見されている（山梨県教育委員会 1997）。また、長坂氏の屋敷とされる長坂氏屋敷跡（町指定史跡）（10）は、東西60m、南北80mほどの範囲に土塁と空堀が巡っている。詳細は不明であるが、戦国以前の遺構であると推定されている。

紺屋遺跡周辺でも、県営広域營農圃地農整備事業に伴う発掘調査において、龍角西遺跡（24）、北村遺跡（18）などが発掘調査されている。

龍角西遺跡は、紺屋遺跡の北東に位置し、2年次にわたって発掘調査が行われている（村松 1999）。1997～98年にかけて行われた発掘調査は、遺跡北側に当たる宮川右岸台地上を調査し、古墳時代前期末から中期の堅穴住居跡10軒、平安時代の堅穴住居跡5軒、古墳時代ないしは平安時代の掘立柱建物跡3棟などを発見している。また、1991年には隣接地で発掘調査が実施されており（25）、古墳時代中期の住居跡が数件発見され、古墳時代前期末から中期にかけて当該地域としてはまとまった集落の調査例となった。1998～99年にかけて実施された2次調査では、谷部と紺屋遺跡の立地する台地の東端を調査している。平安時代の堅穴住居跡2軒、中世の建物跡2棟、掘立柱建物跡3棟、溝、土坑、道路状遺構などが発見されている。

北村遺跡は、紺屋遺跡から西へ約300mほどの所、谷を挟んだ尾根上に位置し、1994～95年にかけて発掘調査が実施されている（長坂町教育委員会 1995）。古墳時代前期の方形周溝墓6基がほぼ完全な状態で発見され、墳丘上には土器が供獻されたままの状態で遺されていた。

紺屋遺跡から400m北東には、北村東遺跡（17）があり、縄文時代、古墳時代前期、平安時代の土器が採



第5図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 : 10,000)

集されている。また、紺屋遺跡調査時の踏査や土地所有者の話から、かつて塚状の高まりがいくつかみられたといい、富士塚ないし北村遺跡のような方形周溝塚であると推定される。このマウンドは松の抜痕の際、ほとんどなくなってしまい、現在ではその痕跡をわずかに確認できるだけである。

その他、紺屋遺跡周辺には中世のものと思われる屋敷跡が点在する。紺屋遺跡西側に位置する北村遺跡に隣接して三井氏館跡がある(20)。中世末頃のものと思われるが、現在土壙が確認されるだけで詳細は不明である。南側には、相吉氏屋敷(22)、上松(植松)氏屋敷(21)の存在が知られるが、内容は明らかではない。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 紺屋遺跡 繩文・平安・中世 | 22 相吉氏屋敷跡 中世 |
| 2 酒香場東遺跡 繩文・弥生・平安 | 23 相吉遺跡 中世 |
| 3 東村A遺跡 繩文・平安 | 24 舂角西遺跡 繩文・古墳・平安 |
| 4 東村B遺跡 古墳・平安 | 25 舂角遺跡 古墳・平安 |
| 5 中村遺跡 古墳・平安 | 26 原町北遺跡 平安・中世 |
| 6 鎌田遺跡 平安 | 27 原町遺跡 平安 |
| 7 西村遺跡 古墳・平安 | 28 上久保北遺跡 繩文・平安 |
| 8 中反遺跡 繩文・平安 | 29 山本遺跡 繩文 |
| 9 長坂上条遺跡 繩文・平安 | 30 上久通常跡 繩文 |
| 10 長坂氏屋敷跡 中世 | 31 下巣敷北遺跡 繩文・平安 |
| 11 大久保北遺跡 繩文・中世 | 32 新居遺跡 繩文 |
| 12 寺前遺跡 繩文・平安・中世 | 33 田中氏屋敷跡 中世 |
| 13 渋沢 上町遺跡 繩文 | 34 上日野遺跡 繩文・平安 |
| 14 西巣敷遺跡 古墳 | 35 上日野A遺跡 繩文・平安 |
| 15 和田遺跡 弥生・平安 | 36 上日野B遺跡 繩文・平安 |
| 16 長坂下条・藤塚 | 37 上日野C遺跡 繩文・平安 |
| 17 北村東遺跡 繩文・古墳 | 38 清水頭北遺跡 繩文・平安 |
| 18 北村遺跡 弥生・古墳 | 39 下巣敷遺跡 繩文 |
| 19 西久保遺跡 繩文 | 40 下原遺跡 繩文 |
| 20 三井氏屋敷跡 中世 | 41 原町農業高校前遺跡 繩文 |
| 21 上松氏屋敷跡 平安 | |



第6図 遺跡周辺の地形

第3章 遺構と遺物

第1節 平安時代の遺構と遺物

1号堅穴住居

遺構の概要（第7図）

本住居跡は調査区のはば中央南寄り、X=30、Y=60グリッドを中心に位置し、西には4号住居が、北側には14号溝が隣接する。住居の南側は調査区外となっており、全体の約7割程度の調査面積となる。住居南西隅付近上部を15号溝によって切られている。確認面から床面までの深さは東側で52cm、西側で54cmを測り、住居の遺存状態は良好であった。平面プランは西壁がやや長くなる台形を呈する。カマドを東壁のやや南寄りにもつ。さらに南寄りの床面からは旧カマドが検出されている。主軸をN-70°Eにとり、東西長4.2mを測る。床には幅15~16cm、深さ約8cmほどの周溝が巡っている。周溝は掘り方底面まで達していないことから、埋め残して周溝を形成しているようである。また、北側奥のカマド袖石は旧周溝を塞ぐように据えられており、新カマド構築時に周溝の一部を埋め戻していたようであるが、どこまで埋め戻していたかは明らかにできなかった。旧カマド南側ではカマドの約45cmほどを掘り残している。床面は硬化した部分はほとんどみられなかった。覆土および床面には焼土・炭化物が多くみられ、焼失家屋であると思われる。住居中央では多量の焼土とともに炭化材が、北西隅付近では上屋構造の部材と思われるような形状をした炭化材もみられた。床面には周溝のはか柱穴などの付属施設は確認されていない。

カマド（第9・10・11図）

東壁のやや南寄りに確認されている。また、さらに南からは旧カマドの痕跡が確認された。カマドは石組み粘土覆いの構造をしている。カマド前面には、カマドの構築材として使用されたと思われる人頭大の礫がまとめられたような状態で発見された。また、天井石と思われる細長い石がカマド南脇にみられた。袖には扁平な石が、それぞれ3石ずつ使用されていたようであるが、北側は2石、南側は1石が抜き去されていた。カマド燃焼部中央よりやや奥まったところに、支脚石が立った状態で確認された。煙道部分は、住居プランよりも若干張り出している。旧カマドは、新カマドより南へ60cmほど離れて確認された。造り替えるによる削平のため、燃焼部底部と煙道の張り出しが残るのみであった。カマド南半分は調査区外にあり、規模は不明。袖石の掘り方がみられることから、新カマドと同様な構造をもっていたものと考える。

遺物出土状況（第8・9図）

土器類をはじめとする遺物は小破片が多く、床面から浮いた状態で発見され、床面直上からの遺物はほとんどみられない。そのうち第12図15は、皿形土器で散乱状態にはあったが、床面直上から出土している。カマド内からは、多量の甕が出上しており、カマド廃棄時に甕も廃棄されたものと考えられる。また、カマド南脇からも甕が多く出土している。

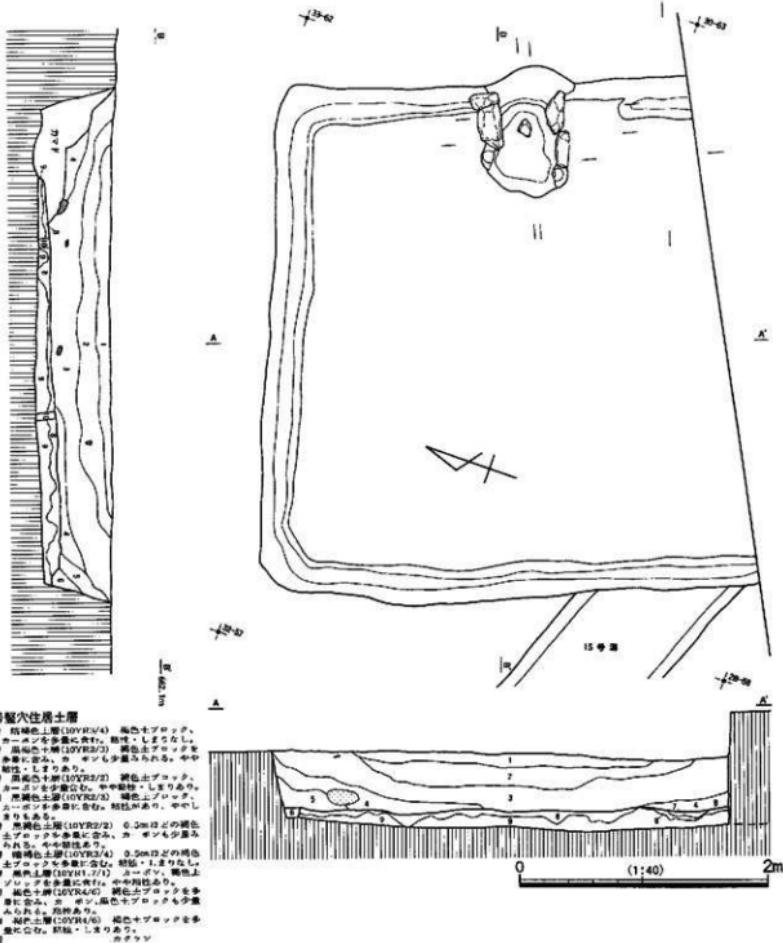
出土遺物（第12図）

1~7は、甲斐型坏である。内面には暗文をもつが、みこみ部まで暗文はみられない。8~9は黒色土器で、内面を丁寧に磨く。8の外面には墨書きがみられるが、文字かどうかかもわからず判読不明。11~12は須恵器と土師器の蓋である。13~14~16は甕で、13だけが小形である。14~16が大形の甕で、いずれも外側はハケ調整を行わず、ハラ削り後にナデ調整を施している。底部にも木葉痕はみられない。15は土師器皿で、内面には渦巻き状に暗文がみられる。底部は回転ハラ削りを行う。底部には紐状の压痕と「東」の墨書きがみられる。

2号堅穴住居

遺構の概要（第13図）

本住居跡は調査区のはば中央よりやや西側の北寄り、X=31、Y=48グリッドを中心に位置し、住居北西

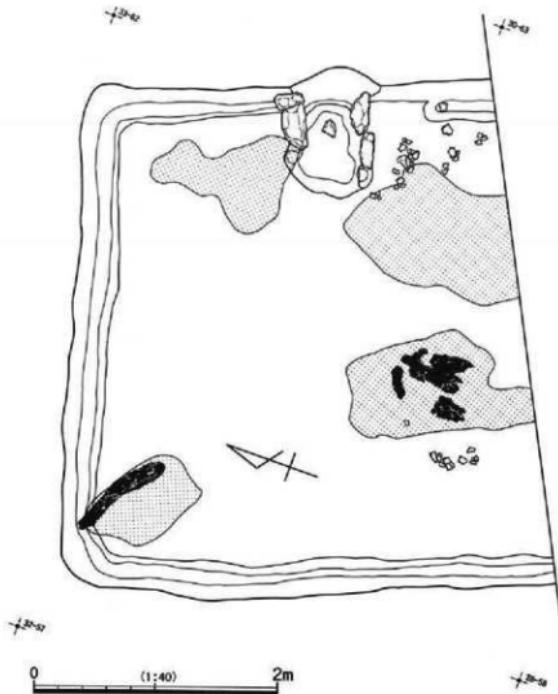


第7図 1号堅穴住居平面図

隅の部分は調査区外となる。東には3・4号住居が隣接する。住居のはば中央を南東から北西方向に向かって、15号溝によって深さ15cm程度切られている。カマドは東壁の南寄りに構築されており、主軸をN-87°Eにとる。住居プランは方形を呈し、東西3.6m、南北は東壁寄りで3.5mほどを測る。深さは東側で50cm、西側で27cmほどである。東壁は崩落が激しく、地山褐色土が住居内東側に厚く堆積していた。床はカマド付近を中心化面がみられた。柱穴等の付属施設は発見されていない。

カマド（第14・15図）

カマド周辺には多くの礫が散乱しており、犬井に架けた扁平な石もカマド上にみられたが、原位置をとどめるものはみられなかった。また、カマド南には礫がまとめられているようであったが、これら全てがカマドの構築材として用いられた右かどうかは明らかではない。カマドの運行状態は良いものではなく、南側袖



第8図 1号竪穴住居遺物出土状況

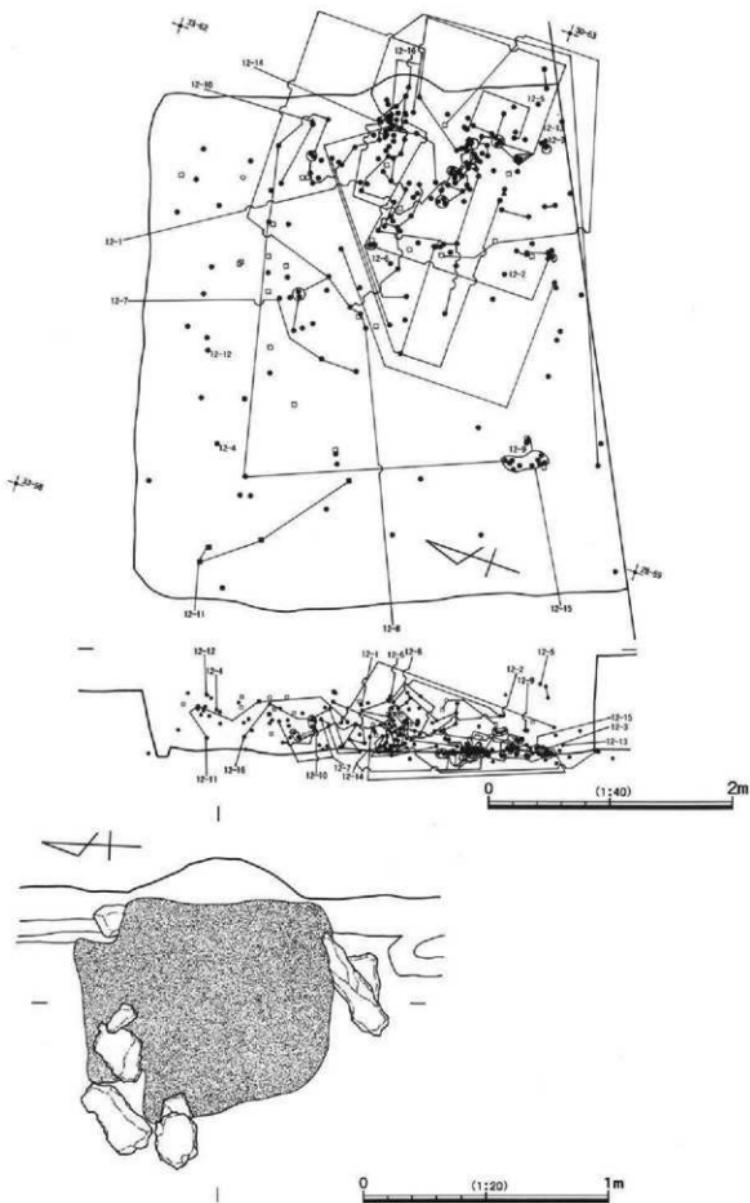
が3石、北側袖が1石原位置をとどめるにすぎない。燃焼部および袖石の擺り方は住居内に擺られており、煙道の一部が住居より若干張り出している。カマド南脇では、床面より一段高くなった部分が認められた。高まりは平坦にはなっておらず、屋内高床部とするには問題があり、どのような機能を果たしたのかは不明である。

遺物出土状況（第13・14図）

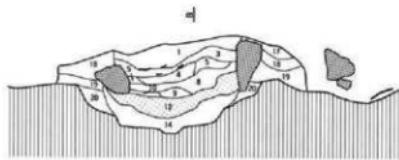
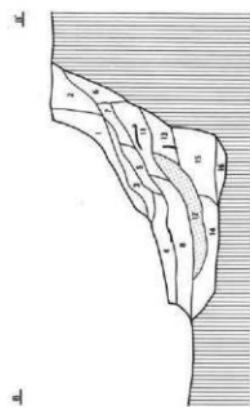
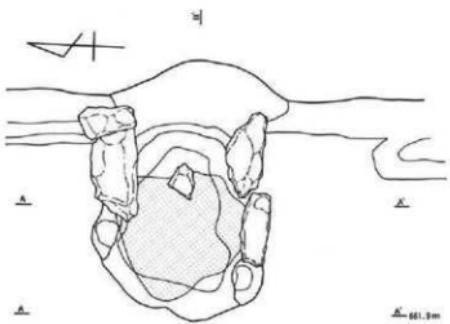
遺物は散在した状態で発見され、覆土上層のものも多く、床面直上の遺物は少ない。床面には土師器皿類、甕の破片などがみられた。住居西側からは刀子が出土している。カマド内では、燃焼部中央付近から甕やカマド形土器の破片が出土している。

出土遺物（第16・78図）

第16図1～5は土師器壺である。内面に暗文はみられないが、外面は手持ちヘラ削りされている。4は体部下半に「千」の墨書が、底部にも墨書がみられるが文字は不明である。6は土師器皿であり、体部下半に墨書がみられるが、一部しか残存しておらず判読不明。7～14は黒色土器で、口縁部が外反しながら口唇部が尖るものと（7・8）、肥厚しているものがある（9・10）。13は胴部に墨書がみられるが判読不明。15は須恵器壺、16は須恵器長頸瓶の口縁部である。17・18はカマド形土器の破片である。このほか、すべてでも17点ほどがみられるだけである。19～23は墨書き土器の破片であるが、いざれも小破片のため判読不明。そのうち23は、甕の破片であるが、内面に墨書きがみられる。24・25は甕の口縁部から胴部の破片であるが、内面は横ハケ、外側は縦ハケ調整されている。第78図1・2は断面円形の棒状鉄製品で、2は鉄錆の茎部の可能



第9図 1号堅穴住居遺物分布図・カマド検出状況



I号竪穴住居 カマド土層

- 1層 黒褐色土層(10VR2/3) 黏土ブロック、褐色土ブロックを多量に含む。やや堅。
- 2層 黑褐色土層(10VR2/3) 黏土ブロックを多量に含む。やや堅性。
- 3層 黑褐色土層(10VR2/3) 黏土を堅化に含み、粘土ブロック。カーボンも少しある。
- 4層 黑褐色土層(10VR2/3) 黏土ブロック、カーボンを多量に含む。地主も少しある。
- 5層 黑褐色土層(10VR2/3) 黏土を堅化に含み、粘土ブロックを多量に含む。カーボンも少しある。
- 6層 明褐色土層(10VR3/4) 黒褐色土層(10VR3/4) 黒褐色土ブロックを少量含む。やや堅性。しまりあり。

7層 明褐色土層(10VR3/3) 黒土ブロック、褐色土ブロックを多量に含む。やや堅。

8層 暗褐色土層(7.5VR2/3) 黏土ブロック。地主を少量含む。カーボンも少し含む。

9層 暗褐色土層(7.5VR2/3) 黏土ブロック。地主を少量含む。カーボンも少し含む。

10層 暗褐色土層(7.5VR2/4) 黏土ブロック。地主を多量に含む。カーボンも少しある。

11層 黑褐色土層(10VR2/3) 黏土、粘土ブロック。褐色土ブロックを多量含む。堅性。

12層 表褐色土層(5VR2/3) 黏土。

13層 暗褐色土層(10VR2/3) 黑褐色土ブロックを少量含む。地性。しまりなし。

14層 暗褐色土層(10VR2/3) 黑褐色土ブロックを少量含む。地性。しまりなし。

15層 黑褐色土層(7.5VR2/3) 黑褐色土ブロックを少量含む。地性。しまりなし。

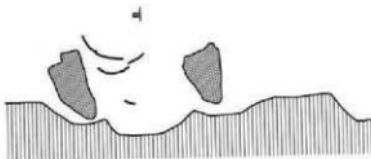
16層 暗褐色土層(7.5VR2/3) 黑褐色土ブロックを少量含む。地性。しまりなし。

17層 黑褐色土層(10VR2/3) 黑褐色土ブロック。カーボンを多量に含む。地主も少しある。

18層 黑褐色土層(10VR2/3) 黑褐色土ブロック。地主を少量含む。地性あり。

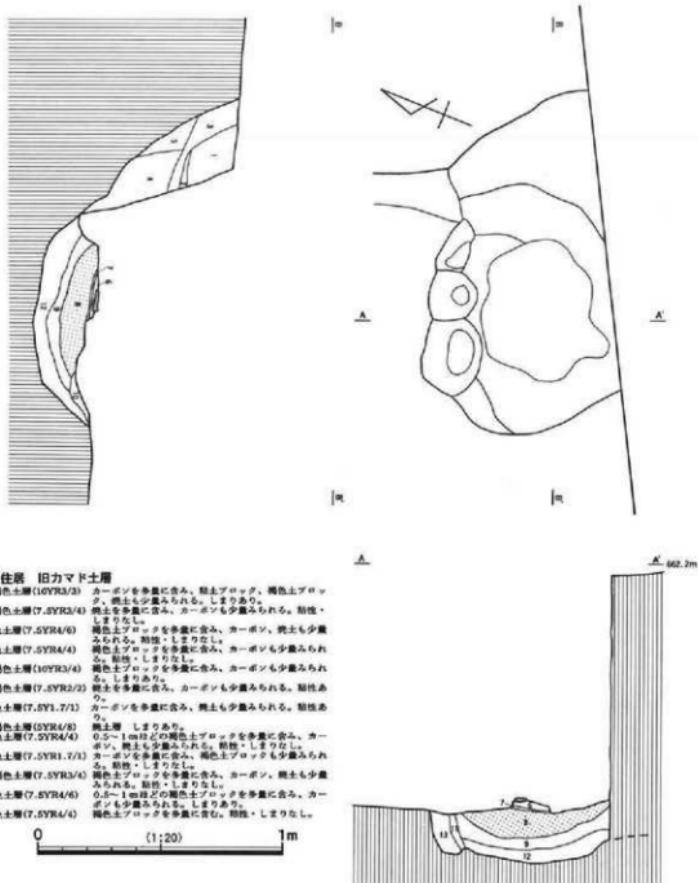
19層 黑褐色土層(10VR2/3) 黑褐色土ブロック。地主を少しある。地性あり。

20層 黑褐色土層(10VR2/3) 黑褐色土ブロックを多量に含む。地性。しまりなし。



0 (1:20) 1m

第10図 1号竪穴住居カマド平面図



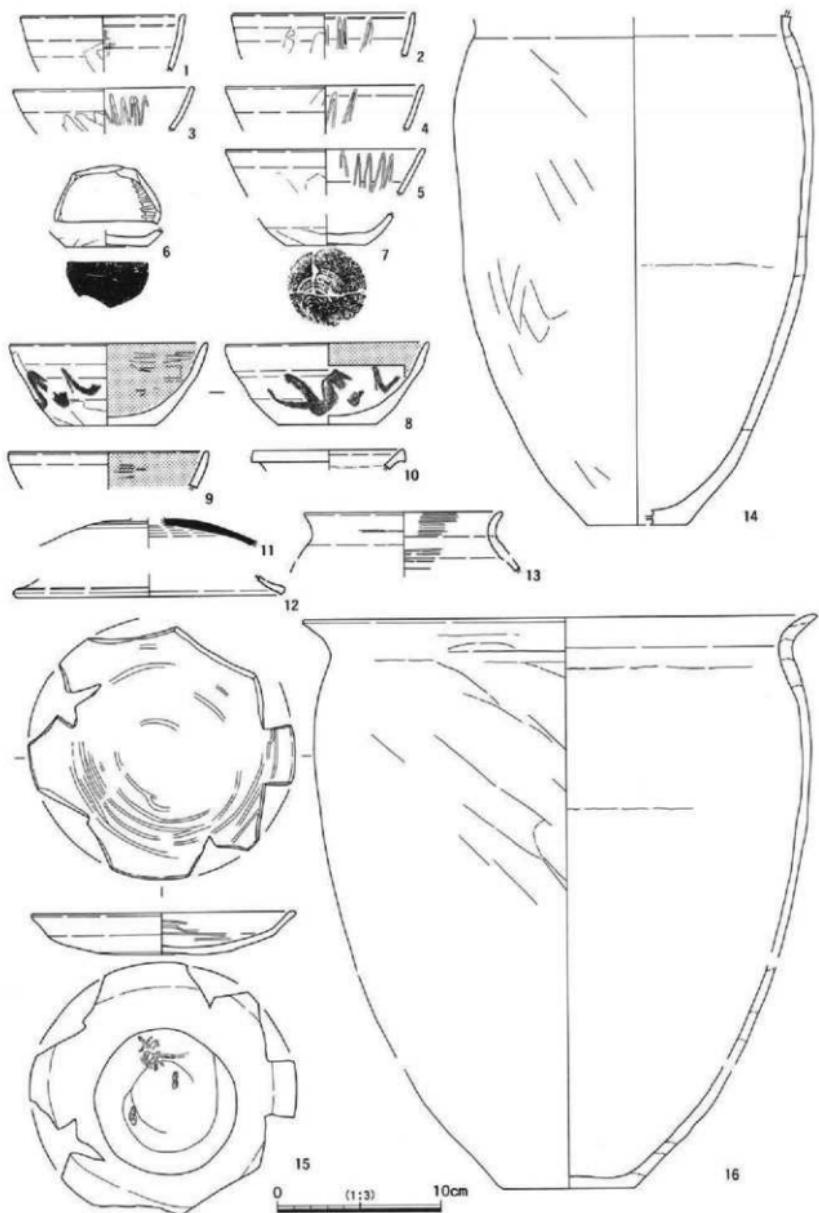
第11図 1号堅穴住居旧カマド平面図

性があるが、1は両端とも異方向に直角に曲げられており、用途不明である。

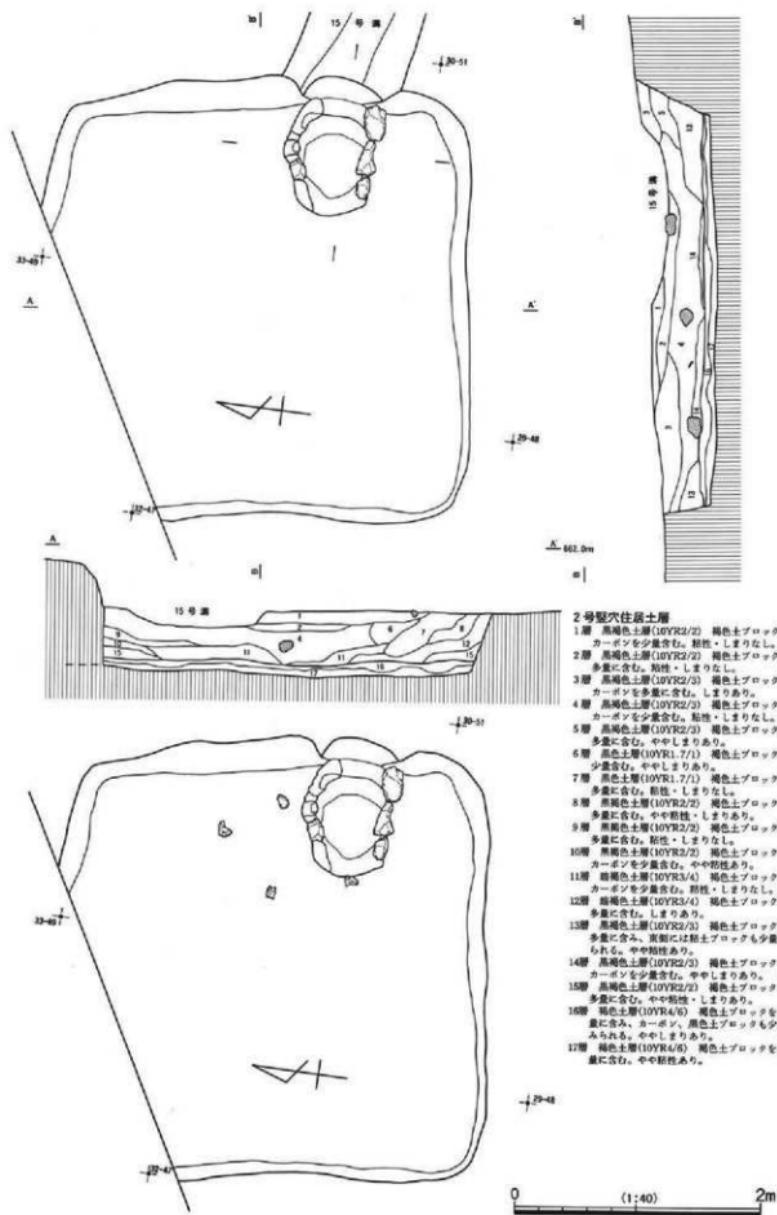
3号堅穴住居

遺構の概要（第17図）

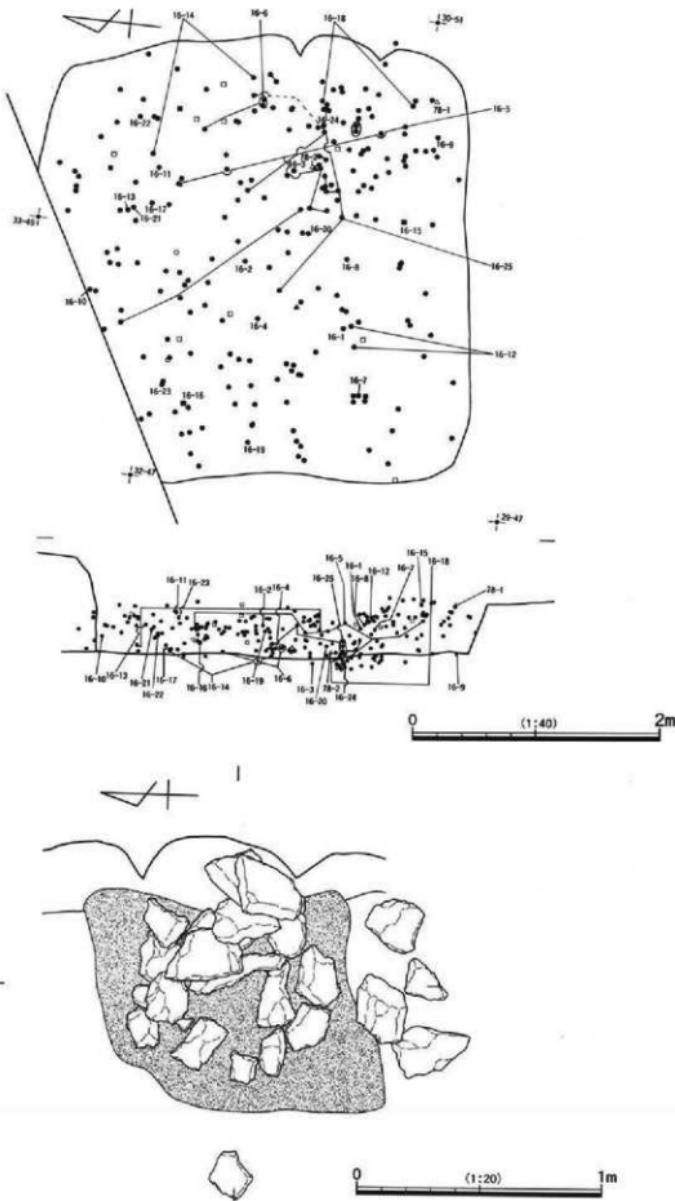
本調査区のはば中央の北側、X=34、Y=54グリッドに位置する。住居北西隅は調査区外となり、南側約1/3ほどは4号住居に切られている。住居南東壁の一部も15号溝に切られている。住居の掘り込みはあまり深くなく、東側25cm、西側28cmほどである。主軸をN-84°-Eにとり、東西長3.35mほどを測る。床は全体に硬化面がみられた。カマドを東壁中央付近にもち、北側には溝接して土坑が掘られている。土坑は南北長64cm、東西長44cm、深さ15cmを測る。カマド脇に設置されていたことを考えると貯蔵穴として機能していたことが想定される。土坑北側から壁に沿って周溝が掘られている。周溝は北壁中央付近で終息しており、西壁などにはみられない。周溝底面幅15cm、深さ8cmほどで概して浅いものである。その他、柱穴等の付属



第12図 1号竖穴住居出土土器



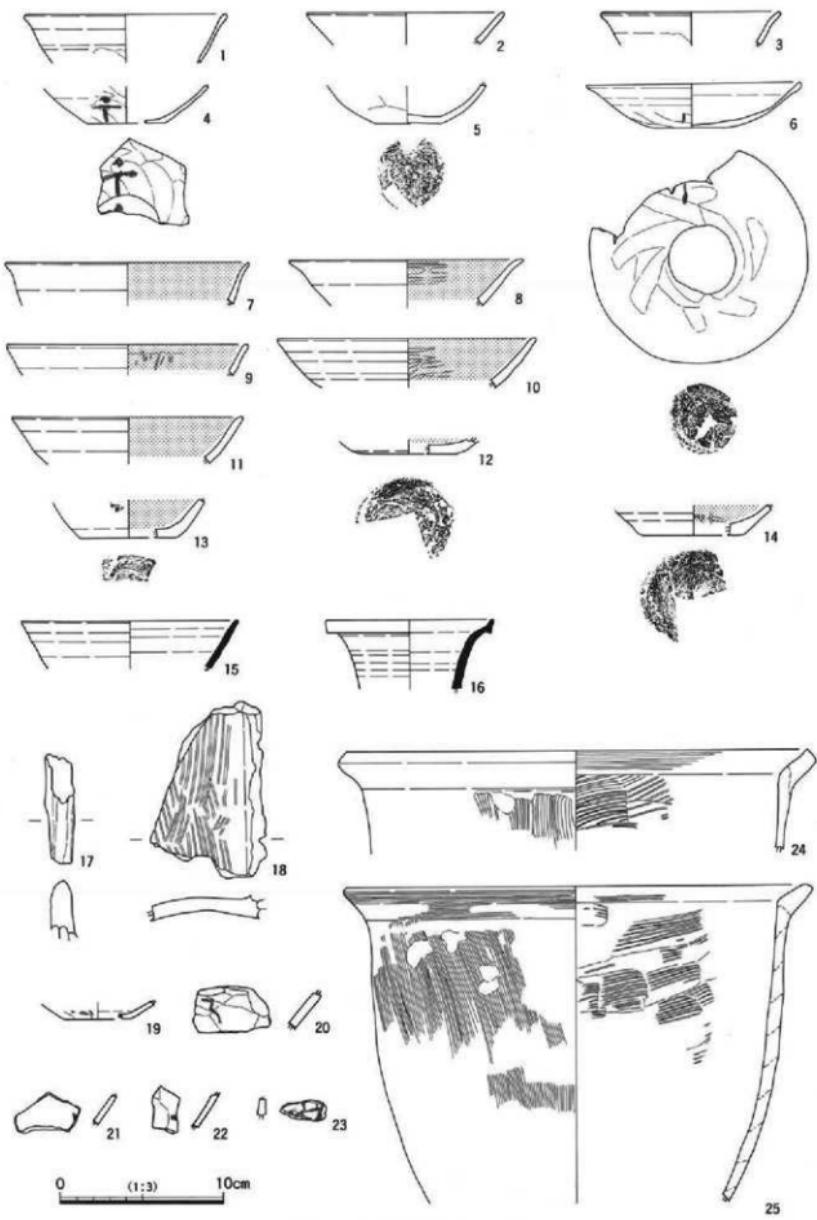
第13図 2号竖穴住居平面図・遺物出土状況



第14図 2号竪穴住居遺物分布図・カマド検出状況



第15図 2号堅穴住層力マド平面図



第16図 2号竪穴住居出土土器

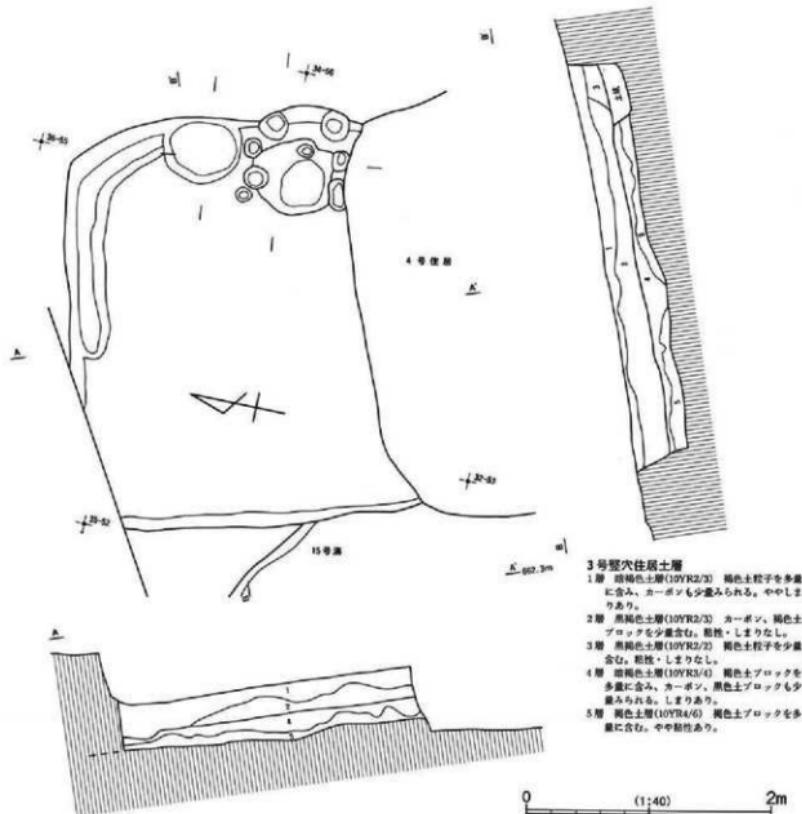
施設は確認されていない。

カマド（第19図）

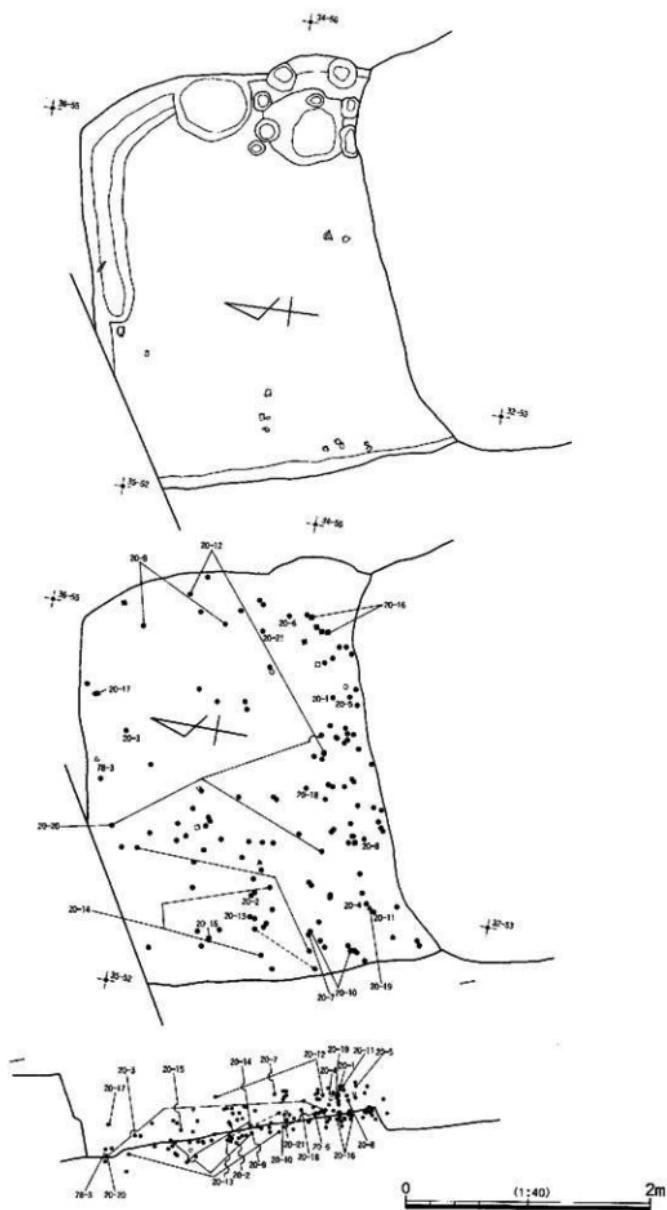
東壁の中央付近に位置するが、粘土混入土がみられるほか周辺に礫が散乱しており、石組み粘土覆いの構造であると思われるが、カマドの遺存状態は非常に悪かった。カマド内には構築材と思われる礫が3個ほどみられるだけで、原位置をとどめるものはみられない。燃焼部中央付近では、須恵器坏を伏せた上に扁平な礫に乗せており、須恵器坏は押しつぶされたような状態で出土している。カマド廃棄に当たって人為的に廃棄したとも考えられるような状況であった。カマドの掘り方は良好に検出された。両袖とも3石ずつの袖石を持っていたようであり、中央には支脚を設置したと考えられる掘り込みも確認された。袖の奥側の石は一部壁を掘り込むように設置されており、煙道に続く部分は住居壁のラインより張り出している。

遺物出土状況（第18図）

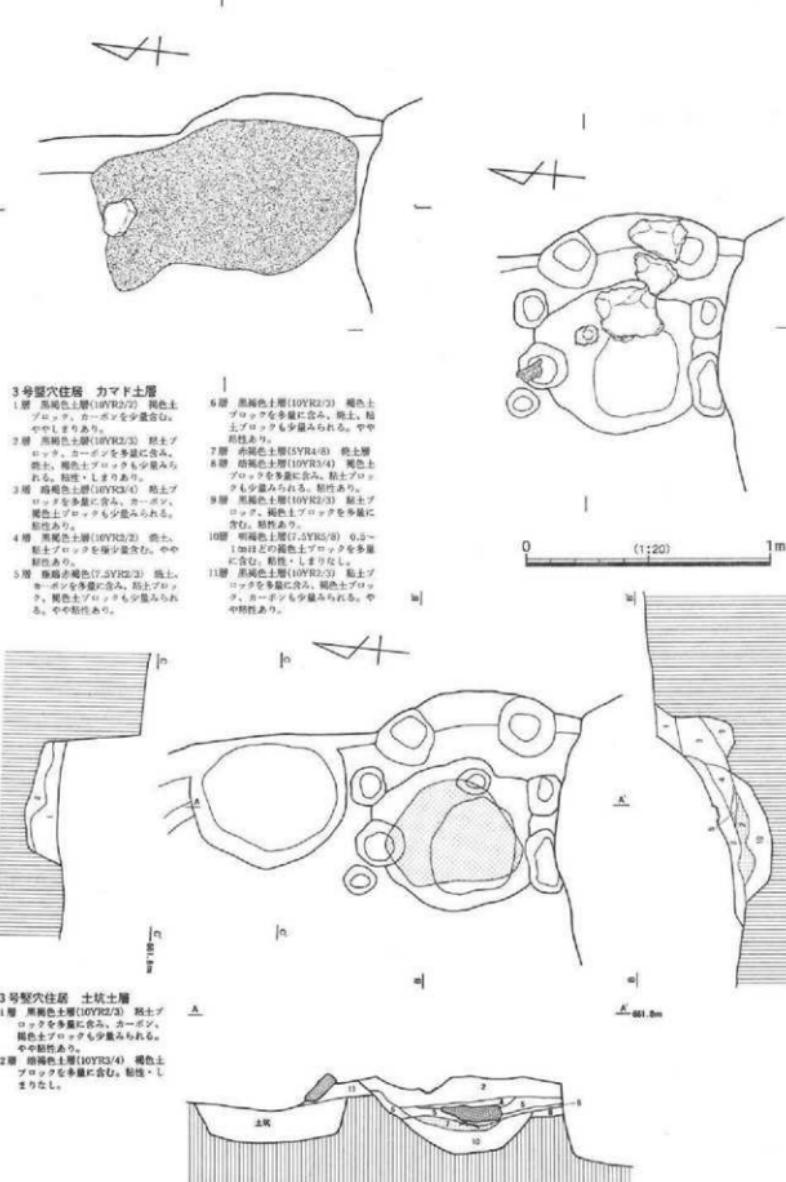
住居南半を4号住居によって削平されていることもあり、遺物の出土量は概して少なく、床面から浮いたものが多くを占める。床面付近には、壺、甕の破片が僅かではあるがみられる。また、住居北側からは刀子が出土している。カマド内からは、先にも述べたように伏せられた状態の須恵器坏と正位の土師器坏が出土している。2個体とも完形品ではないが、かなりの残存率を示す。



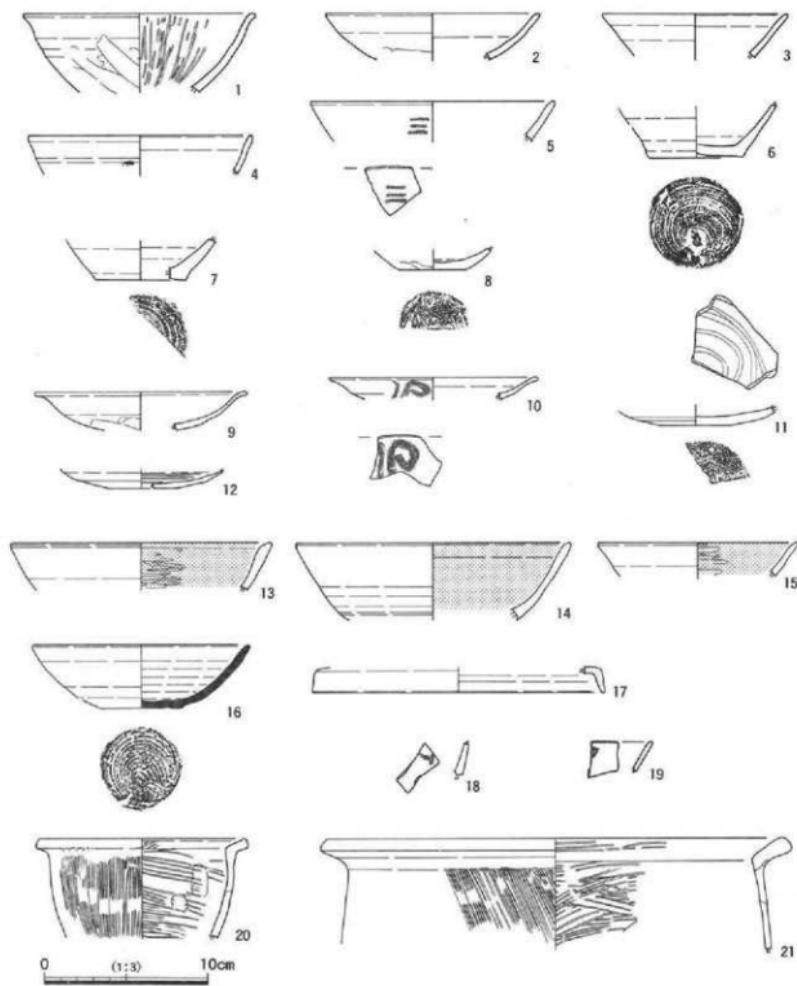
第17図 3号竖穴住居平面図



第18図 3号竪穴住居遺物出土状況・遺物分布図



第19図 3号堅穴住居カマド平面図・土坑平面図



第20圖 3号竪穴住居出土土器

出土遺物（第20・78図）

第20図1～8は土師器環であるが、内面に暗文をもつものともないものがみられる。4・5には体部外側に墨書きがみられる。体部下半はヘラ削りされたものとナデ調整が行われるものがある。ナデ調整が施されるものは回転糸切り痕を残し、体部下半をヘラ削りするものは、底部も回転糸切り後、ヘラ削りされている。9～12は皿形上器である。9は体部下半を手持ちヘラ削りしているが、11・12は回転ヘラ削りをする。10は口縁部から体部にかけて墨書きがみられるが判読不明。13～15は黒色上器である。16は須恵器環であり、底部は回転糸切り未調整である。17は灰釉陶器短頸壺の蓋であると思われる。18・19は墨書き土器破片であるが、18は土器、19は灰釉陶器でいずれも判読不明。20・21は變形土器で、小形のものと人形のものであり、整形技法はいずれも同じである。第78図3は刀子で、先端部および茎部を欠損する。

4号堅穴住居

遺構の概要（第21図）

調査区の中央よりやや西側、X=31、Y=54グリッドに位置する。北には3号住居があり、3号住居の一部を掘り下げて住居を構築している。住居南西半分を15号溝によって深さ20cmほど削平される。東側には1号住居が、西側には2号住居が位置する。調査幅の中央に位置し、本遺跡において全般調査できた唯一の堅穴住居跡である。掘り込みは3号住居より10cmほど深く、東側で55cm、西側で40cmを測る遺存状態は良好であった。上軸をN-72°-Eにとり、平面プランは東壁がやや長い方形を呈し、東西長3.75m、南北長4.0mを測る。床面積は11.42m²を測る。カマドは東壁のやや南寄りに造られている。セクションベルトを残し掘り下げを行った段階で、南壁と西壁に沿って30～50cmの幅で地山上の高い部分が見つかり、屋内高床部の施設ではないかと考えられた。しかし、土層の観察によりやや硬質の褐色土が水平に堆積しているのが確認され、住居の建て替えに伴う張り床であることが推定された。このことは掘り方調査の際、西壁に旧カマドの痕跡が確認されたことからも裏付けられた。拡張後の住居の床は、東壁を基準として3方向に30～50cm程度拡張している。拡張と同時に西と南側は旧住居の床面を褐色土によって約20cmほど埋め戻し張り床としている。張り床は、それはど顯著な硬化は認められなかった。住居の拡張にあたっては、旧住居の床の掘り直しあらず埋め戻して構築していた。住居内には柱穴、周溝などの付属施設は確認されていない。

カマド（第23図）

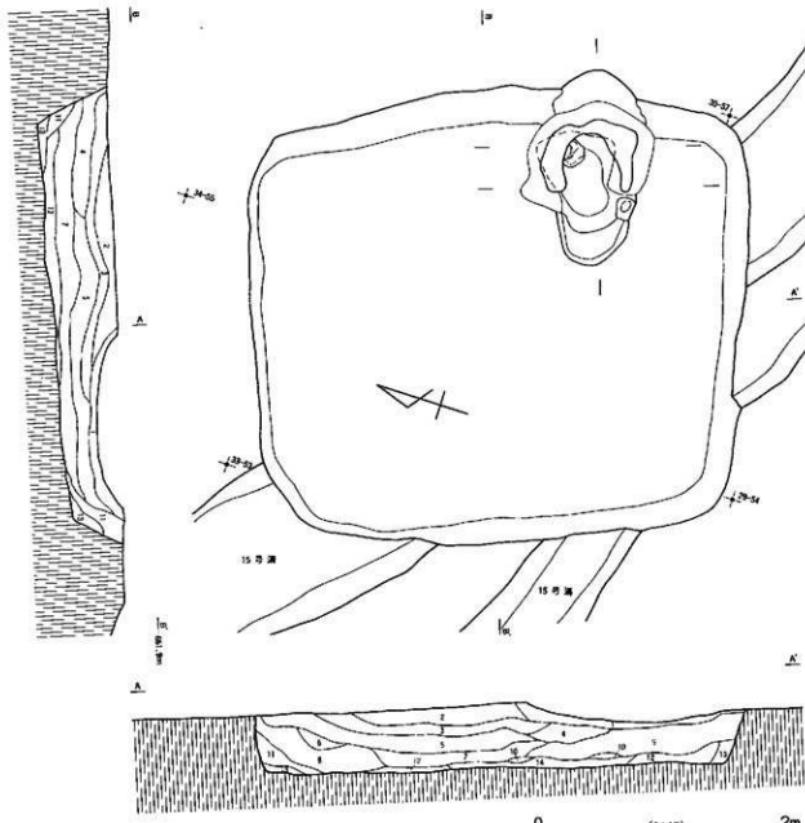
拡張住居のカマドは、粘土が全体を覆い、良好な状態で確認された。天井に架けた石は取り去られていたが、袖部の粘土は南袖の一部の石組みが露出しているだけで、ほとんどを覆うような状態で発見された。袖石は扁平で細長い石が使用されており、南袖とも3石ほどを立てている。燃焼部、袖石とも住居内に掘られており、煙道の一部を張り出させている。

遺物出土状況（第22図）

本住居からは多くの土師器を中心とした遺物が出土しており、取り上げ点数754点を数える。黒色土器の大形破片がカマド付近の壁際から出土している。また、カマド前面とカマド南脇には変形上器の破片が、散乱していた。

出土遺物（第25・26図）

第25図2～11は土師器環である。6は内外面とも摩耗が激しく整形技法は不明であるが、2～5、11は胴部下半を手持ちヘラ削りしている。7～10はナデによる調整を行っているようである。いずれも内面には暗文は認められない。2は「山」の刻書が、11には判読不明の墨書きが体部下半に認められる。12～15は皿形上器である。体部下半および底部は手持ちヘラ削りされている。12・13には外面に墨書きがみられ、13は「長」、12は判読不明であるが同一の文字である可能性もある。16～26は黒色土器であるが、いずれも内面はきれいに磨かれている。また、内面に暗文をもつもの（18・19・23）ともないものがみられる。25は高台付杯である。16・19・21・26には外向に墨書きがみられる。27・28は土師器環の小破片であるが、墨痕が残る。いずれも判読不明。第26図1～3は灰釉陶器であり、体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる（3）もみられる。4～13は變形土器で、小形のもの（4・5）と大形のものがみられる。整形技法は両者とも同様に、外向縫ハケ、内面横ハケによる調整がされ、底部には木葉痕を残す。



4号堅穴住居

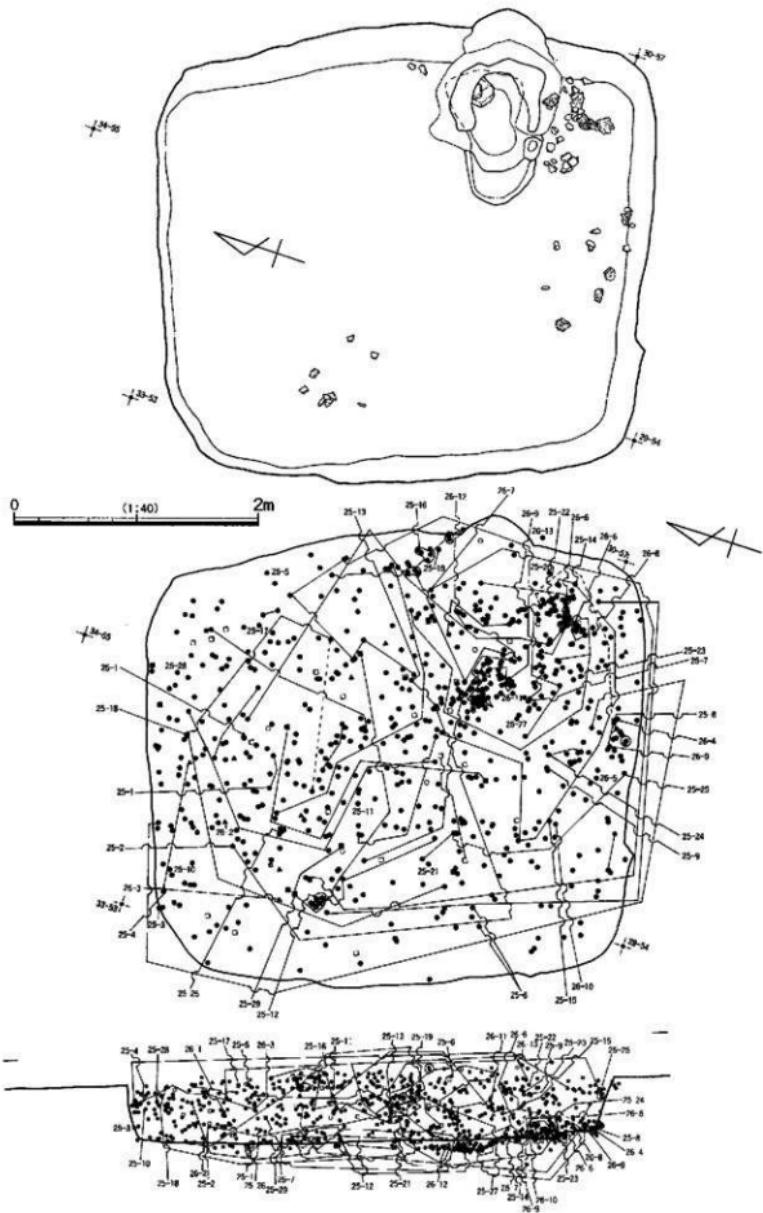
- 1層 塗地内十間(10YVR2/4)、漆色上ソロック、カーボンを多量に含み、黒褐色ブロックも少量混入される。鉄筋、トモダチシーベルト、モルタル等の付着物がある。
- 2層 塗地内十間(10YVR2/4) 漆色上粘土を多量に含み、カーボンを少量に含む。
- 3層 塗地内十間(10YVR2/4) 塗地内ソロックを少量含む。
- 4層 塗地内十間(10YVR2/3) ルーバン、漆色上粘土含む。
- 5層 塗地内十間(10YVR2/4) 2.5~3cm以上の黒褐色+ソロックを多量に含み、カーボンを少量に含む。
- 6層 塗地内十間(10YVR2/2) 漆色上ソロック、カーボンを少量含む。しきりあり。

- 7層 黒褐色土層(10YR2/3) カーボンを多量に含み、黒褐色ブロックも少量混入される。鉄筋、トモダチシーベルト、モルタル等の付着物がある。
- 8層 黒褐色土層(10YR2/3) カーボン、漆色ナソロックを多量に含み、カーボンを少量混入される。
- 9層 黒褐色土層(10YR2/3) カーボン、漆色土ソロックを多量に含む。やや特徴あり。
- 10層 黒褐色土層(10YR2/3) 漆色ナソロック(10YR2/4)を多量に含む。
- 11層 黒褐色土層(10YR2/2) カーボンを多量に含み、黒褐色ブロックも少量混入される。

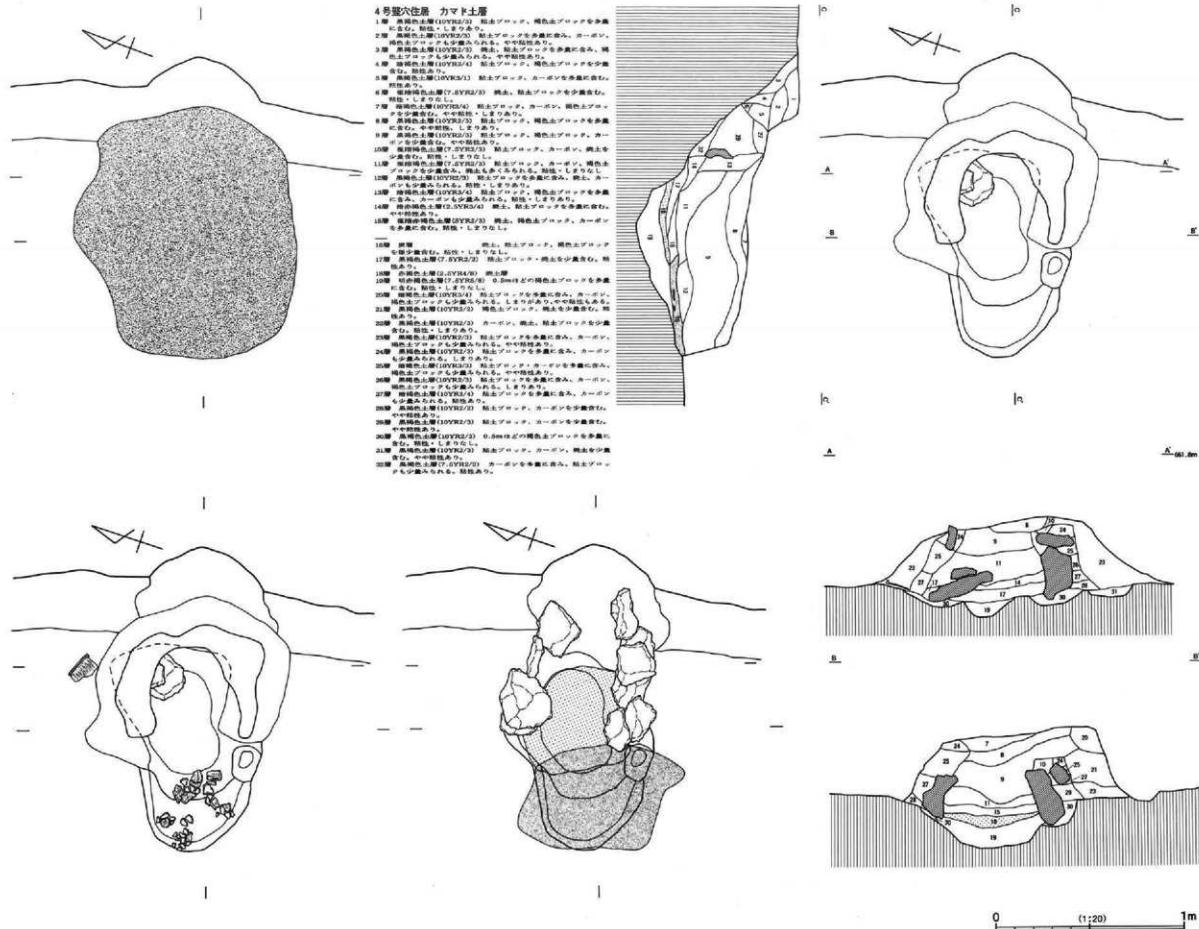
- 12層 黒褐色土層(10YR2/3) 0.5~1mほどの黒褐色ブロックを多量に含み、カーボンを少量混入される。やや特徴あり。
- 13層 黑褐色土層(10YR2/3) カーボン、漆色ナソロックを多量に含む。やや特徴あり。
- 14層 塗地内十間(10YR2/3) 漆色ナソロック、漆色上ソロックを少量含む。

第21図 4号堅穴住居平面図

旧住居は拡張後の住居と主軸を一にし、東西3.2m、南北推定3.2mを測るが、北側の壁はコーナー部を除いて現存しない。東側と北側では新しく掘られた住居が旧住居の床面と同レベルまで掘り下げ床としていることから、北側については旧住居の壁面は削平を受けており、僅かに残る北西コーナーの痕跡から住居のプランを推定するほかはない。残存部から推定される床面積は、7.95m²となる。床は全体的に硬化面がみられたものの、北西コーナー付近では軟弱であり、床の検査が困難であった。住居内に柱穴等の付属施設は確認されなかった。粘土ブロックを混入したカマドの掘り方が西壁南コーナー付近から確認され、位置的に旧住



第22図 4号竪穴住居遺物出土状況・遺物分布図



第23図 4号竪穴住居力マド平面図

居のカマドであると判断された。

カマド（第24図）

旧住居に伴うカマドは、西壁南コーナー近くに造られていた。住居拡張の際、ほとんど削平され、燃焼部の底部と袖石の振り方および粘土ブロックが一部認められたにすぎない。

遺物出土状況（第22図）

旧住居の遺物は、それほど多くは出土していないが、第25図1の土師器壺、29の須恵器鉢が旧住居床面直上から出土している。その他は、小破片がほとんどである。

出土遺物（第25図）

1は上部器壺で、体部下半を手持ちヘラ削りし、底部には回転糸切り痕を残す。29は須恵器鉢の脚部破片である。

5号堅穴住居

遺構の概要（第27図）

調査区西端の南寄り、X=11、Y=14グリッドに位置する。住居南側は約半分が調査区外となる。おそらく平面プランは方形を呈するものと考えられ、主軸をN 74° Eにとる。東西長4.5mほどを測る。確認面から床面までの深さは、東で45cm、西で40cmを測る。カマドは他の住居の例では東壁の南寄りにあることから、調査区外にあるものと考えられる。壁際に高溝が巡り、調査区内においては全周する。周溝は複数して浅く、東壁付近では幅が広く底部で30cmほどあるが、北側、西側では10cmほどの幅となる。住居中央に径40cm、深さ20cm以上の土坑のような落ち込みが確認された。落ち込みの一部しか調査できなかったため、形態や性格等は不明であるが、土層断面観察では住居覆土に掘り込みの痕跡は認められず、落ち込みにも床が張られたような形跡はなく覆土も柔らかいため、住居に伴う施設と判断した。

遺物出土状況（第27・28図）

住居の約半分しか調査できなかったにも関わらず、遺物はまとまった量が出土している。東壁寄りでは黒色土器や甕がまとまって発見された。1点ではあるが、土鍾も出土している。

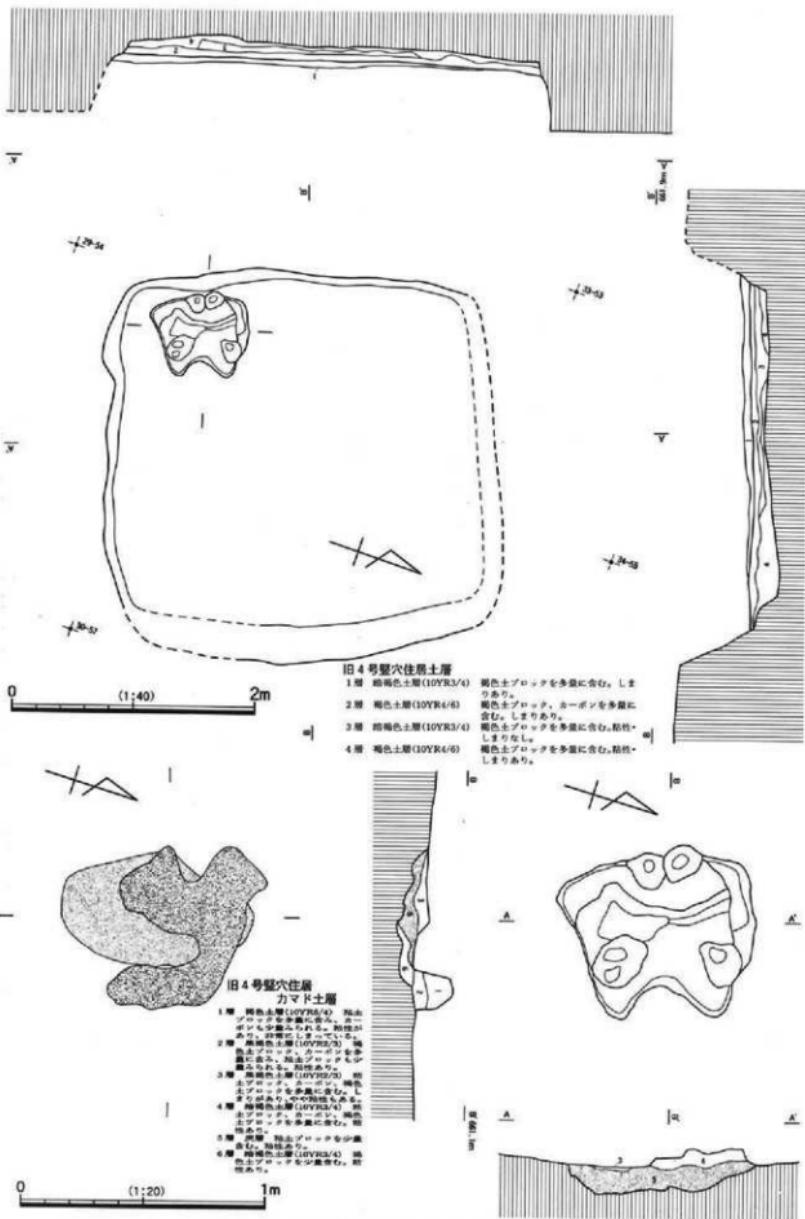
出土遺物（第29・30・80図）

第29図1～13は土師器壺である。体部下半に手持ちヘラ削りの痕跡を残すものが多くみられる。内面はナデ調整されているが、暗文はみられない。そのうち13は高台付壺である。14は土師器蓋のつまみ部分の破片である。15～17は皿形土器であり、体部下半は手持ちヘラ削りされている。18～24は黒色土器である。内面に暗文をもつもの（18～21・24）が多くみられる。25～29は壺類の小破片であり、墨書きされている。25の「長」、27の「本」以外は判読不明。30～35は須恵器壺の資料である。30は比較的浅いもので底部径が大きく箱形を呈する。底部はいすれも回転糸切り痕を残している。36は須恵器甕である。第30図1・2は灰釉陶器で、1は比較的浅く皿に近いものである。3は須恵器甕の脚部破片である。4～8は土師器甕の資料であるが、5はやや小形で、残りは大形のものである。整形技法は外向縦ハケ、内面横ハケで調整されている。底部には木葉痕がみられる。第80図1は土鍾である。端部をわずかに欠損するが、ほぼ完形である。

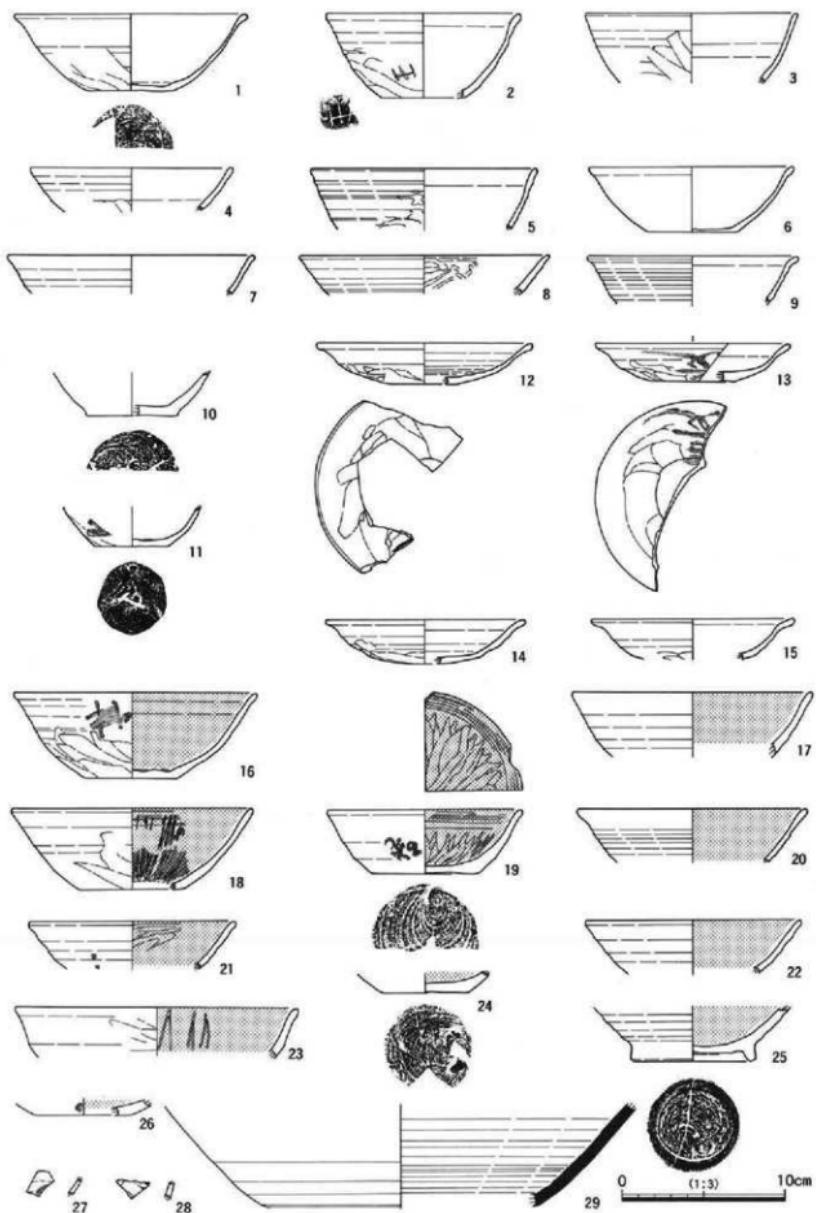
6号堅穴住居

遺構の概要（第31図）

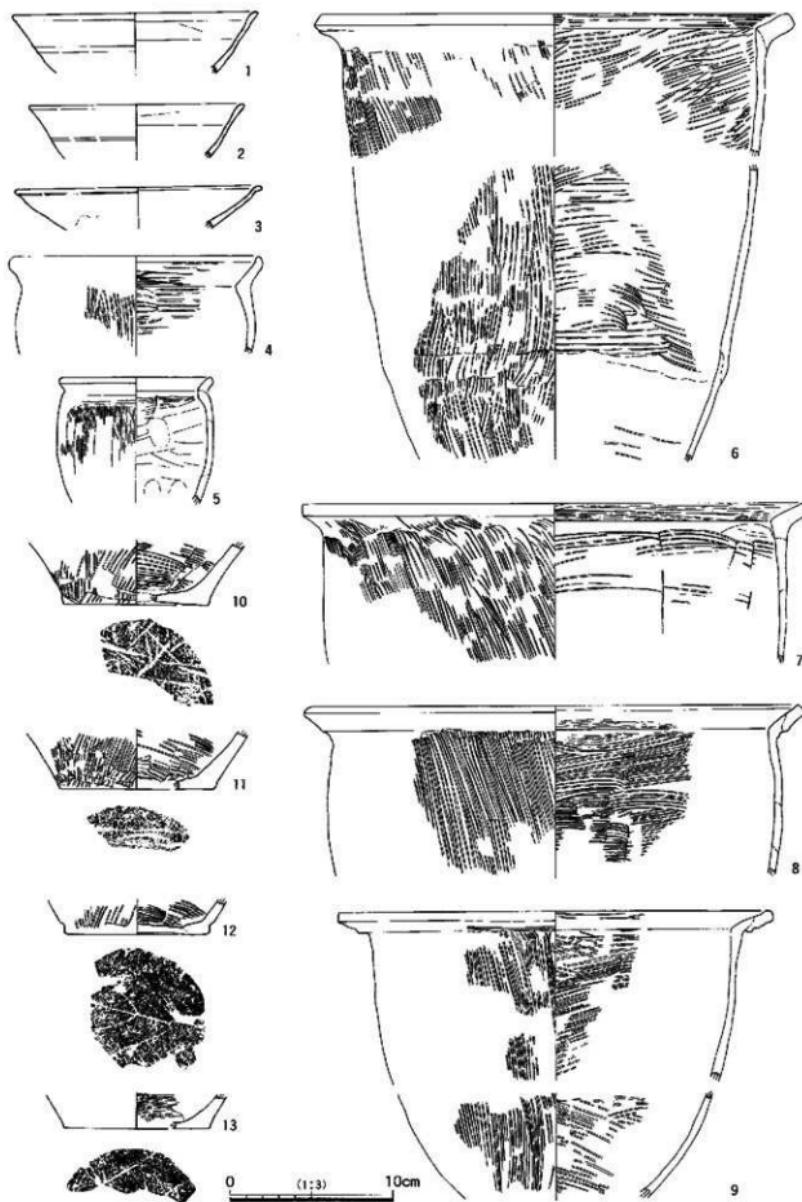
調査区西側の南寄り、X=15、Y=24グリッドを中心位置する。住居の南側は調査区外となり、住居の中央を北東から南西にかけて16号溝によって切られている。また、東側に位置する8号住居と重複関係にあり、8号住居を切っている。16号溝が煙堀になっているために、16号溝より北側では確認面から床までの深さが60cmほどと深く、南側では耕作による削平のため、40cmと浅くなっている。カマドを東壁の中央から、やや南寄りに造っている。主軸をN-87°Wにとり、東西長3.7m、南北長4.5m以上を測り、やや東西に長い長方形を呈するものと考えられる。住居床面には焼土のまとまりが数カ所にみられ、焼失家屋である可能性を窺わせた。床は硬化面がほとんどみられず、軟弱であった。



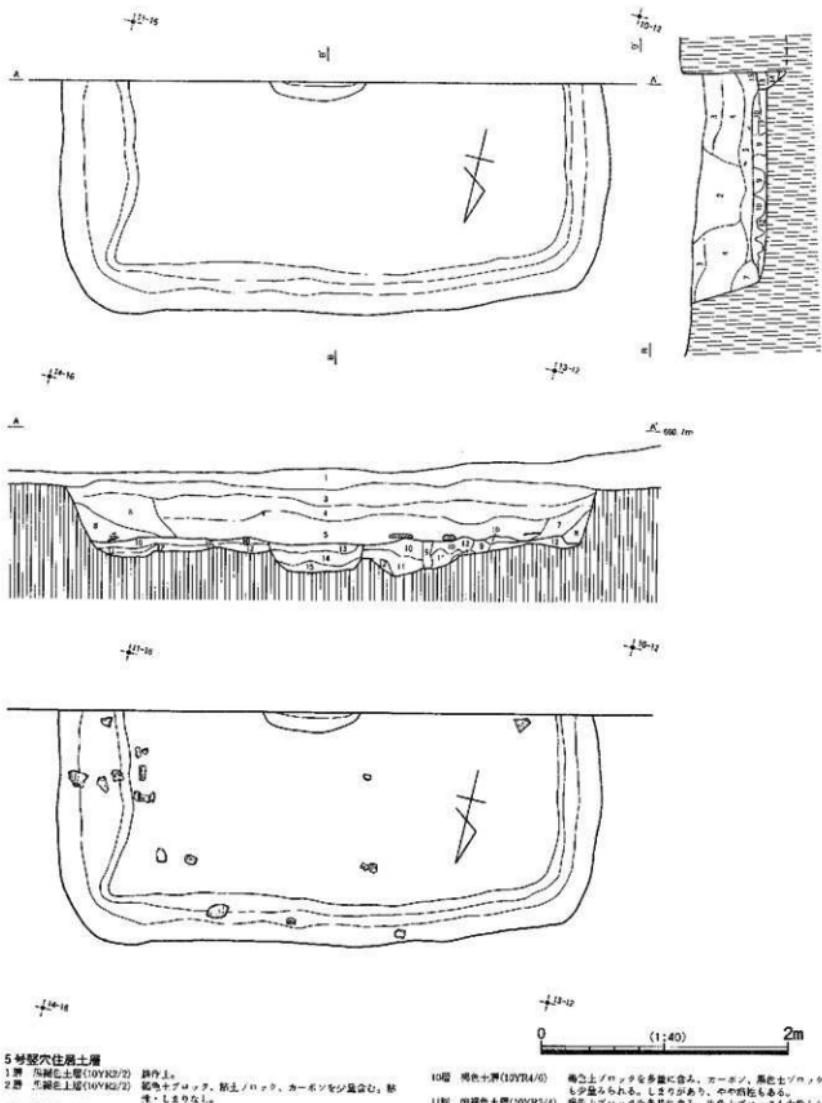
第24図 旧4号堅穴住居平面図・カマド平面図



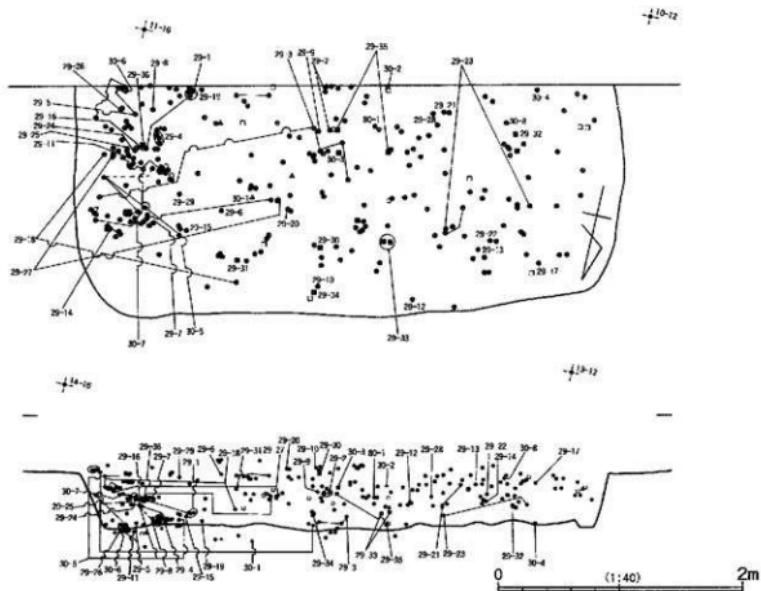
第25図 4号竪穴住居出土土器 (1)



第26図 4号竪穴住居出土土器 (2)



第27図 5号竪穴住居平面図・遺物出土状況



第28図 5号竪穴住居遺物分布図

カマド（第34図）

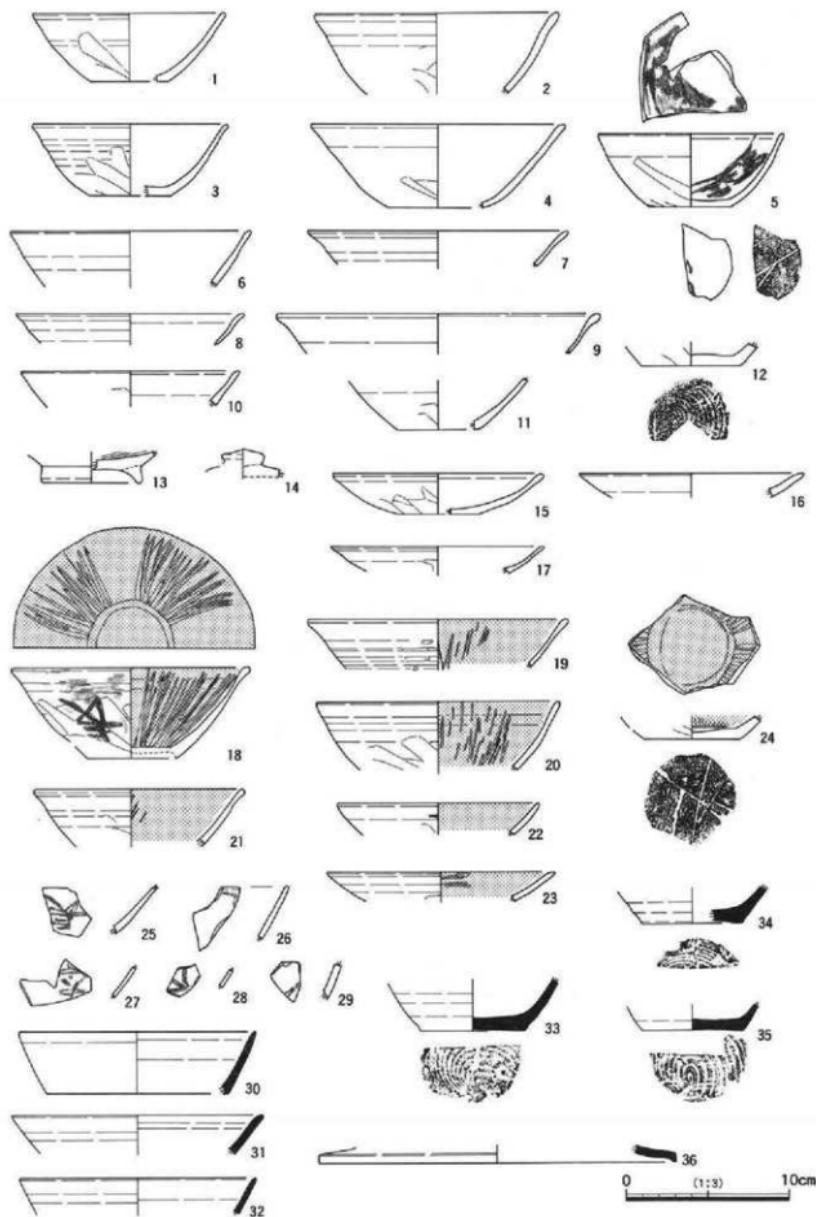
東壁に造られており、石組み粘土覆いの構造をもつと思われるが、耕作による削平のためプラン確認の段階で袖石が露出しており、粘土は全くみられなかった。床面をそれほど掘りこまず燃焼部とし、袖石の一部とともに住居壁のラインより大きく外側に張り出させた造りとなっている。袖には扁平な石を3列ほど立てて構造材としている。

遺物出土状況（第32・33図）

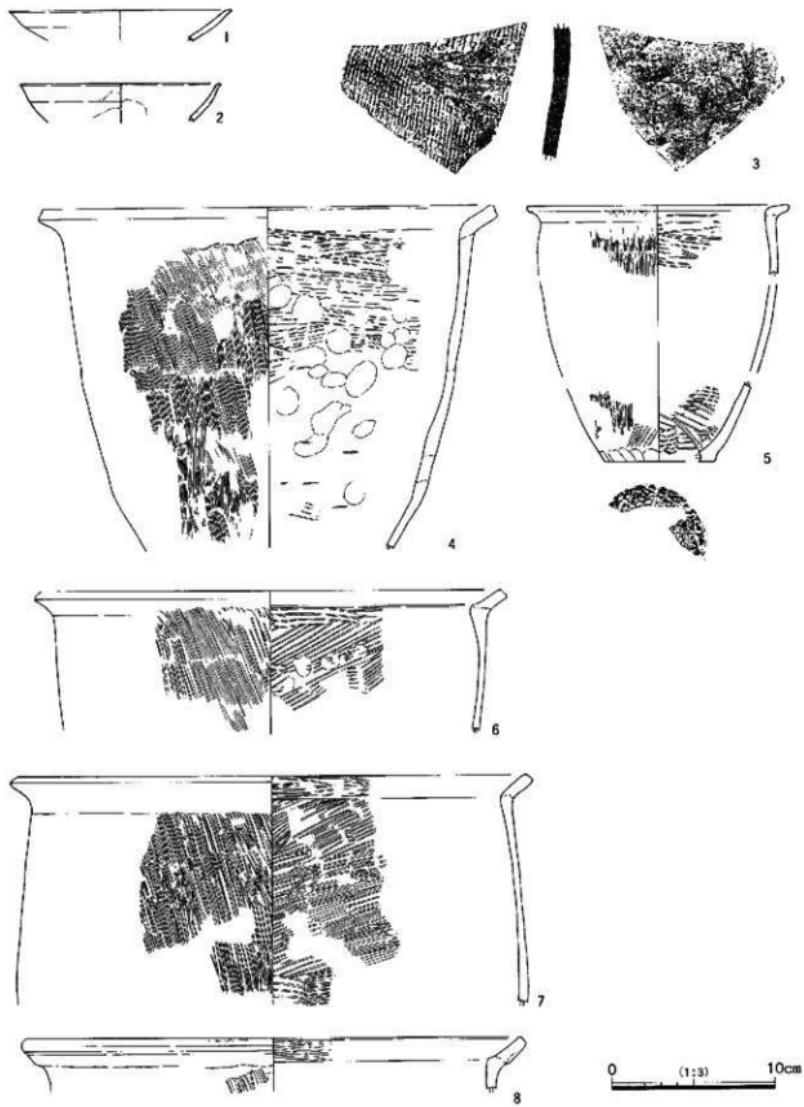
住居中央が大きく削平を受けていることもあり、出土遺物はそれほど多くはない。削平を免れた北西コーナー付近と南西の調査区境に土師器壺のまとまった資料がみられた。また、上師器壺の完形品が西壁際に置かれたような状態で発見されている。カマド周辺でも遺物は少なく、カマド内においても甕の小破片が数点出土したにすぎない。

出土遺物（第35・78・80図）

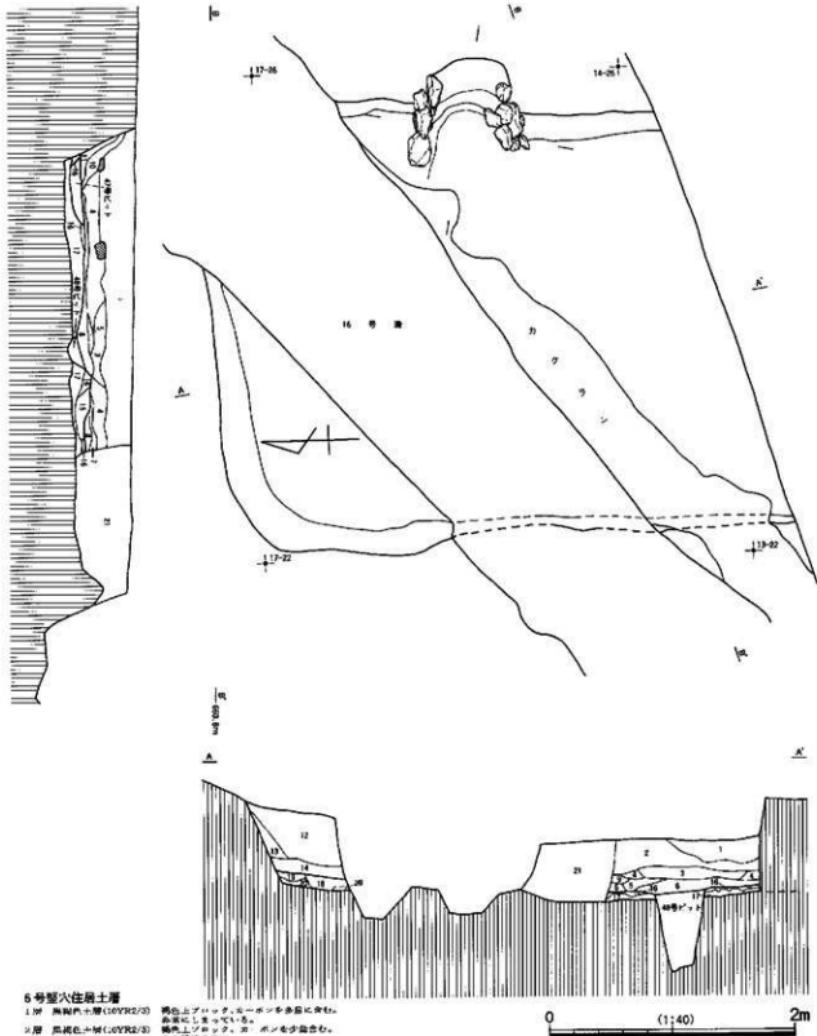
第35図1～6・8・9は、土師器壺で、ほとんどが内面に軽文をもつ。1は対する二面に墨書きをもち、いずれも「足」と墨書きされている。4・6は「位」と墨書きされる。9は底部を欠損するが、削り出し高台壺になるものと思われ、外面を丁寧にヘラ削きしている。10は黒色土器の資料である。11・12は壺頸の破片資料であるが、いずれも墨書きされており、11は「位」、12は底部に墨書きされるが、判読不明。13・14は須恵器壺で、14は底部に回転糸切り痕を残す。15・16は須恵器蓋であるが、いずれも小形のものである。17・18は土師器小形甕で、外面にはカキメ調整痕を残す。底部には回転糸切り痕を明瞭に残す。19は須恵器瓶ないし蓋の底部であると思われる。20は須恵器蓋の剥離部破片であるが、内面中央部分が研磨されており、転用硯であると思われる。第78図4は鉄錠の先端部破片である。第80図3は砥石の破片である。凝灰岩製で、全面使用されている。



第29圖 5号竪穴住居出土土器 (1)



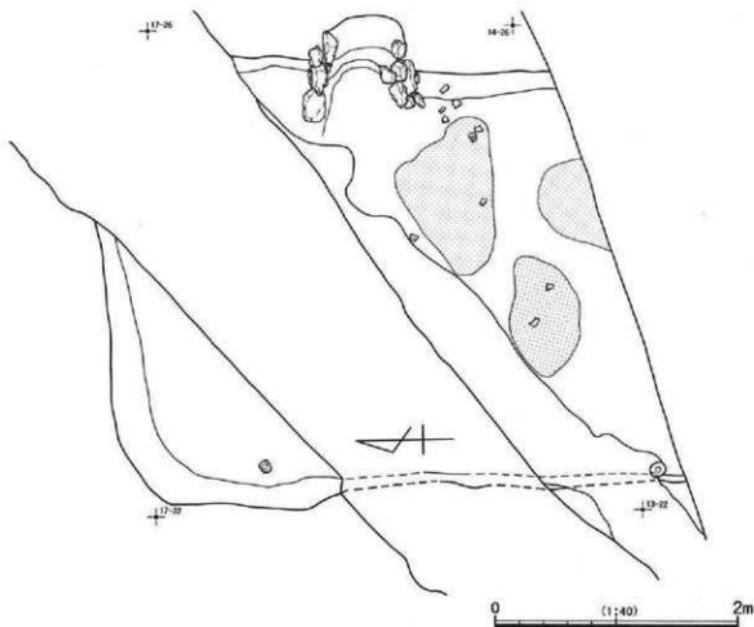
第30図 5号竪穴住居出土土器 (2)



6号堅穴住居土層

- 1層 黒褐色土層(10YR2/2) 暗色上ブリック、カーボンを多量に含む。
 2層 黑褐色土層(10YR2/2) 暗色上ブリック、カーボンを少量含む。
 やや堅性あり。
 3層 黑褐色土層(10YR2/2) 暗色上ブリック、カーボンを少量含む。
 やや堅性あり。
 4層 黑褐色土層(10YR2/2) 暗色上ブリック、カーボンを多量に含む。
 やや堅性あり。
 5層 黑褐色土層(10YR2/3) 暗色上ブリック、カーボンを少量含む。や
 や堅性。しまりあり。
 6層 黑褐色土層(10YR2/2) 暗色、カーボンを多量に含む。暗色上ソ
 ネル。
 7層 黑褐色土層(10YR1.7/2) 暗色上ソネル、カーボンを多量に含む。
 しまりあり。
 8層 離褐色土層(10YR3/4) 暗色上ソネル、カーボンを多量に含む。カーボ
 ルを含みらる。やや堅性あり。
 9層 黑褐色土層(10YR2/2) 暗色上ソネル、カーボンを多量に含む。
 10層 黑褐色土層(10YR2/2) 暗色上ソネルを多量に含む。カーボン
 を含みらる。堅性あり。
 11層 離褐色土層(10YR3/4) 暗色上ソネルを多量に含む。やや堅
 性あり。
 12層 離褐色土層(10YR3/3) 暗色上ソネルを多量に含む。カーボン
 を含みらる。しまりあり。
- 13層 黑褐色土層(10YR4/4) 暗色上ソネル、カーボンを多量に含む。
 坚性上ソネルを多量に含む。カーボン
 を含みらる。堅性はしまりある。
 14層 黑褐色土層(10YR4/4) 坚性上ソネルを多量に含む。カーボン
 を含みらる。堅性はしまりある。
 15層 黑褐色土層(10YR2/3) 坚性上ソネルを多量に含む。カーボン
 を含みらる。やや堅性。しまりあり。
 16層 離褐色土層(10YR3/4) 坚性上ソネルを多量に含み。カーボン
 を含みらる。やや堅性。しまりあり。
 17層 褐色土層(10YR4/4) 坚性上ソネルを多量に含む。カーボン
 を含みらる。堅性。しまりあり。
 18層 黑褐色土層(10YR2/2) 坚性上ソネルを多量に含み。カーボン
 を含みらる。堅性。しまりあり。
 19層 離褐色土層(10YR3/4) 坚性上ソネルを多量に含む。カーボン
 を含みらる。堅性。しまりあり。
 20層 黑褐色土層(10YR4/4) 坚性上ソネルを多量に含む。やや堅
 性あり。

第31図 6号堅穴住居平面図



第32図 6号堅穴住居遺物出土状況

8号堅穴住居

遺構の概要（第36図）

調査区西側の南寄り、X=13、Y=26グリッドに位置する。住居南側半分以上は調査区外となり、西側の多くは6号住居によって切られているため、規模等は不明である。北壁の遺存状況から、主軸はN-87°-Eにとるものと思われる。カマドは調査区外に位置するものと思われ、検出されていない。床面は概して軟弱で、小さな起伏があり平坦ではない。壁際には幅10cmほどの周溝が巡っている。西壁周溝の一部は、6号住居床下からも発見されている。

遺物出土状況（第36図）

調査面積も限られていたため、遺物はほとんど出土しなかった。取り上げ点数54点を数えるにすぎず、住居内に散在するような状況であった。

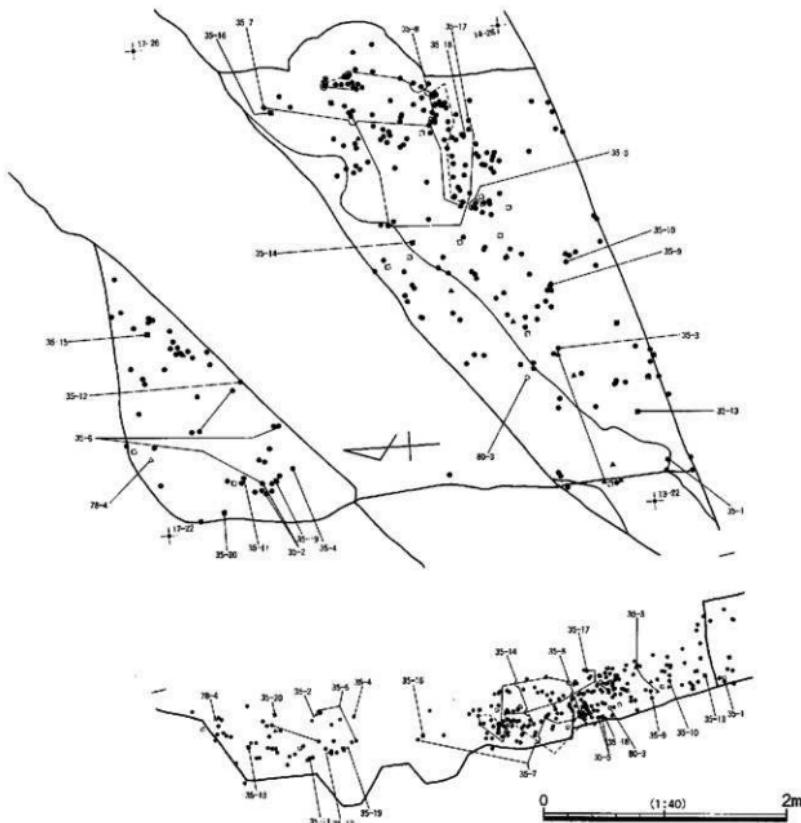
出土遺物（第37図）

1～6は土師器壺の資料であり、内面には暗文をもつ。6は体部下半を回転ヘラ削りしており、底部を欠くものの削り出し高台をもつものと思われる。7は土師器蓋のつまみ部分である。内面には暗文がみられる。8は甕形土器口縁部の破片である。

1号小鍬治遺構

遺構の概要（第38図）

調査区西側の北寄り、X=22、Y=25グリッドに位置する。遺構北側は調査区外となり、幅約70cmしか調査することができなかった。南側には16号溝、6号住居がみられる。調査面積が狭いため、遺構の平面プランは不明であるが、主軸をN-84°-Eにとり、東西長5mを測る。カマドなどは発見されていない。遺構中

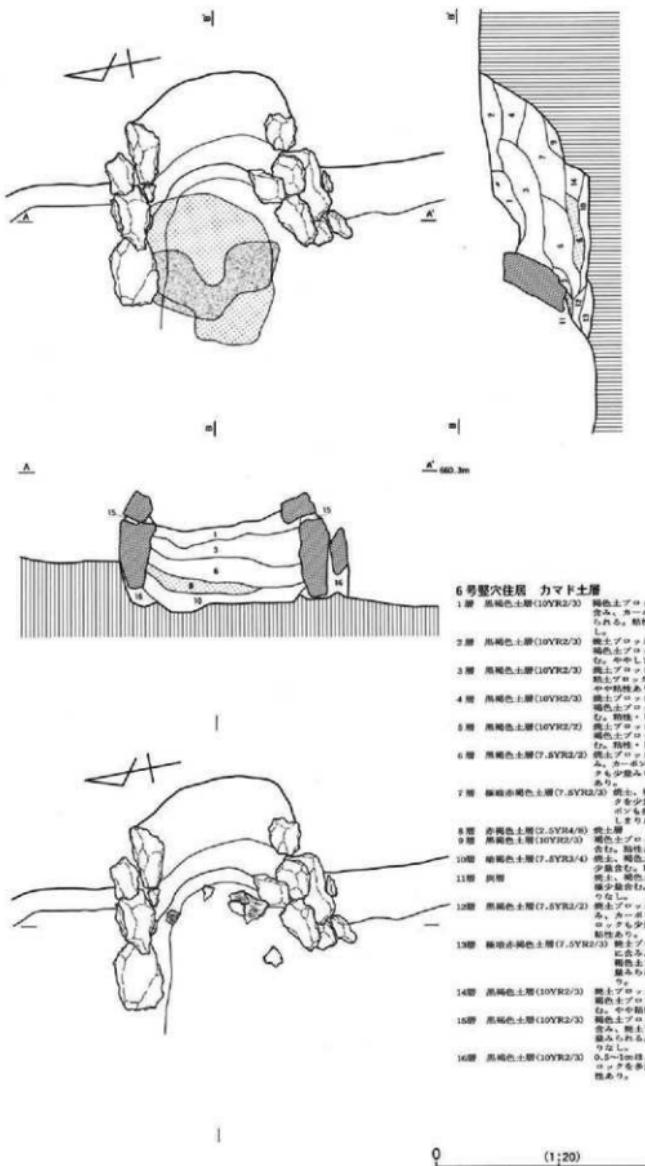


第33図 6号竪穴住居遺物分布図

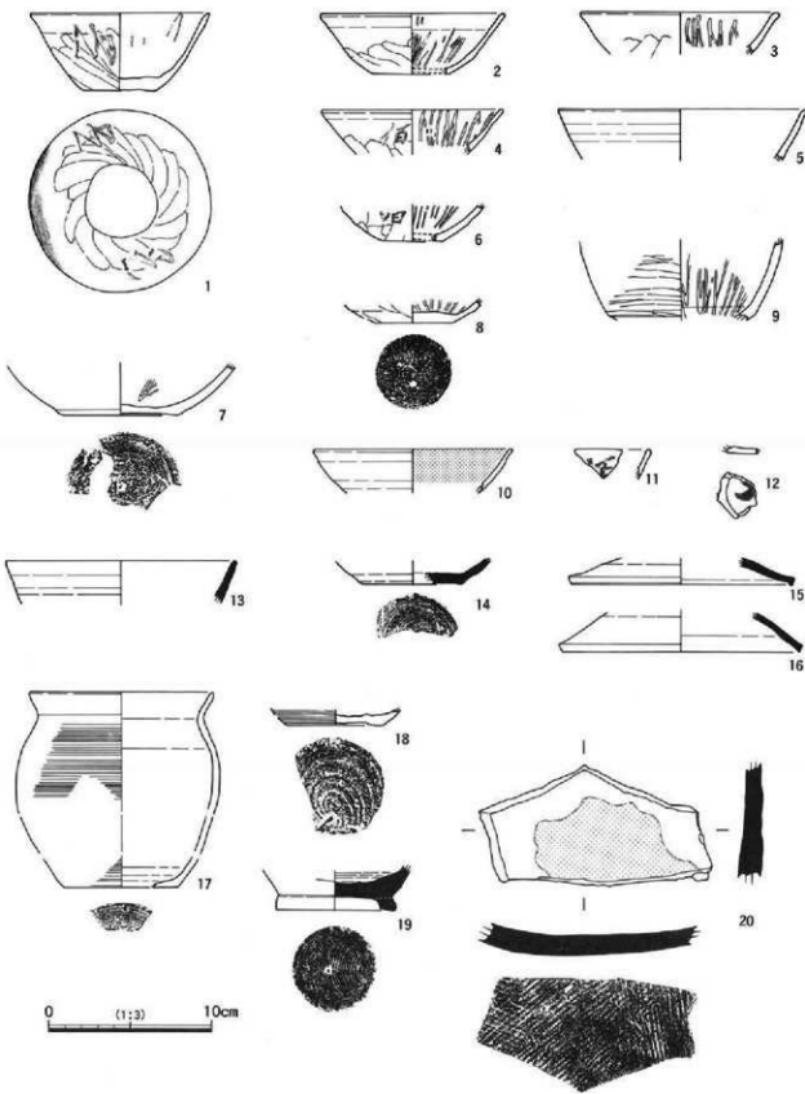
尖付近の調査区域に長径50cm、深さ27cmほどの楕円形をした落ち込みを確認した。土層観察では遺構覆土を切り込んだり、落ち込み上に床を張った痕跡は認められず、本遺構に伴う土坑とするのが妥当であると考えるが、性格については不明である。床面は平坦ではなく、便化した面もみられなかった。東側では床面レベルが下がるが、遺物や礫がほぼ水平にみられることから、本米の床面はこのレベルであった可能性もある。隅溝北東隅には、やや大形の礫が数点みられた。そのうちの1点は、上面には平滑な面がみられ、礫全体も鉄分が付着し酸化した状態がみられた。鉄製品の鍛打の時に使用した金床石であると思われる。また、鉄滓、未製品の刃子などがみられることから、頭初7号住居として調査を行なったが、小鐵治遺構と判断した。調査面積が狭いため、礫の羽口や鍛冶に伴う諸施設は確認されていない。

遺物出土状況（第38図）

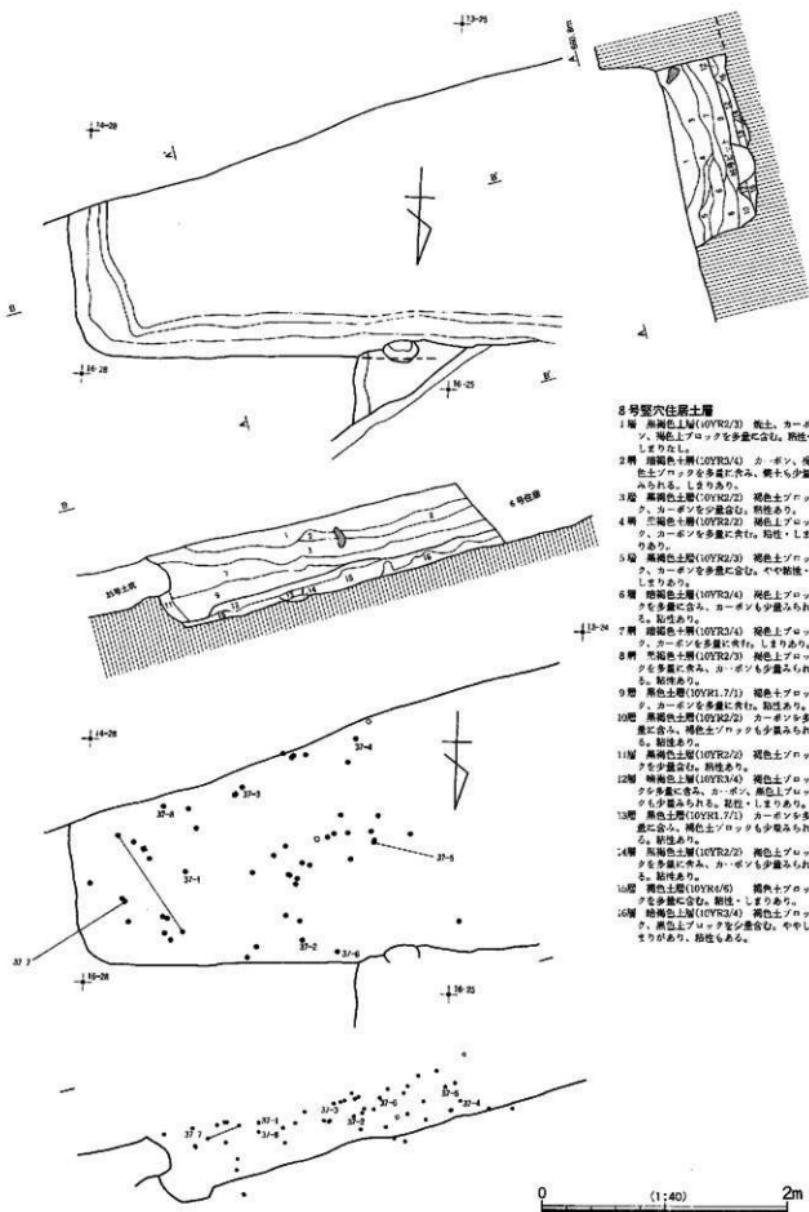
僅かな調査面積にも関わらず、南壁に沿って土師器壺や灰陶平瓶をはじめとして様々な遺物が出土した。とくに南壁東寄りでは、黒色土器4個体ほどと灰陶平瓶がまとまって出土した。いずれも床面に近いレベルから出土しているが、床に置かれたような状態ではなく床面に滑り落ちたように遺構内側に向かって傾いているものが多くみられた。それほど高くはない棚状の施設に置かれていたものが、施設の廃絶に伴って滑り



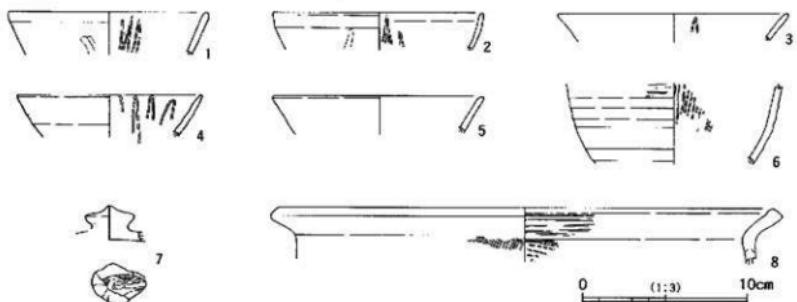
第34図 6号竖穴住居カマド平面図



第35図 6号竪穴住居出土土器



第36図 8号竖穴住居平面図

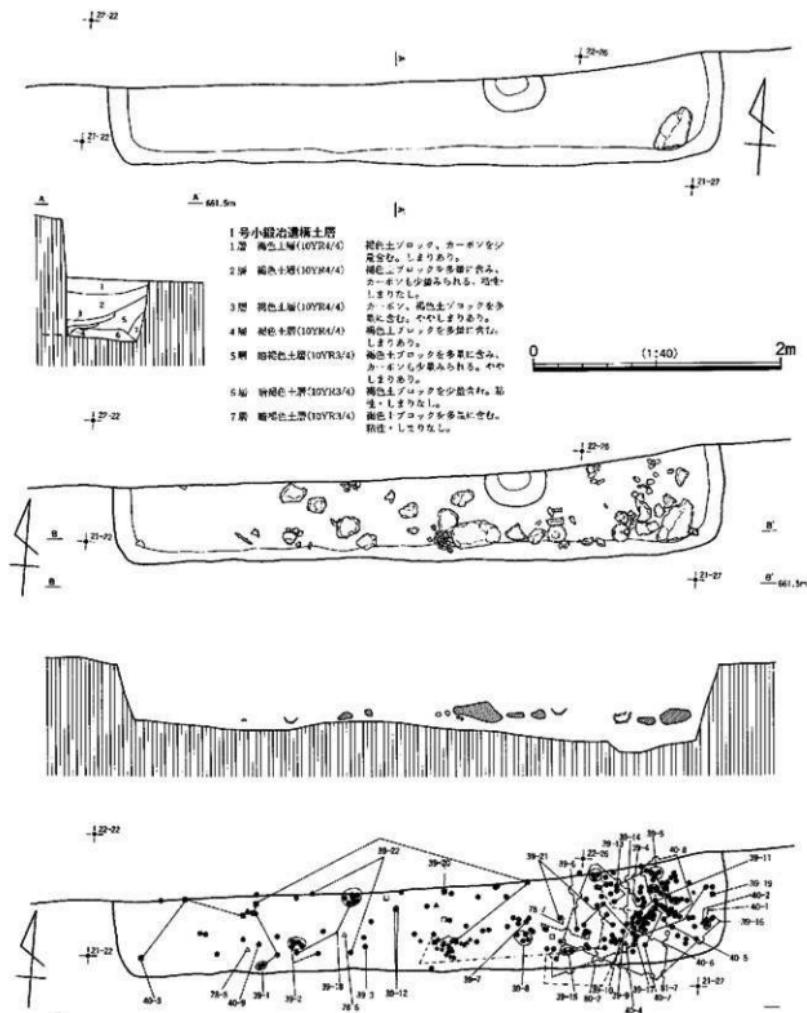


第37図 8号竪穴住居出土土器

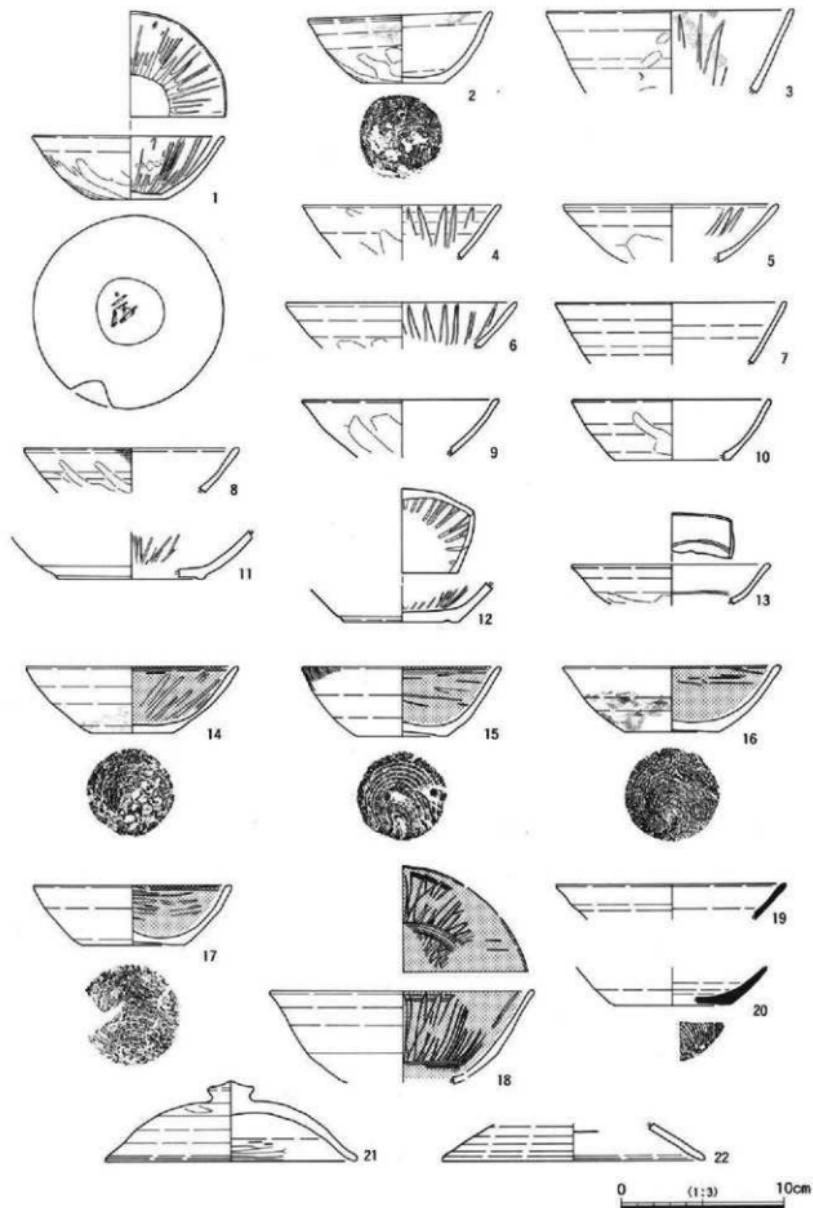
落ちたものとも考えられる。また、東壁際中央付近ではコーカスを含む鉄滓が20点ほどまとまって出土している。その他、未製品の刀子、鎌、鑿などの鉄製品が出土している。

出土遺物 (第39・40・78・80・81図)

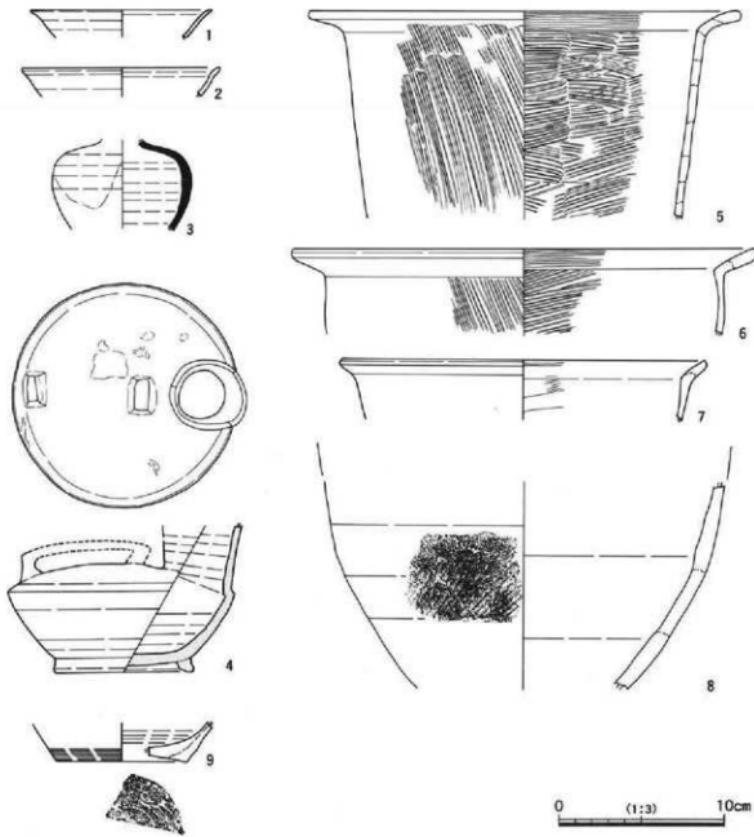
第39図1~12は土師器壺の資料であるが、内面に暗文をもつものともないものは同数となる。外面下部は斜位に手持ちヘラ削りされるものが多い。2~8は内外面および口唇部に窓の痕跡があり、灯明具ないし鍛冶に関する道具として使用された可能性がある。1・3には墨書きがみられる。1は底部に「庄」と書かれるが、3は断片のため判読不明。11・12は底部資料で、いずれも低い削り出し高台をもつ。13は皿形十器で、内面屈曲部に環状の暗文をもつ。14~17は黒色土器の壺である。比較的まとまった資料といえ、外面はナデ調整が行われ、内面は横方向のヘラ磨きないし暗文状の磨き痕がみられる。底部はいずれも回転系切り痕を残す。18は黒色土器の壺である。内面およびみこみ部に暗文がみられる。19・20は須恵器壺の資料である。20は底部に回転系切り痕を残す。21・22は土師器蓋であるが、2点とも径のわりに器高は高いものである。第40図1は縁釉陶器の口縁部破片である。釉薬はあまり緑の発色をしていない。猿投窯産であると思われる。2は灰釉陶器の口縁部破片である。3は須恵器小形長頸瓶の頸部資料である。頸部および底部を欠損する。猿投窯産であると思われる。4は灰釉陶器の平瓶である。やや小形の製品で、口縁部および把手を欠損する。表面に据えられたような状態で出土したことから、欠損したまま使用していたものと考えられる。猿投窯の製品である。5~9は土師器壺である。5~7は甲斐窯産の資料であるが、8は器底も厚く内面はナデ調整が行われ、外面には平行叩き目の痕跡が残る。9はクロロ整形の小形壺の底部破片で、外面はカキメ調整され、底部には回転系切り痕を残す。第78図5は刀子の未製品である。茎部は整形を終えているが、刃部は断面が方形を呈しており、未製品であることがわかる。刃部の幅は狭く、これから更に叩いて刃部幅を広く薄くし、刃部を研ぎ出すものと思われる。6は鉄鎌であるが、薄い造りのため未製品であるかどうかの判断はできない。7は鉄板ないし鉄製品の切断に用いられた鋸であると思われる。頭部は使用による敲打によってかなり潰れている。第80図2は土鎌である。ほぼ完形であるが、5号住居出土のものより一回り小形である。第81図7は金床石である。一部になめらかな面がみられ、礫全体に鉄分が付着し赤茶けている。なめらかな面は鉄製品の鍛錬によって形成されたものであろう。金床石としては小形のもので、遺構の隅に据えられていたことから補助的に用いられたものかもしれない。



第38図 1号小鍛冶遺構平面図・遺物出土状況



第39図 1号小銀冶遺構出土土器 (I)



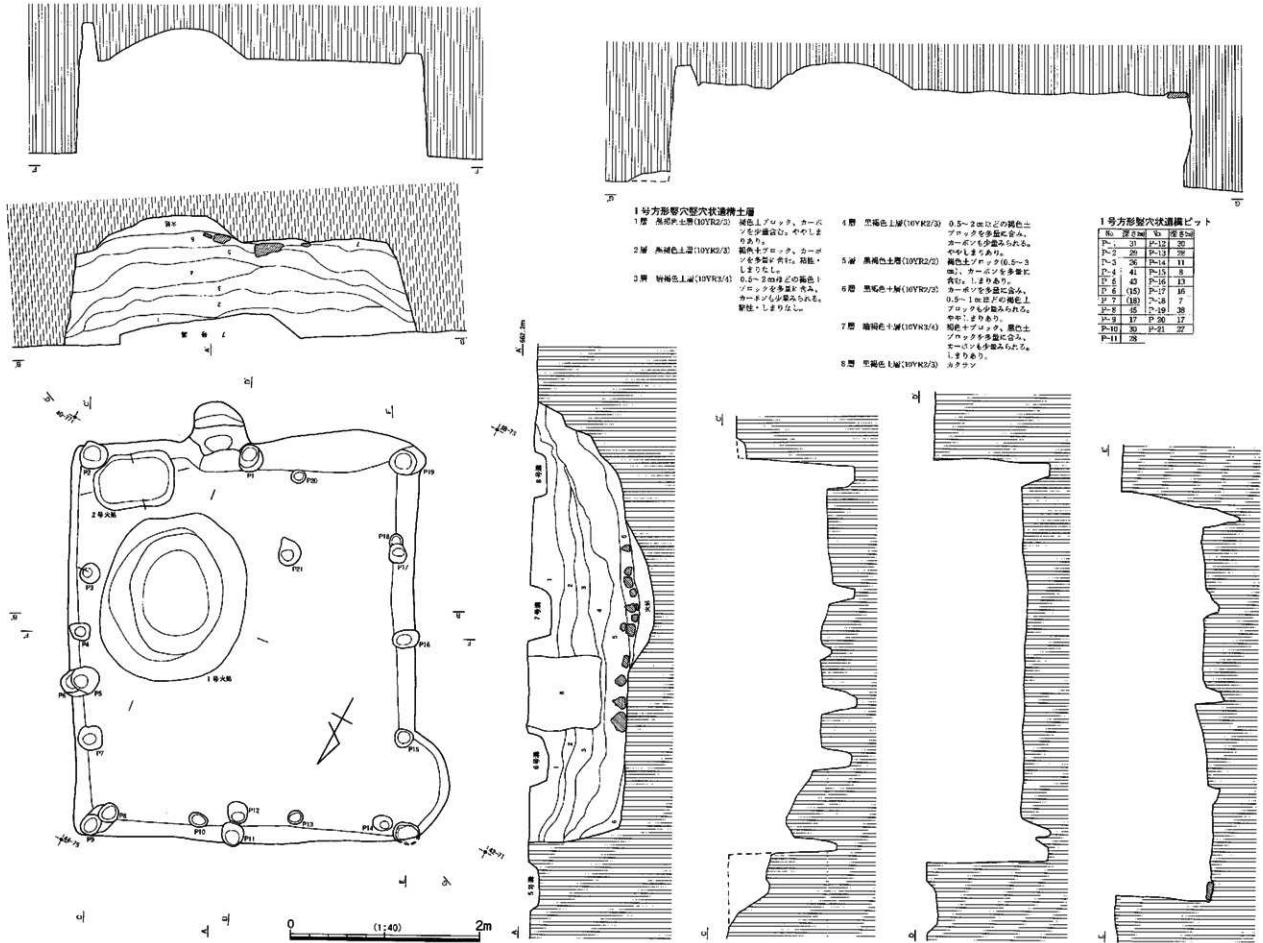
第40図 1号小鐵冶遺構出土土器 (2)

第2節 中世の遺構と遺物

1号方形堅穴状遺構

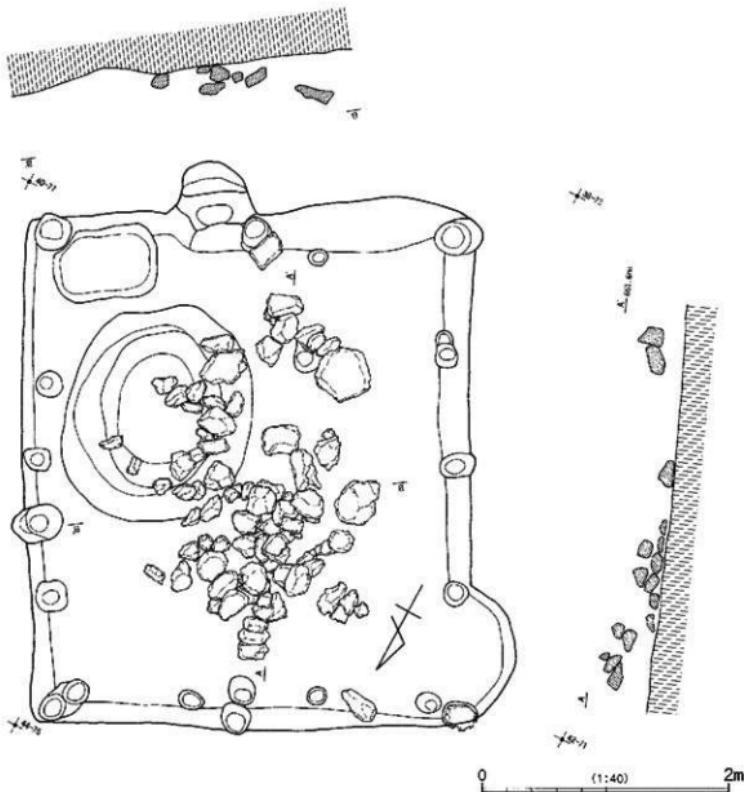
遺構の概要 (第41・42・44図)

調査区のはば中央、X=42、Y=74グリッドに位置する。東には2号方形堅穴状遺構、南には6号方形堅穴状遺構と重複関係にあり、いずれも1号方形堅穴状遺構が切る。南に位置する4号方形堅穴状遺構とはプランが一部接しているが、僅かなため新旧関係を明らかにすることはできなかった。東西長3.6m、南北長4.0mほどを測る方形プランを呈し、床面積は12.96m²ほどとなる。北西コーナー部は、一部弧状に張り出しがもっている。主軸をN-28°-Wにとる。南側壁は中央に下半部は地山を掘り残し、上半部を張り出させた2段のステップをもつ出入口施設が検出された。深さは東側で0.97m、西側で0.95mを測り、壁は崩落もほとんどみられず、垂直に立ち上がる。覆土はレンズ状の堆積を示すものの、土層中には地山土のロームブロックが混入していたり、一部で自然堆積とは考えられない堆積のあり方を示すものもみられ、人為的に埋



第41図 1号方形竖穴式墓道平面図

め灰されたものと考えられる。中央部では床面に接するように人頭大の礫が多数発見された。この礫は中心部に集中しており、周辺部では少なく床面よりやや浮く傾向にある。礫のエレベーション（第42図）でみると礫のレベルがレンズ状になることがわかる。おそらく遺構を埋め戻す際、一緒に投棄されたものと思われる。周辺の土層中には全く礫がみられないことから、これらの礫は何かに使用され廃棄されたものと考えられるが、使用目的は不明である。床は張り床等がされた痕跡はなかったが、全体的に硬化面がみられた。竪穴内の東壁寄りには、南北1.8m、東西1.5m、深さ32cmの火坑が設けられていた（1号火坑）。掘り込み内底面は、南北0.9m、東西0.88mほどが被熱しており、赤褐色に変色していた。また、底部の径50~60cmほどの範囲内に炭化物が3cmほど堆積していた。また、南東コーナー付近でも火坑が検出されている（2号火坑）。東西0.85m、南北0.55m、深さ5.5cmほどで隅丸方形を呈する。掘り込み内には全体に多量の焼土と炭化物が堆積していた。また、この火坑によって竪穴南側の壁も一部被熱して硬化していた。上屋を支えた柱穴は、基本的に壁際に沿って配置されているが、柱間の間隔は一定ではない。一部の柱穴では、壁を掘り込んで柱穴を作っていた。とくにコーナー部の柱穴において堅苦な傾向にある。コーナー部の柱穴を主柱穴として、凹壁とも1.8m前後を主柱間としているが、東西壁では主柱穴の間に細い補助柱穴を設けている。南北壁では、等間隔とはならないが、やはり小怪の補助柱穴をいくつか設けている。竪穴内の柱穴は、正確



第42図 1号方形竪穴状遺構礫検出状況

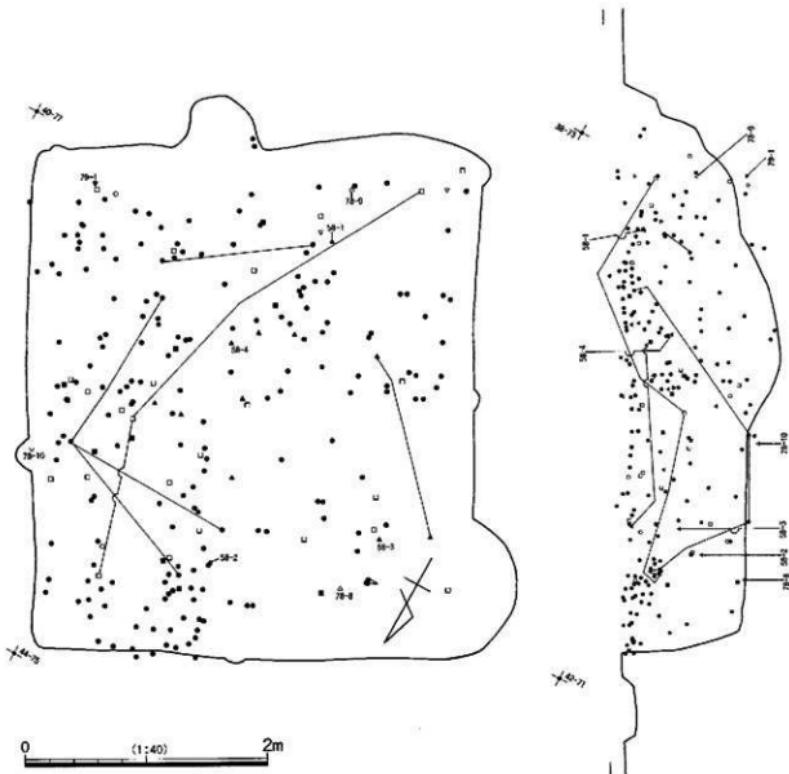
には対称対称とはならないが、対称に設けようとする意図は窺える。一部の柱穴は重複がみられ、建て替えが行われたことが考えられる。北東ノーネー部では柱穴構造をもたず、扁平な砾を床面上に配置した礫石建ち構造とし、礫石下にも掘り込みは確認できなかった。柱穴に柱痕は確認できず、底部に根石をもつものもみられなかった。

遺物出土状況（第43図）

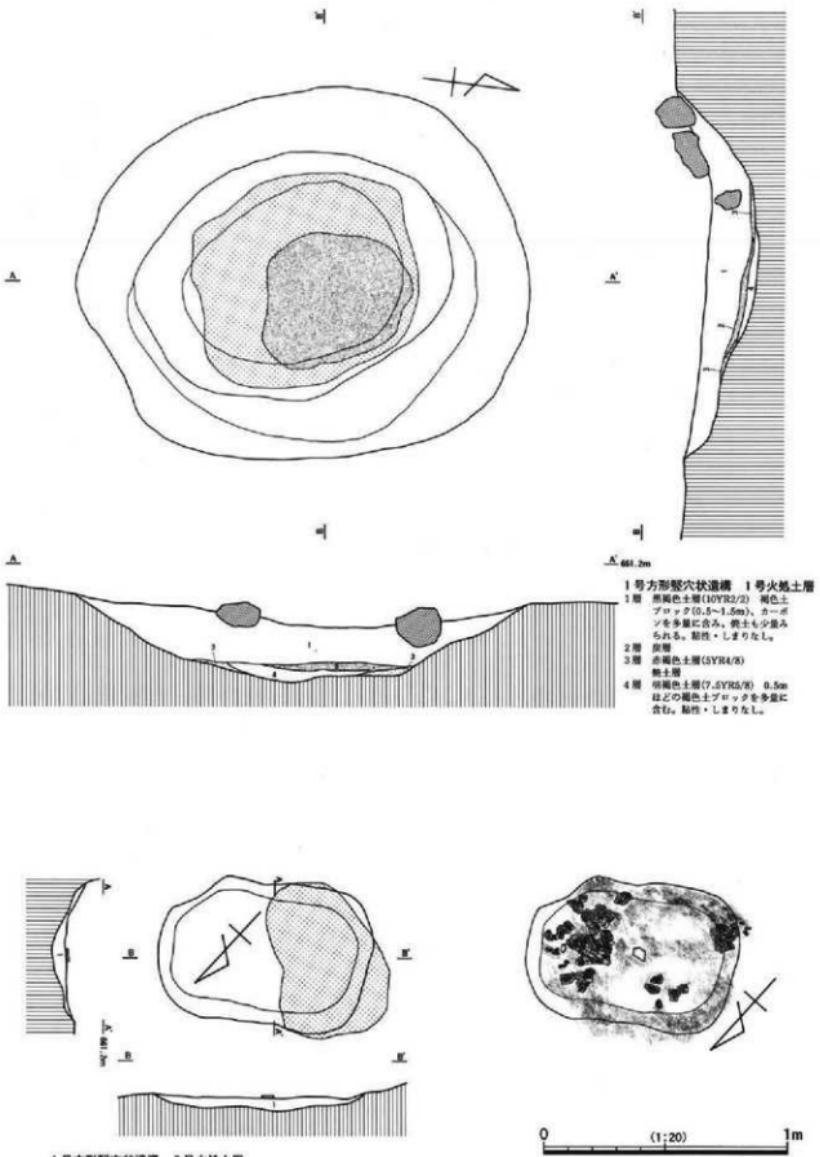
竪穴内からは、さまざまな遺物が出土しているが、平安時代の土師器などが多く、いずれも竪穴内で使用状況にあったと思われる土器類は発見されなかった。取り上げ点数240点を数えるが、ほとんどを土師器や陶器の細片が占める。覆土中の上層ないし中層から出土する遺物も多く、床面直上から出土する遺物はほとんどみられなかった。そのうち第79図1の北宋銭は、2号火爐覆土中から発見されたもので、火爐使用時の遺物とみることができる。

出土遺物（第58・78・79図）

第58図1は鉄軸天目茶碗の口縁部破片である。古瀬戸後Ⅰ期のものである。2は常滑窯口壺口縁部破片である。口縁部縁帯を欠損するが、頸部には折り返し部分が剥がれた痕跡を残し、縁帯が頸部に接していたことがわかる。3・4は常滑窯の肩部および胴部破片である。第78図8は銅製品であるが、用途は不明。9・10は棒状の鉄製品であるが、9は片方が薄く造られ刃部となる可能性がある。10は断面方形を呈し、鐵鎌や



第43図 1号方形竪穴状遺構遺物分布図



第44図 1号方形竪穴状遺構火坑平面図

鉄釘の類かと思われる。第79図1は2号火坑内より出土の銅鏡で、咸平元寶である。

2号方形堅穴状遺構

遺構の概要（第45・46図）

調査区の中央よりやや東、 $X=42$ 、 $Y=76$ グリッドに位置する。西には1号方形堅穴状遺構が位置し、西側半分ほどを切られる。上部を1号方形堅穴状遺構よりやや東に振り、 $N-66^{\circ}-E$ にとる。深さは、1号方形堅穴状遺構とほぼ同様で、東側で0.8mを測る。残された柱穴から、プランは方形を呈し、南北3.2m、東西推定3.8~3.9mを測ることが推定される。柱穴から推定される床面積は、 10.07m^2 となる。東壁中央には地山を掘り残した2段のステップをもつ出入口施設がみられ、施設上部は堅穴プランよりやや張り出させていている。本堅穴も1号方形堅穴状遺構同様上層觀察室から、人為的に埋め戻されたような堆積のあり方をみせる。床面のレベルは1号方形堅穴状遺構とほとんど同じレベルであり、床全体に硬化面がみられる。出入口部の硬化はとくに顕著であった。堅穴内中央よりやや南東には、東西0.9m、南北0.9m、深さ23cmの不整円形をした火坑が検出された。火坑内には炭化物と焼土が堆積しており、火坑内の全面が赤く焼け被熱していた。火坑周辺にも炭化物が面上に広がりをみせていた。柱穴は1号方形堅穴状遺構同様、壁際に沿って掘られている。山入口施設のある東壁では、径15cmほどの細い柱穴が5カ所にみられる。奥壁にあたる西側では、径20mm以上のやや大形のピットが約1mの等間隔に配置されていた。一方、南北側は、壁の中央付近に1カ所ずつ配置されているだけであり、柱間は1.6~1.8mとなる。南側中央の柱穴（P8）は、1号方形堅穴状遺構の南東コーナー柱穴と同じ位置にあり、2号方形堅穴状遺構発見後、掘り戻されたものと考えられる。南西コーナー柱穴となるP7には、墨石が確認されているが、本堅穴内においては唯一の例である。また、堅穴中央やや東寄りや出入口付近にも柱穴が確認されている。柱穴に重複等がみられないことから、1号方形堅穴状遺構でみられたような建替えはなかった可能性が高い。

遺物出土状況（第45図）

1号方形堅穴状遺構同様、上簡器や陶器の小破片がほとんどを占める。出土状況も散在的でまとまった資料は見られない。

出土遺物（第58・78図）

第58図5は灰釉碗形鉢である。古瀬戸後IないしII期のものである。6は常滑の盤の胸部破片である。第78図11は断面方形を呈する棒状の鉄製品であるが、用途不明。

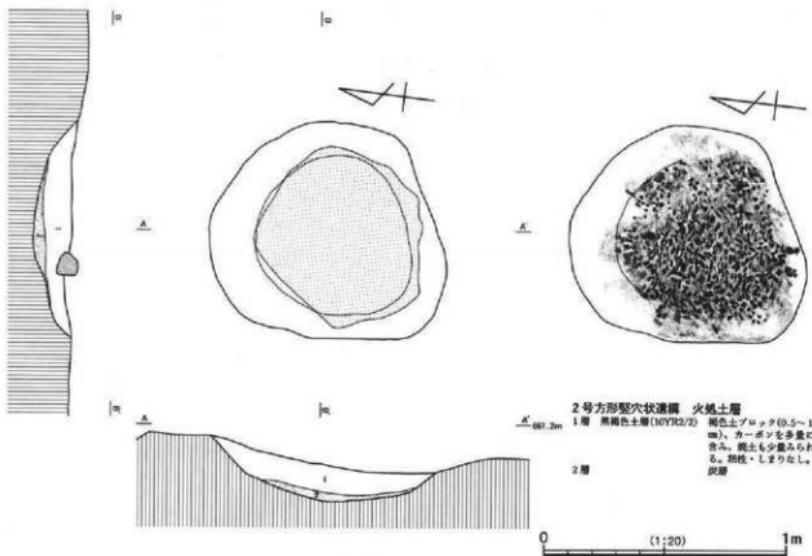
3号方形堅穴状遺構

遺構の概要（第47・48・51図）

調査区の東側、地形がやや東に傾斜している $X=48$ 、 $Y=90$ グリッドに位置する。西には1.6mほど離れて5号方形堅穴状遺構がある。堅穴東側の一部は、重機による掘削のため床面まで大きく破壊を受けている。半軸を $N-29^{\circ}-W$ にとる。東西4.1m、南北5mを測り、南北がやや長い方形のプランを呈する。東壁の残存部から推定される床面積は 14.45m^2 を測る。掘り込みもかなり深く、西側で1.1m、北側で1.0m、南側で1.0mを測る。壁は重機による搅乱が数カ所みられるほか、北側がやや崩落した状態で検出されたが、ほぼ垂直に立ち上がっている。南壁中央には地山を一部掘り残した、2段のステップをもつ出入口施設が検出されている。上半部は堅穴の外側に張り出させている。覆土の状況は大形の地山ブロックが確認されるなど、自然堆積ではないような状況にあり、他の方形堅穴状遺構同様、人為的に埋め戻された可能性が高い。覆土中には人頭大ほどの礫が多数検出された。礫は、堅穴内のはば中央に集中するように分布しており、レベル的には中心部のものが低く、周辺部のものが高い傾向にあり、埋め戻しの際投棄されたものと考えられる。床は全面的に硬化が認められた。堅穴中央のやや東寄りには南北2.2m、東西1.45m、深さ33cmほどの火坑が設置されている。火坑の下層には炭化物が堆積し、底面は良く被熱しており、東西0.8m、南北1.2mほどが赤褐色に変色していた。堅穴内の下層には暗褐色土が堆積していたが、火坑覆土の上層には地山土が10cmほど堆積しており、埋め戻された可能性が指摘できる。また、埋め戻された地山土は堅くしまっており、埋め戻しを行った後も堅穴を使用していた可能性もある。柱穴は堅壁や堅穴中央付近にも配されているが、重複が



第45図 2号方形整穴状遺構平面図・遺物分布図



第46図 2号方形堅穴状遺構火爐平面図

激しく数度にわたる建て替えが行われているようである。コーナー部の柱穴では2ないし3の柱穴が重複しているが、内側の柱穴は当初確認できず、外側の柱穴を掘り上げている過程で発見されたものである。これは、いざれも壁に近い柱穴の覆土が柔らかいのに対し、内側の柱穴は覆土上層に褐色土が堆積しており、踏み固められたような状況であった。このことから、当初壁よりやや離れた内側に設けられた柱穴が、建て替えを行なうにあたって徐々に外側へ移動したことが考えられる。ただし、その過程において堅穴自体の拡張があったかどうかについては明らかではない。重複した柱穴をもつ東と南コーナー部では、2カ所に根石をもち、初期ないし第2期の柱穴では底部に根石をもっていたことが明らかである。一方、外側に掘られた新しい柱穴には根石はほとんどみられないことから、初期の柱穴に根石が使用された傾向があることがわかる。これらから、P3、P5ないしP6、P7、P9、P13、P18、P19、P24、P30、P34、P37、P40などが当初の柱穴であったものと思われる。

遺物出土状況(第49・50図)

覆土中からさまざまな遺物が出土しているが、陶器を中心として良好な資料が得られている。大形の破片を含む常滑の甕は、投棄された礎中や礎の下層から出土している。まとまった状態では出土しておらず、礎同様に投棄されたものと思われる。また、北宋銭、石臼の破片や石鉢なども出土しているが、いざれも礎に混在して発見されており、常滑の甕同様堅穴での使用を示す出土状況はない。その中で、第78図12の鉄製品は火爐底面より出土しており、本堅穴に伴う遺物とみることができる。また、出土状態は中程で2本に折れており、並んだような状態で出土していることから、人為的に火爐底面に置かれた可能性もある。

出土遺物(第58・59・79・80・81図)

第58図7は灰釉平碗である。口唇部がやや外反する。8は灰釉四耳壺の肩部であると思われる。図示はしていないがもう1点同一個体と思われる胸部破片が出土している。いざれも内面には炭化物が付着している。平碗、四耳壺とも古瀬戸後1期に比定されるものであろう。第59図1は常滑の甕である。口縁の縁帶は垂下し頸部に接しているが、折り返した断面にはわずかに隙間が残っている。胸部下半を欠損しているが、底部資料とおそらく同一個体であると思われる。底部は内面のみこみ部と立ち上がり部が研磨されている。また、

故意に打ち欠いた痕跡が認められることから、片口鉢の代用品として欠損した底部を再利用したものと思われる。第78図12は断面方形の棒状鉄製品である。片方は木に嵌着されていたと思われ、木質が残っている。反対側が徐々に細く作られており、先端になると思われる鉄錐ではないことはわかるが、用途については不明である。本竪穴からは3枚の銅錢が出上している。第79図2は應寧元寶、3は至和通寶、4は判読不明ないし無文鏡である。第80図4・5は巻灰岩製の砥石であり、いずれも4面使用している。第81図1～3は石鉢である。2・3は小破片で確認できないが、1には片口が作り出されている。1は15号土坑出土のものと接合関係にある。4～6は石臼破片である。4は下臼で八分円溝、5も下臼で八分円である。6は上臼の破片である。8は竪穴内に麻薬されていた繩のうちの1点である。繩の一面に研磨されたような平滑な面があり、深さ1mmほどの削痕が3ヶ所にみられる。おそらく砥石の代わりとして用いられたものであろう。

4号方形竪穴状遺構

遺構の概要（第52・53図）

本調査区のはば中央の南寄り、X=38、Y=75グリッドに位置する。遺構の南半分ほどは調査区外となる。北側で6号方形竪穴状遺構と接し、6号方形竪穴状遺構を切る。さらに北側には1号方形竪穴状遺構、西側には7号方形竪穴状遺構が位置するが、両方方形竪穴状遺構との新旧関係は不明である。4・6・7号方形竪穴状遺構は、3棟が重複するように造られていたため当初1棟として調査を進めたが、土層断面観察から重複があることが判明した。まず、南北のセクションベルト北側で明らかに上層堆積の異なる箇所を確認したため、2棟の重複であると考えた。しかし、東西のセクションベルトにおいては、中央付近で2カ所の土層の切り合いか確認されたため、3棟重複であることが判明。4号方形竪穴状遺構は、東西3.05mを測り、主軸をN=64°Eにとる。おそらく方形プランを呈すると思われるが、規模は小さい。深さはかなり深く、東側0.9m、西側1.1m、北側1.06mを測る。壁面は北側と西側が6号方形竪穴状遺構の覆土となるが、垂直に立った状態で検出されている。東壁には地山をわずかに掘り残した出入口施設をもつ。中心部分は調査区外となっているため調査をすることはできず、階段状の面をもつかどうかは明らかにできなかった。調査区境界付近に入口施設が確認されたため、南側半分が調査区外に延びているものと推定される。床面はやや堅くしまっていたが、火凧などの付属施設は確認されておらず、炭化物の散布も認められなかった。柱穴は6号方形竪穴状遺構と重複しているために断定が難しいが、東壁面のP1、P2は4号方形竪穴状遺構に有のピットである。これからすれば、壁面に沿って柱穴を掘するのを基本としているようで、柱穴の規模的にもP11、P15などが伴うものであると考えられる。その他、補助柱穴の役割を果たしたのであろうか、中央部に細いピットを配している。

遺物出土状況（第53図）

本竪穴から出土した遺物は、取り上げ点数22点を数えるにすぎない。覆土中に散在的なあり方を示し、まとまった資料は検出されていない。北宋錢が1枚出土しているが、床面から60cmほど浮いた状態であり本遺構に直接作成なものではない。

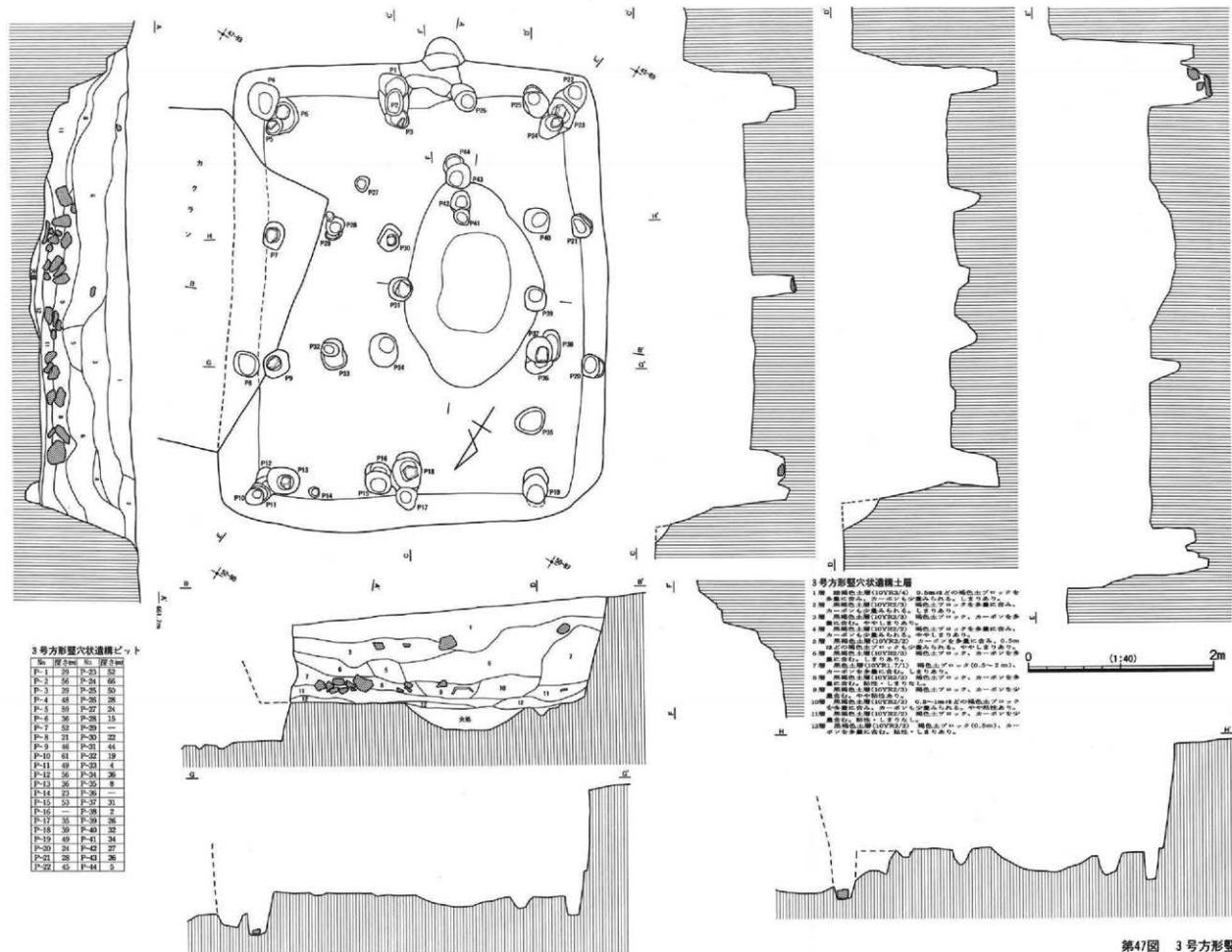
出土遺物（第59・79図）

いずれも小破片ばかりであり、平安時代の土器など本遺構の年代を決定するような遺物はほとんど出土していない。第59図2・3は平安時代黒色土器である。5は小破片ではあるが祖母撫茶壺肩部であり、古窯戸後I期に比定され本竪穴の年代を知る手がかりになる資料である。第79図5は咸平元寶で一部を欠損する。

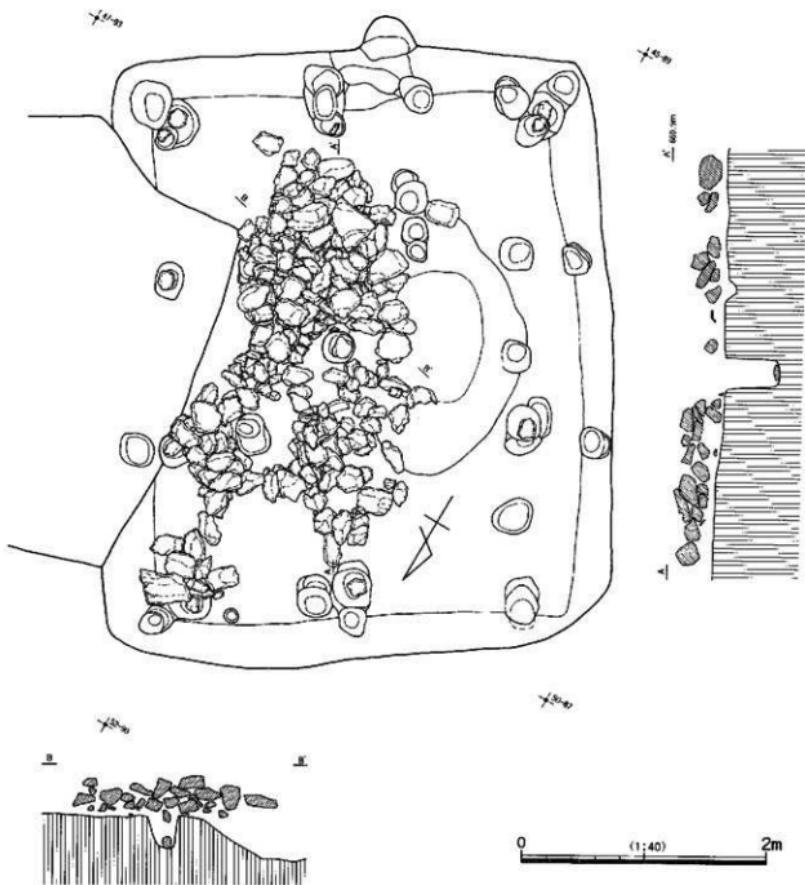
5号方形竪穴状遺構

遺構の概要（第54図）

調査区の中央よりや東、南北に延びる畠高地の東端、X=46、Y=84グリッドに位置する。東には3号方形竪穴状遺構、西にはやや離れて2号方形竪穴状遺構がある。東西長4.0m、南北長3.15mのやや東西に長い長方形プランを呈し、床面積は11.55m²を測る。主軸をN=62°Eにとる。深さは東側で1.05m、西側で0.77mを測り、四壁とも垂直に立ち上がっている。東壁中央よりや北側に、地山を掘り残した出入口施設をもつ。施設は内側に50cmほど掘り残す明顯なもので、ステップが2段認められる。上部もほとんど壁内側

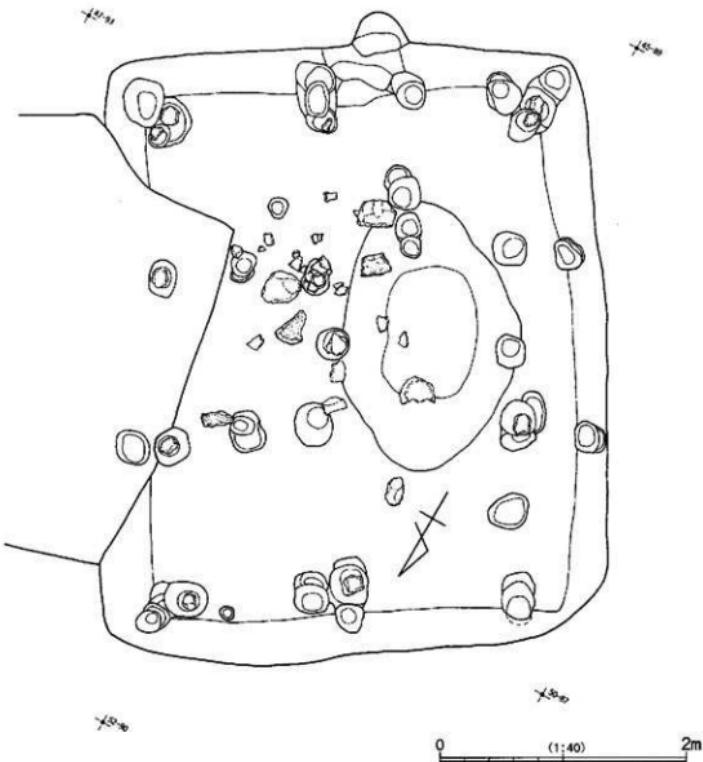


第47図 3号方形竪穴状遺構平面図



第48図 3号方形竪穴状遺構縫出状況

にあるが、2段より上は外側へ張り出させている。覆土の土層観察では7層ほどが確認されたが、各層は明瞭に区分でき短時間で埋まったようなあり方を示しており、人為的に埋められたものと判断できる。床は全面にわたって硬化していた。また、火気の掘り込みはみられなかったが、入口部付近の4カ所に焼土と炭化物の集積した範囲が認められた。柱穴は主に壁面に沿って配置されているが、竪穴中央にも柱穴をもつ。そのほか、入口南側にも60cmの間隔で2本の柱穴を配している。奥壁にあたる西側壁では、両コーナーに柱穴をももその間に55cm間隔で5本の柱穴を均等に配している。一方南北や東壁では、中央付近に1本をもつだけである。柱穴は円形とはならず、長方形を呈するものが多くみられる。長径が15cm足らずのものもみられ、柱設置にあたって柱穴を掘らず、長方形の角材を打ち込んだのではないかと思われる。また、竪穴奥壁にあたっては柱材を抜き取るために柱穴付近を掘った痕跡がP1、P10以外の柱穴にみられた。



第49図 3号方形堅穴状遺構遺物出土状況

遺物出土状況（第54図）

取り上げ点数188点を数えるが、本堅穴でも平安時代の土師器細片などが多くみられ、本遺構の時代を示す資料はほとんど出土していない。

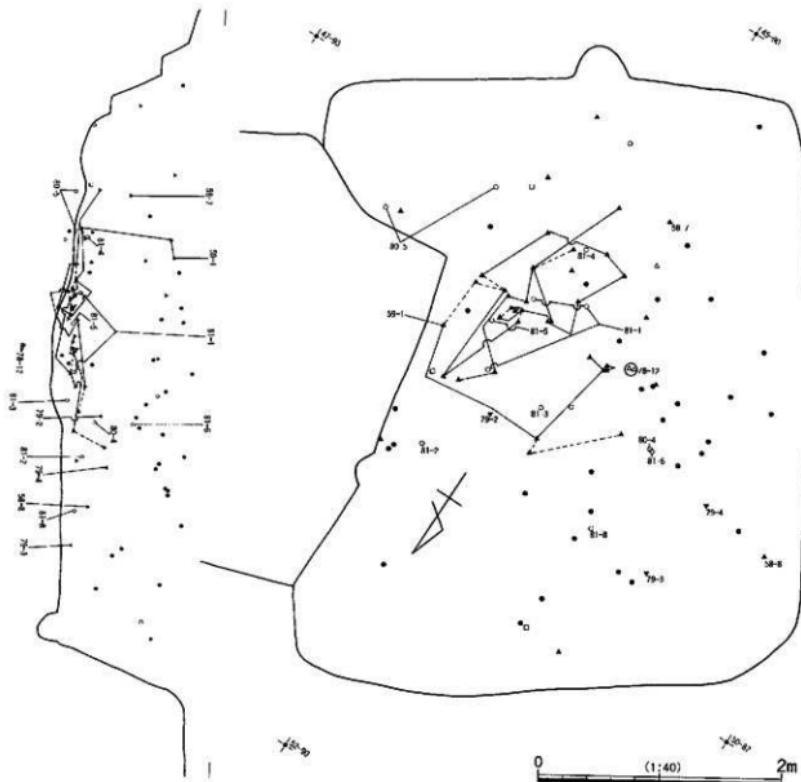
出土遺物（第59図）

6は須恵器坏、8は上部器坏類破片、いずれも平安時代のものである。8は墨書きがみられ「伯」と思われる。7は古瀬戸の灰瓦半瓦である。9は舟母横の茶壺肩部資料である。4号方形堅穴状遺構出土の茶壺と同一個体の可能性もある。

6号方形堅穴状遺構

遺構の概要（第52・56図）

遺跡中央付近の南側、X=37、Y=73グリッドに位置する。北側の一部を1号方形堅穴状遺構に、東側を4号方形堅穴状遺構、西側を7号方形堅穴状遺構に切られており、6号方形堅穴状遺構として調査できたのはわずかに北側のコーナーを含む1.5m足らずの面積である。床面のレベルは4・7号方形堅穴状遺構とはほとんど同じである。3棟重複した柱穴から6号方形堅穴状遺構の柱穴を抽出するのは困難ではあるが、根石をもつ柱穴があり手がかりとなりうる。P3・P14・P22はともに根石をもち、2.4m前後の間隔で一列に



第50図 3号方形竪穴状遺構遺物分布図

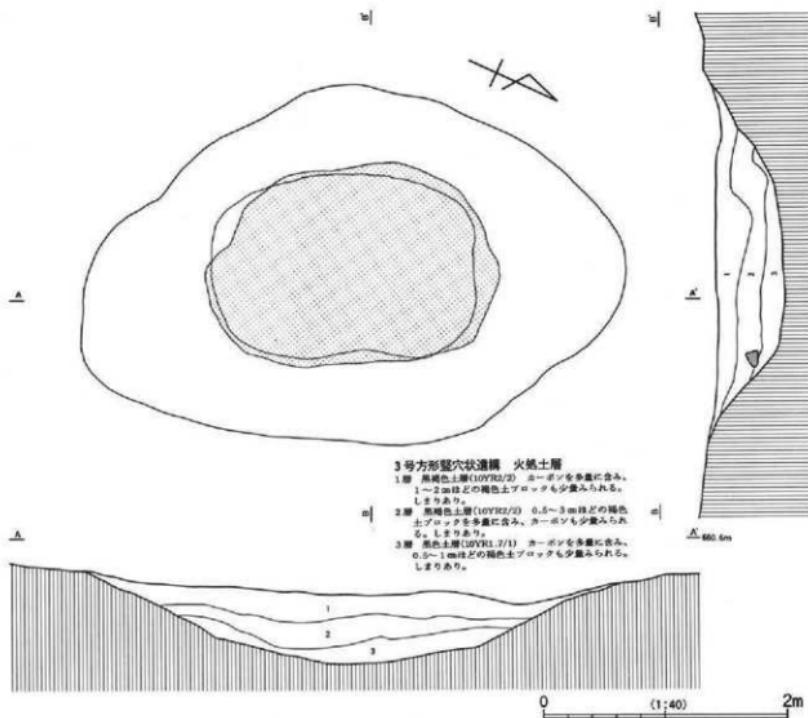
並ぶことからおそらく同一の柱穴群であると思われる。4・7号方形堅穴状遺構とも規模が小さく、この柱穴列を配置できるのは6号方形堅穴状遺構だけである。また、P3は一部残る東壁の延長線上にあり、位置的にも他の堅穴の例からして間違いないものと考える。P22が同一の柱穴群だとすれば、確認されている7号方形堅穴状遺構の西壁が、6号方形堅穴状遺構の西壁と同一であるとすることができる。これから規模を考えると、東西5.2mの方形プランを呈することになり、南側半分は調査区外に位置している。また、P10・P16・P23も4・7号方形堅穴状遺構ににまたがることから、6号方形堅穴状遺構のものと考える。わざわざにしか残らない床面は硬化がみられる。床に柱穴以外、火凧などの付属施設は確認されていない。本堅穴の上層堆積は、他の堅穴の堆積状況とは異なり、比較的細かい粒子の土層が薄く幾重にも堆積したような状況をみせ、唯・自然埋没したものとみられる。

遺物出土状況（第56図）

調査面積が限られていたため、遺物としては6点が出土したにすぎない。鉄製品が出土しているが、遺構確認面からの出土である。

出土遺物（第59・78圖）

本堅穴からは、本来の遺構構築年代を示すような遺物は出土していない。第59図10は平安時代の須恵器壺である。第78図13は断面方形の棒状鉄製品であり、3号方形窓穴は遺構出土棒状鉄製品と類似している。鉄



鐵の可能性もあるが、用途は不明である。

7号方形堅穴状遺構

遺構の概要 (第52・57図)

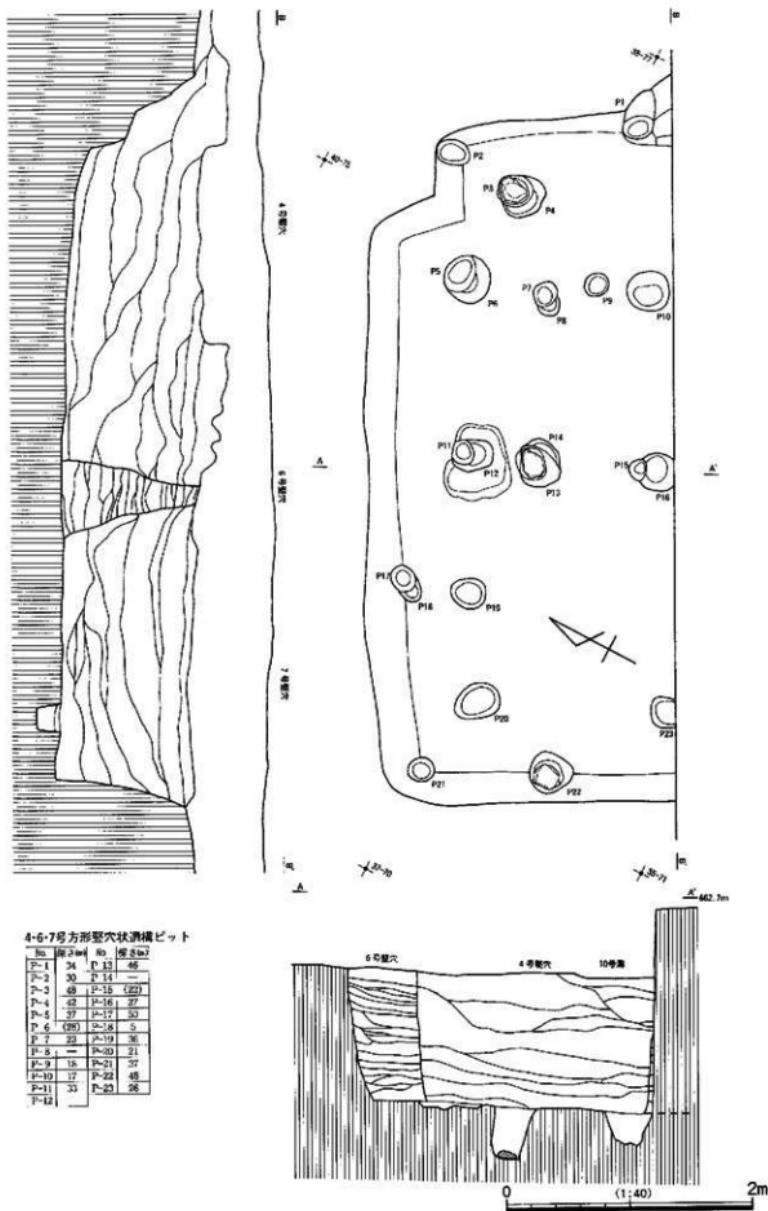
調査区中央付近の南寄り、X=36、Y=73グリッドに位置する。6号方形堅穴状遺構を切り、6号方形堅穴状遺構の覆土中に掘られている。4号方形堅穴状遺構が西に隣接し、確認面での距離はわずかに10cmしかないが、新旧関係は不明である。東西のセクション面において、7号方形堅穴状遺構の東壁が6号方形堅穴状遺構の覆土を切っているのが確認されているが、西壁が切っているのは確認できなかった。おそらく、西壁は6号方形堅穴状遺構の壁をそのまま使用したものと考えられる。北西コーナーから北壁についても同様なことがいえる。床面のレベルは4・6号方形堅穴状遺構と同一である。本堅穴の柱穴は判然としないが、北側の壁際に造られたP17・P18・P21などが本堅穴に属するものとしてよいと考える。中央および南側のピットについては不明である。

遺物出土状況 (第57図)

遺物取り上げ点数114点を数えるが、隣接する他の方形堅穴状遺構同様、平安時代の土師器小破片が多数を占める。また、遺物は散在傾向にあり、本遺構に直接関わると思われる遺物はまったく出土していない。

出土遺物 (第59図)

本堅穴からも遺構の構築年代を示すような遺物は出土していない。IIは土師器杯口縁部破片であるが、墨



第52図 4・6・7号方形竖穴状通構平面図

書がみられる。12は黒色土器の壺底部破片。13は須恵器壺である。これらはいずれも平安時代の所産である。

第3節 土坑・ピット

本遺跡からは、45基の土坑と48基のピットが発見されている。土坑とピットの区分については、径30cm程度を境として大きいものを土坑、小さいものをピットとした。ただし、厳密に区分したものではない。個々の土坑およびピットのデータについては、表にまとめてあるのでそちらを参照されたい。(第1表)。

土坑

遺構の概要(第60~66・69図)

土坑は調査区西側と方形窓穴状遺構が密集する地区的北側に集中する。調査区の東側では、2基が散在するだけである。15号土坑からは、石鉢が出土しており3号方形窓穴状遺構の石鉢と接合関係にあり、中世の所産であると思われる。40号土坑は、5号方形窓穴状遺構に隣接しており、土軸も一にしている。東西長1.12m、南北長0.92mの長方形を呈する。土坑四隅には径10~15cmのピットをもち、深さは底面から15~25cmを測る。ピットが四隅にあることから、方形窓穴状遺構と類似した構造となる。本土坑は5号方形窓穴状遺構の付属施設として設けられた可能性が高いものといえる。

その他、集石土坑が1基ではあるが発見されているが、縄文および縄下より縄文土器、平安時代の土師器の小破片が出土しているだけである。

出土遺物(第70図)

土坑からの出土遺物はわずかなもので、土師器の小破片がほとんどを占める。これらは直接土坑の年代を特定する資料となりうるかについて断定できない。

1は4号土坑出土の小形壺である。外面はヘラ削りされている。2・3は7号土坑出土土師器である。2は体部下半をヘラ削りしている。3は皿形土器の底部資料で、内面には渦巻き状縞文があり、底部には墨書きがみられる。「東」か。4・5は20号土坑出土土師器。4は黒色土器壺。5は壺で、内面には暗文、体部下半は手持ちヘラ削りされている。底部には回転糸切り痕を残す。6は18号土坑出土の土師質土器口縁部破片である。おそらく内耳土器の破片であると思われる。7は22号土坑出土土師器皿である。8は27号土坑出土土師器鉢の資料で、内面には胎文をもつ。胎土も甲斐型壺のそれと同じである。9は31号土坑出土黒色土器壺。32号土坑からは2点の陶器が出土している。10は常滑広口壺の口縁であると思われる。11は猿投縁軋陶器の底部破片である。底部内面は研磨されており、軋用鏡として使用されたものである。12は44号土坑出土の黒色土器壺である。

ピット

遺構の概要(第67~69図)

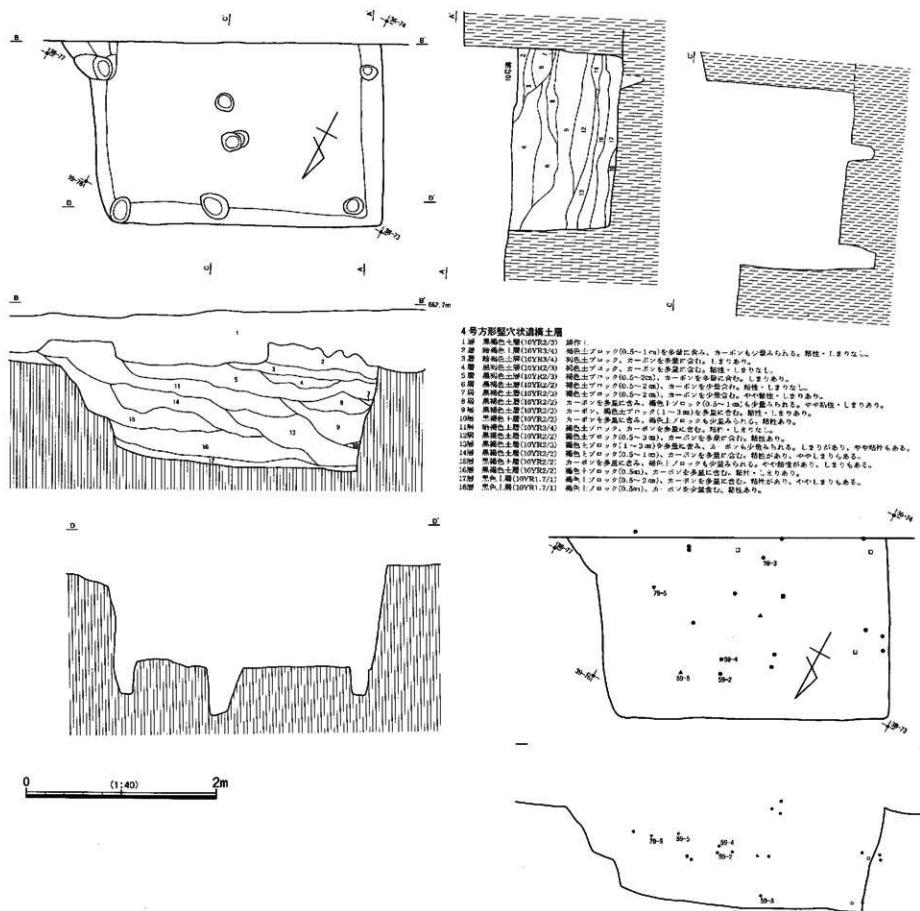
ピットは調査区西側、中央に位置する住居群と西側に位置する住居群の間に群集する。これらのうち掘立柱建物跡の柱穴となるような配列を示すものはみられなかった。

出土遺物(第70図)

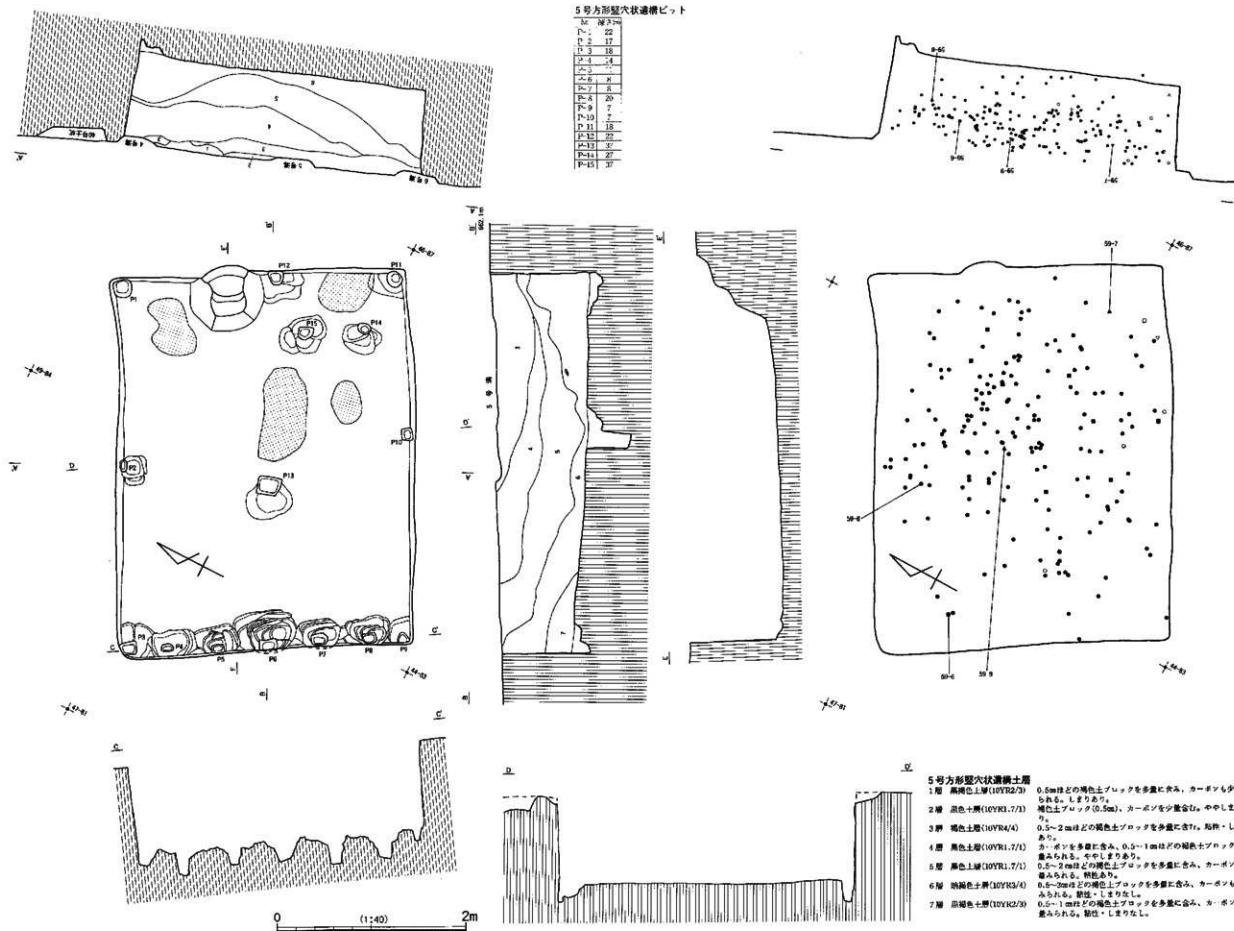
ピットからは出土遺物があまりみられず、土師器の破片などを中心にわずかずつ出土している。13は10号ピット出土の土師器壺口縁部破片であるが、墨書きがみられる。墨書きは判読不明。14は12号ピット出土の土師器壺底部資料である。

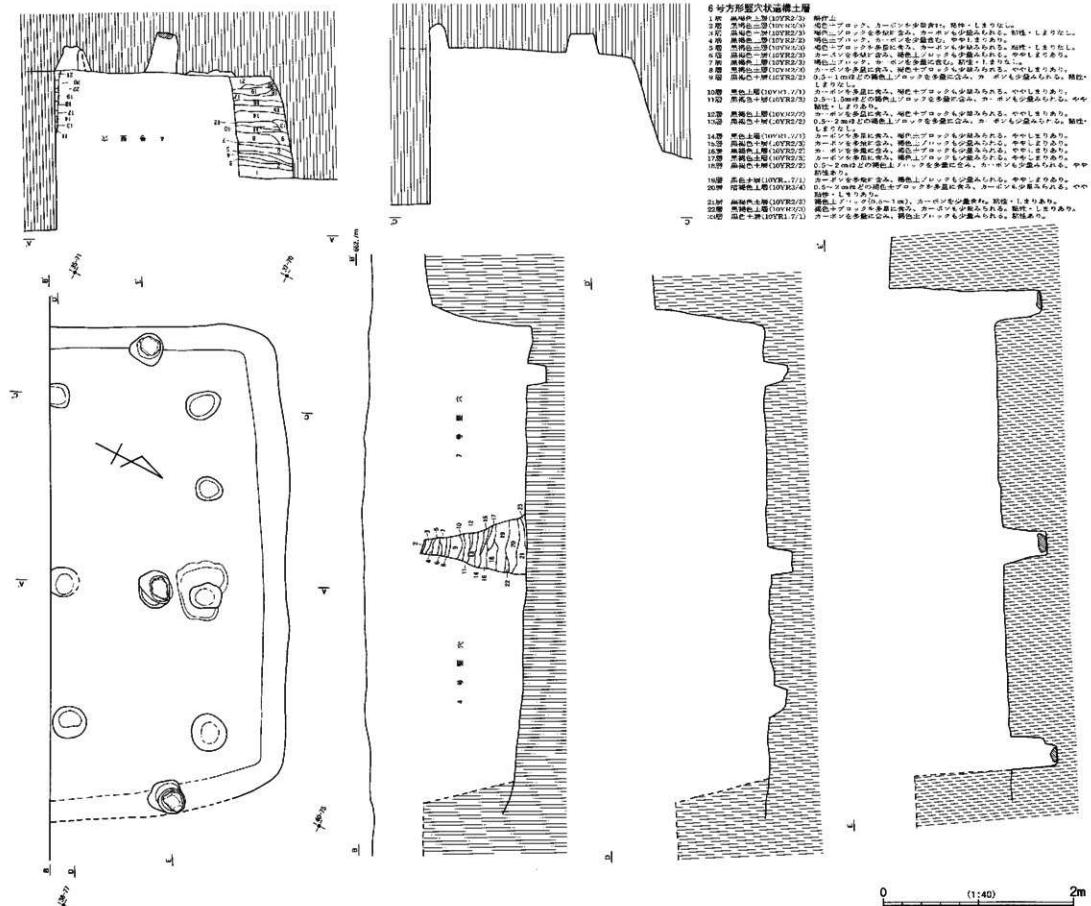
第4節 溝 跡

本遺跡からは、16条の溝が発見されている。

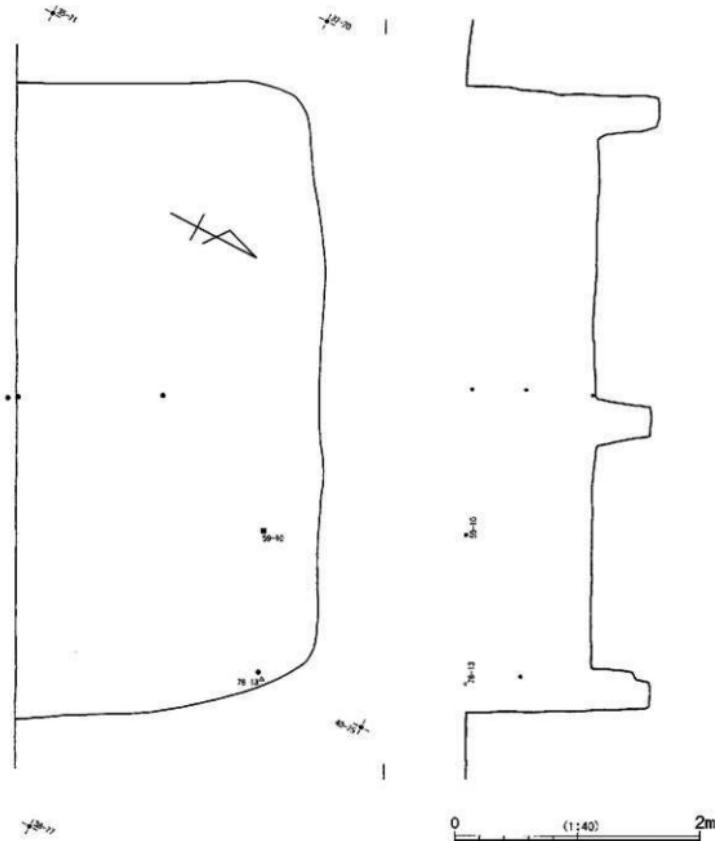


第53図 4号方形堅穴状遺構平面図・遺物分布図





第55図 6号方形堅穴状造様土層



第56図 6号方形堅穴状遺構分布図

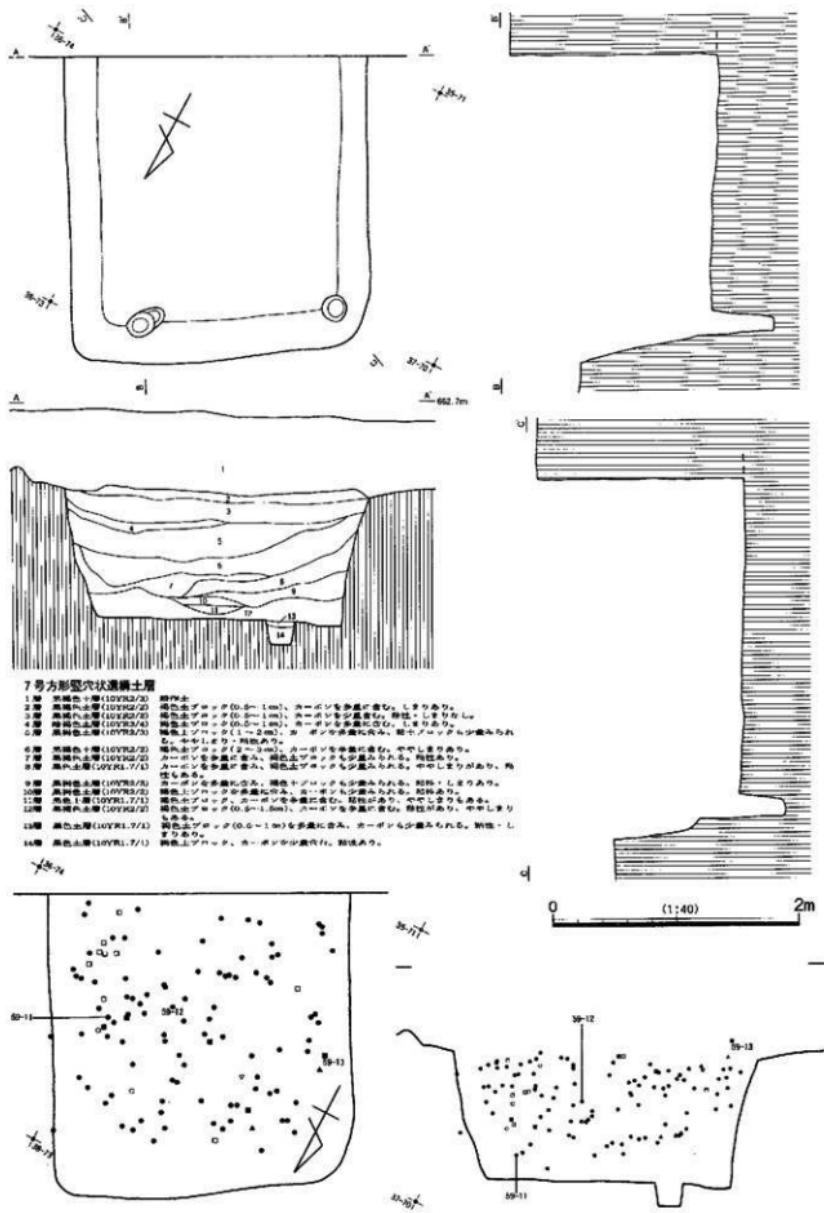
1~12号溝

遺構の概要（第71図）

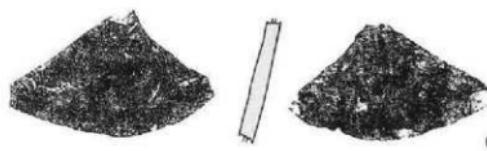
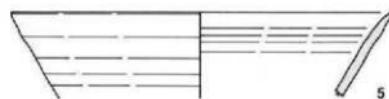
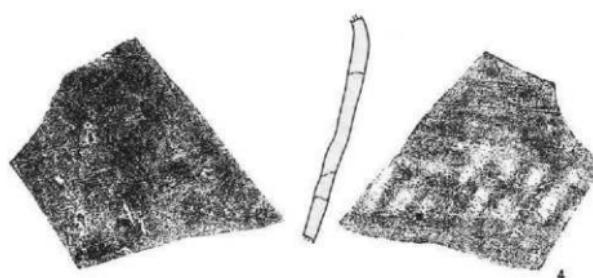
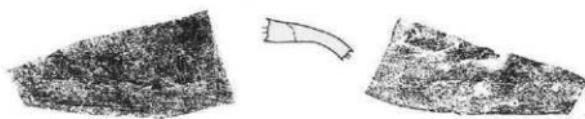
1~12号溝は、調査区中央よりやや東側に位置する。溝はすべて幅40~50cmほどで、主軸を N~78°~W 前後にとりこれと主軸を異にするものは全くみられず、平行して掘られていた。また、覆土もやわらかく、表土および耕作土に類似したものであった。この溝が掘られているのは、畑の一筆分の区画と一致しており、近年まで桑園であったという。溝の底部は現地表下60~70cmになり、耕作のため桑の間をこれほど深く掘ることはないと、おそらく耕作のため桑の間に掘られた溝であると思われる。また、溝は等間隔にすべて平行しており、重複もみられないことから、一時期に掘られたものであろう。表土からはやや深いが、耕作に関わる痕跡であるため歯状遺構ともいえるものである。溝は方形堅穴状遺構をはじめとして、多くの遺構と重複関係にあるが、すべて1~12号溝が重複する遺構を切っている。近世以降の所産であると思われるが、明確な時期については不明である。調査された遺構の中ではもっとも新しい時期に属する遺構の一つである。

出土遺物（第77・78・80図）

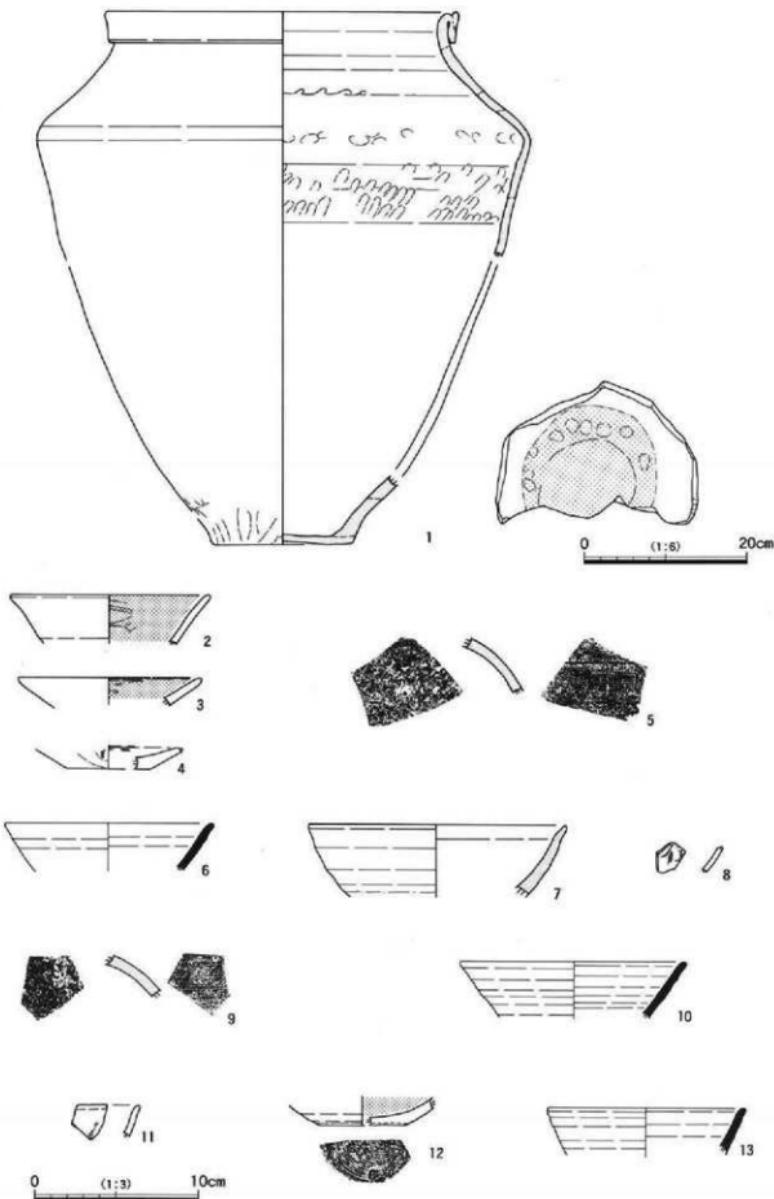
1~12号溝からは多くの上器片が出土しているが、土師器坏の小破片などが多数を占める。第77図1は5



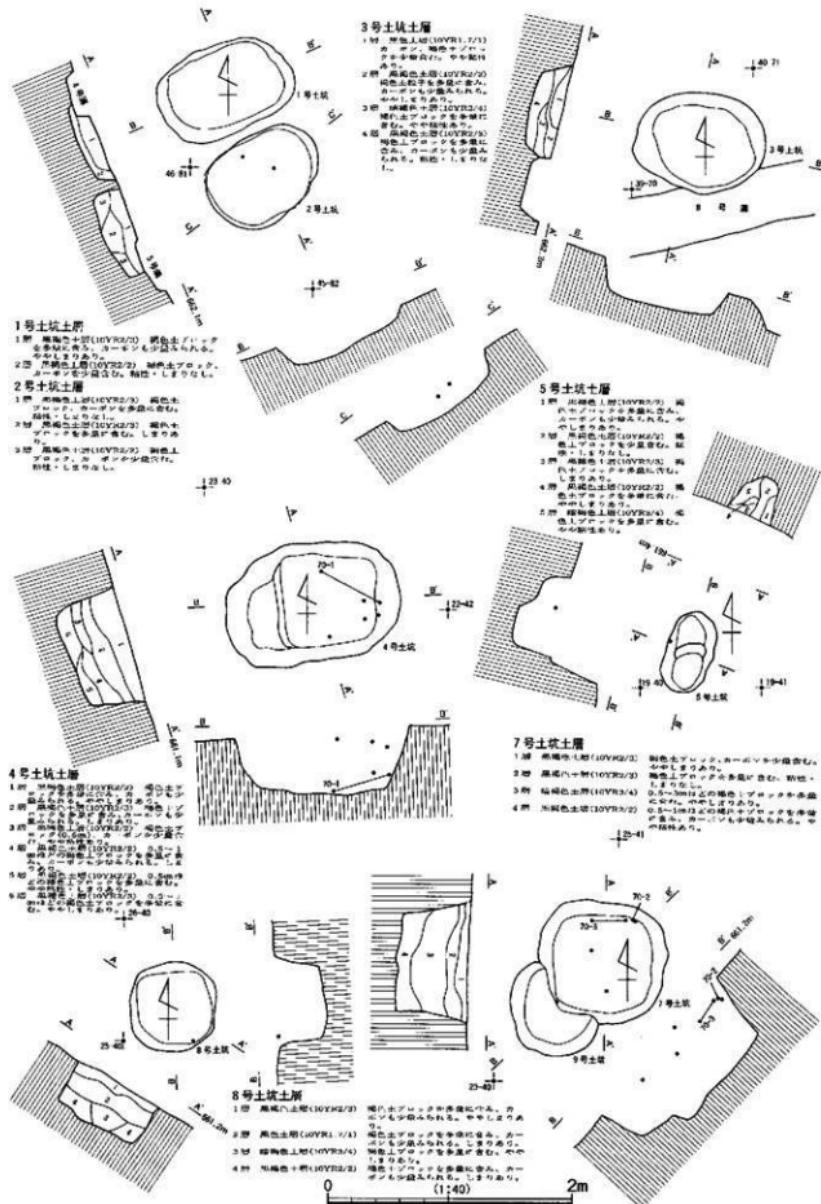
第57図 7号方形堅穴状遺構平面図・遺物分布図



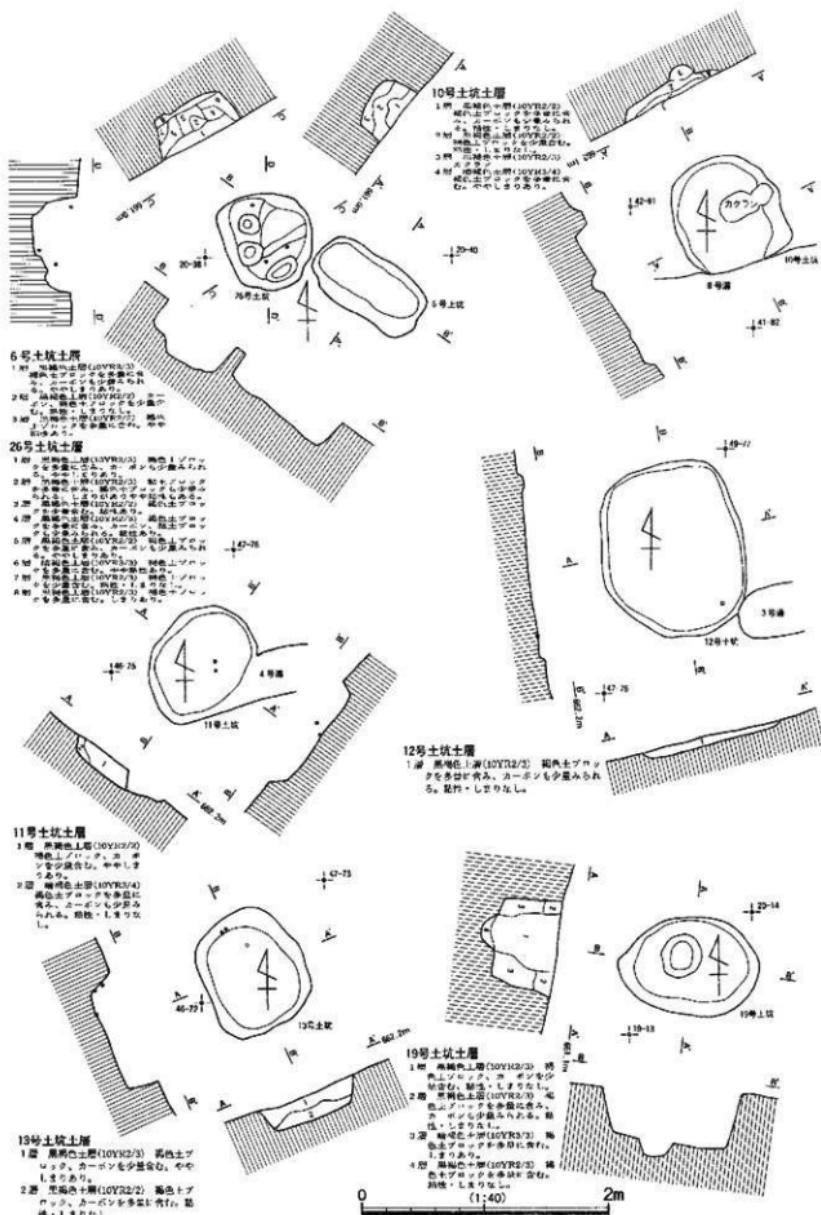
第58図 方形竪穴状遺構出土土器 (1)



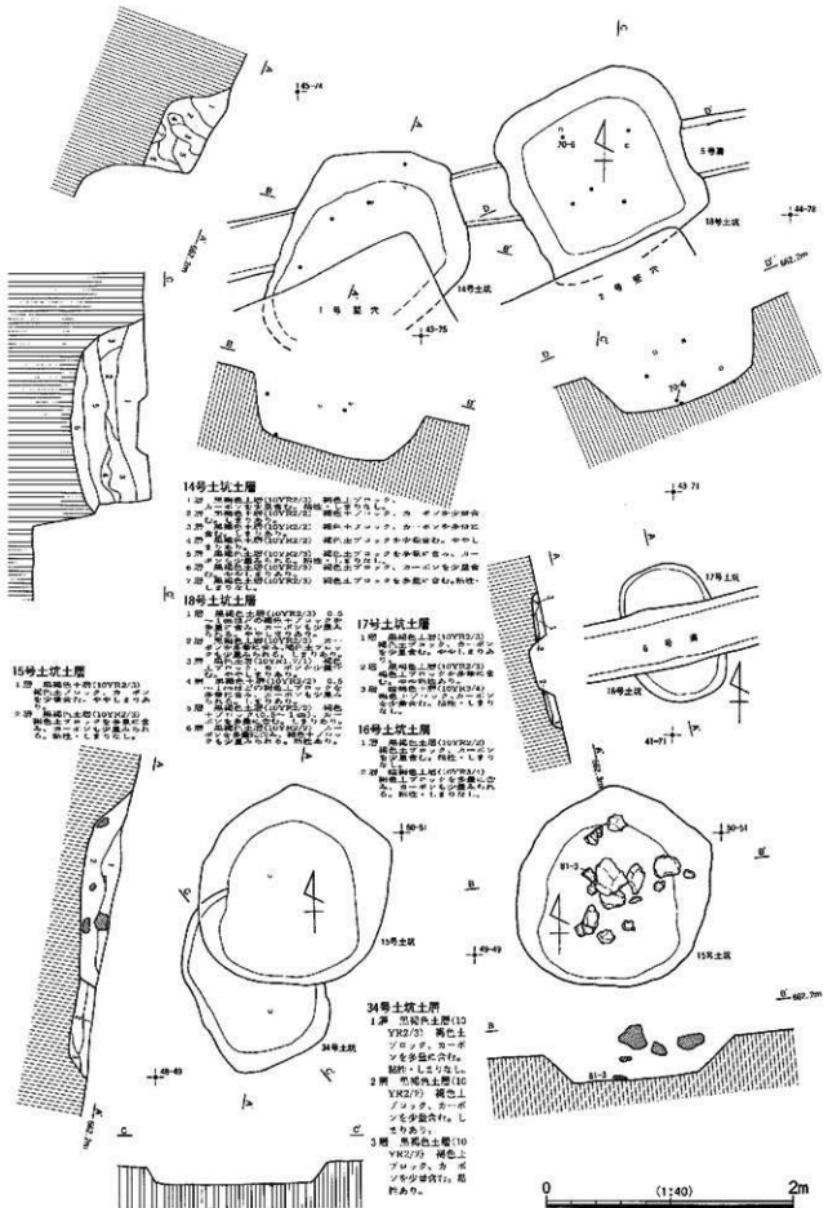
第59图 方形竖穴状遗构出土土器 (2)



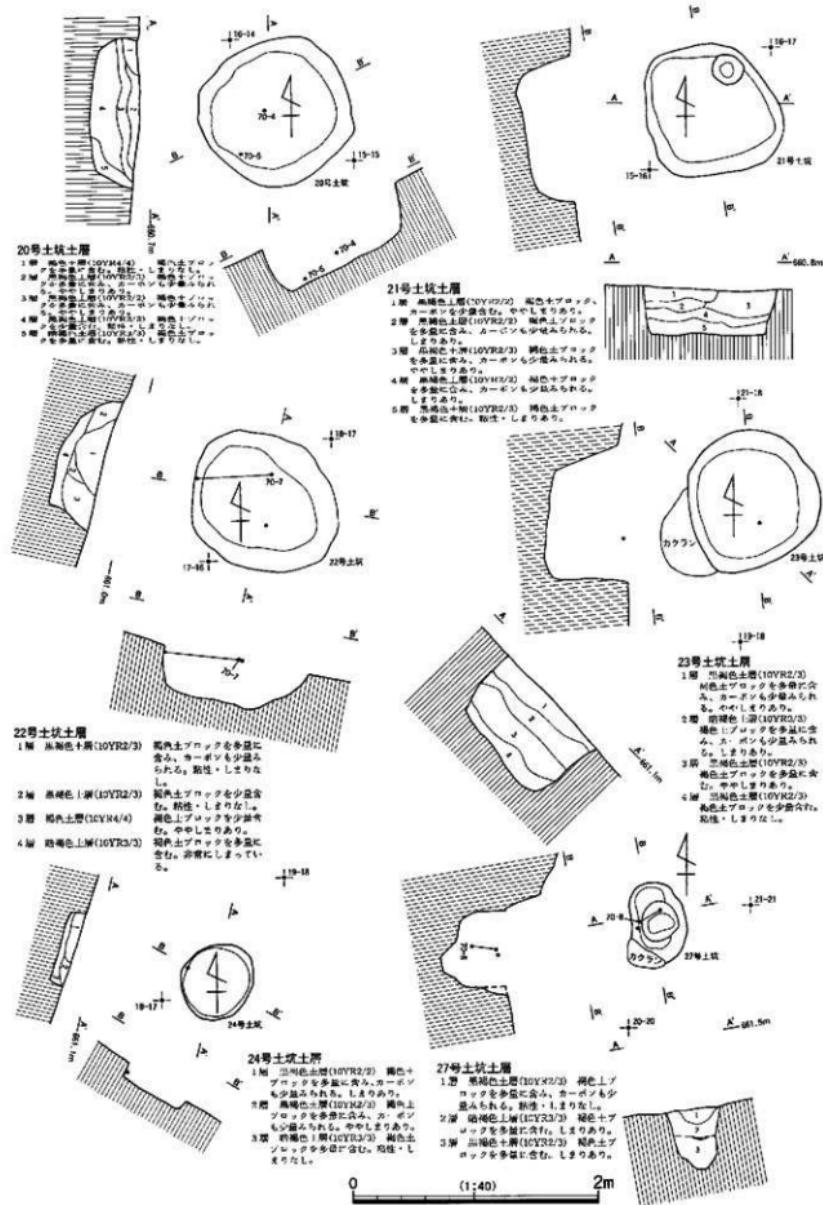
第60図 土坑平面図・断面図 (1)



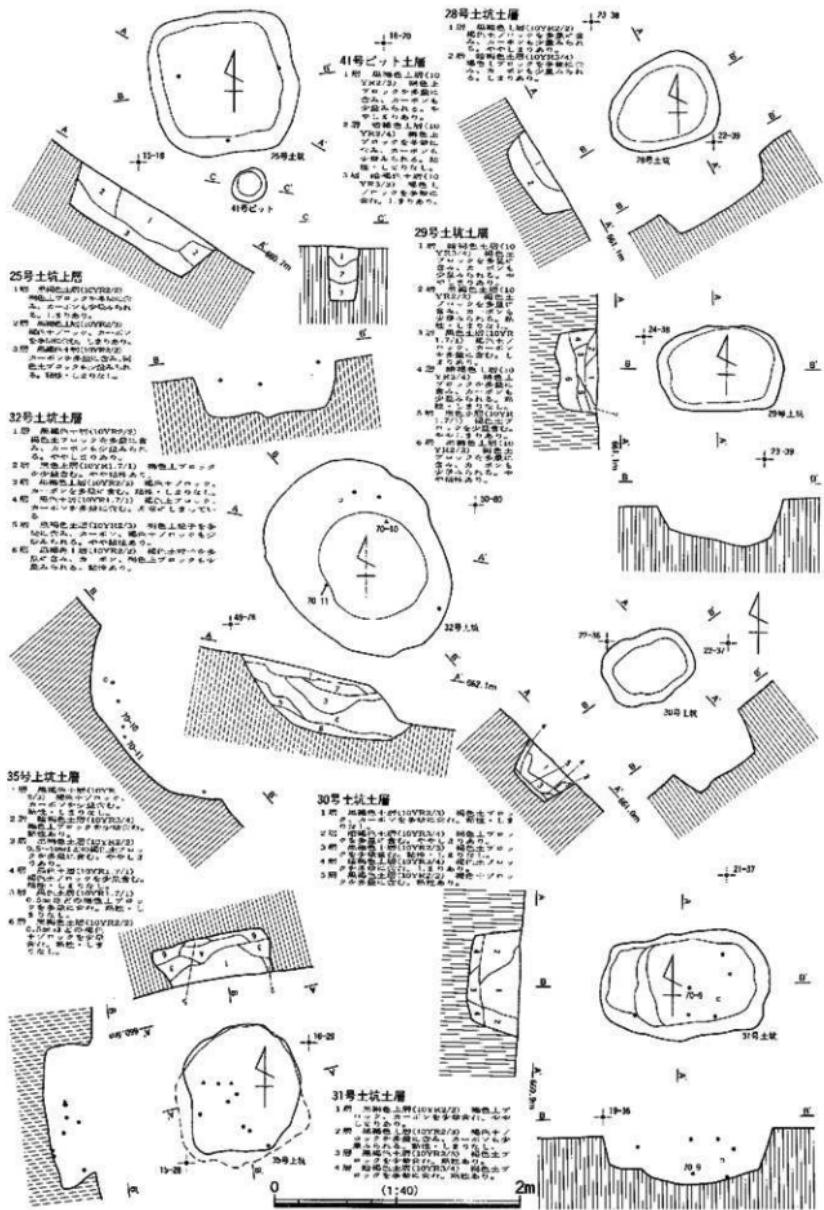
第61図 土坑平面図・断面図 (2)



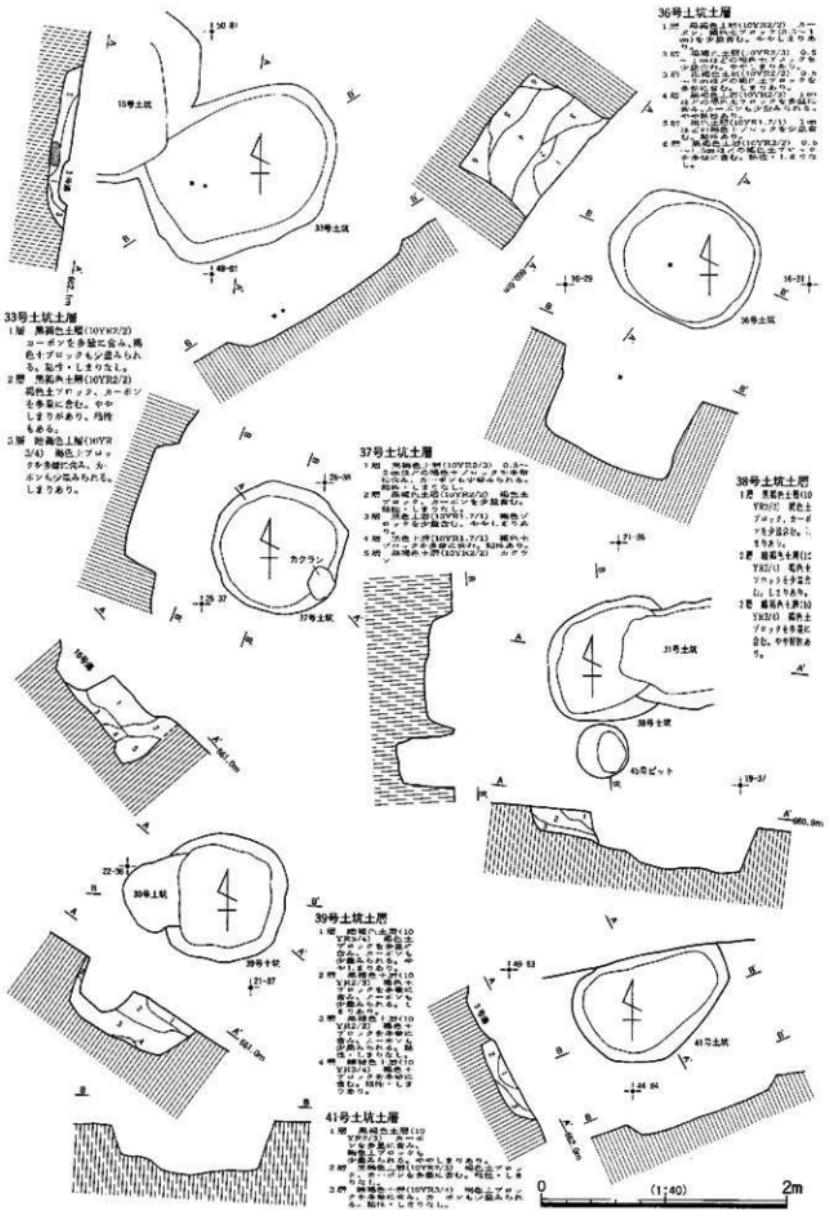
第62図 土坑平面図・断面図（3）



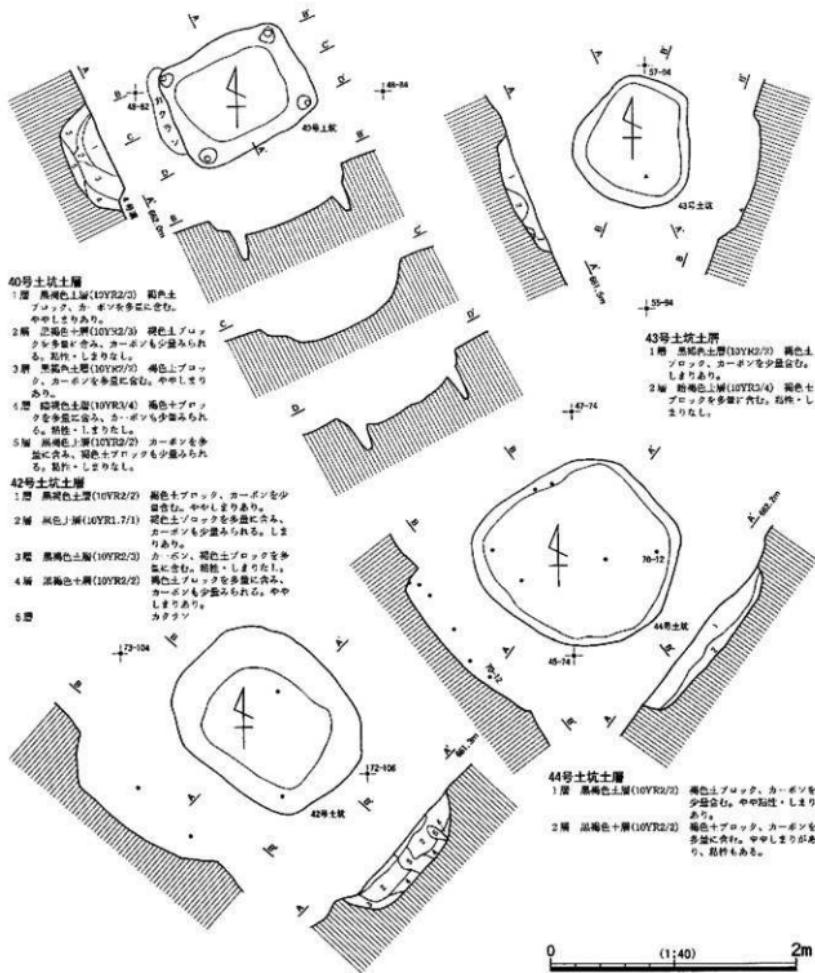
第63図 土坑平面図・断面図 (4)



第64図 土坑平面図・断面図(5)



第65図 土坑平面図・断面図 (6)



第66図 土坑平面図・断面図(7)

第1表 土坑・ピット一覧表

単位:m
〔 〕内の数値は復元長

No.	ピット	形態	主軸	上端 幅×切深	下端 幅×切深	深さ	出土遺物	備考
1号土坑	46-81	長方形	N-68-E	1.10×0.75	0.91×0.62	0.18		4号溝に切られる
2号土坑	45-81	横円	N-37-E	0.99×0.70	0.87×0.66	0.24	上部器2点	5号溝に切られる
3号土坑	39-70	横円	N-67-W	1.06×0.84	0.88×0.69	0.26		8号溝に切られる
4号土坑	21-40	長方形	N-88-E	1.44×0.98	0.76×0.74	0.51	十輪器6点	20号ピットに切られる
5号土坑	19-40	長方形	N-17-E	0.68×0.40	0.32×0.22	0.34	上部器1点	
6号土坑	19-39	長方形	N-52-W	0.98×0.89	0.50×0.30	0.25		
7号土坑	23-45	横丸方	N-88-W	1.06×1.00	0.83×0.80	0.57	上部器7点	9号上部を切る
8号土坑	25-40	方	N-3'-W	0.74×0.70	0.60×0.59	0.37	十輪器6点	
9号土坑	23-40	横円	N-1'-E	—	—	0.43		7号土坑に切られる
10号土坑	41-81	横円	N-20'-W	— × 0.88	— × 0.72	0.12		8号溝に切られる 中央カタラン
11号土坑	45-75	横円	N-35-E	1.01 × (1.09)	0.90 × 0.66	0.18	上部器2点	4号溝に切られる
12号土坑	48-76	長方形	N-7'-W	1.45 × 1.17	1.35 × 0.88	0.07	頭部器1点	3号溝に切られる
13号土坑	46-72	横円	N-95'-W	0.97 × 0.83	0.82 × 0.63	0.22	頭部器1点 十輪器2点	
14号土坑	53-74	不整横円	N-14'-E	—	—	0.45	瓦2点 上部器4点	5号溝に切られる 1号万形 鋼穴状遺物を切る
15号土坑	49-80	横円	N-9'-E	1.64 × 1.50	1.30 × 1.05	0.27	石柱1点	32-33-34号上杭を切る
16号土坑	41-71	横円	—	—	—	0.09		6号溝に切られる
17号土坑	41-70	横円	—	—	—	0.08		6号溝に切られる
18号土坑	54-76	方	N-64-E	1.51 × —	1.12 × 1.10	0.55	頭部器3点 横文土器2点 土頭部器1点 瓦器器1点	5号溝に切られる 2号万形 鋼穴状遺物を切る
19号土坑	19-13	横円	N-84'-W	1.10 × 0.81	0.92 × 0.64	0.50		
20号土坑	15-14	不整円	—	1.22 × 1.18	1.03 × 0.91	0.41	上部器2点	
21号土坑	15-16	不整円	N-15'-W	1.10 × 0.08	0.95 × 0.89	0.38		
22号土坑	17-16	横円	N-58-W	1.28 × 1.19	1.03 × 0.76	0.37	頭部器3点	
23号土坑	20-18	不整方	—	1.14 × 1.07	0.90 × 0.82	0.65	頭部器1点	
24号土坑	18-17	方	—	0.63 × 0.57	0.56 × 0.52	0.12	頭部器1点	西側カタラン
25号土坑	15-18	方	N-83-E	1.30 × 1.18	0.97 × 0.94	0.38	上部器1点	
26号土坑	19-38	不整	N-7'-W	0.78 × 0.72	0.68 × 0.58	0.35	上部器3点	
27号土坑	20-20	横円	N-9'-W	0.68 × 0.45	0.50 × 0.24	0.40	頭部器3点	
28号土坑	22-38	横円	N-63-E	0.95 × 0.75	0.80 × 0.59	0.25		
29号土坑	25-38	長方形	N-87-E	1.02 × 0.70	0.85 × 0.62	0.33		
30号土坑	21-36	横円	N-63-E	0.75 × 0.56	0.58 × 0.41	0.42		39号土坑を切る
31号土坑	19-36	横丸方	N-87'-E	1.38 × 0.88	0.88 × 0.68	0.42	上部器6点 瓦器1点 瓦器1点	38号土坑を切る
32号土坑	49-79	横円	N-30'-W	1.69 × 0.34	0.92 × 0.80	0.47	頭部器3点 瓦器1点 瓦器1点	15号土坑に切られる 34号土坑に切られる
33号土坑	48-81	不整横円	N-67-E	1.64 × 1.26	1.45 × 0.15	0.16	頭部器1点 瓦器5点	15号土坑・3号溝に切られる
34号土坑	48-79	不整横円	N-22'-W	—	—	0.17	瓦文土器1点	15号土坑に切られる 32号土坑を切る
35号土坑	15-28	不整	N-1'-E	1.04 × 0.93	1.16 × 0.12	0.39	上部器2点 瓦器6点 瓦器6点	5号溝に切られる 東側カタラン
36号土坑	16-30	横円	N-69-W	1.21 × 1.06	1.02 × 0.97	0.73	頭部器1点	
37号土坑	25-37	不整円	—	1.10 × 1.09	0.92 × 0.90	0.33		16号溝に切られる 東側カタラン
38号土坑	19-35	不整	N-77-E	— × 0.98	— × 0.80	0.21		31号土坑に切られる
39号土坑	21-36	方	N-3'-E	1.05 × (0.96)	0.82 × 0.75	0.40		30号土坑に切られる
40号土坑	47-82	長方	N-68-E	1.12 × 0.92	0.88 × 0.63	0.31		西側カタラン ピット深さ15~20cm 4号溝に切られる
41号土坑	48-84	横円	N-64-E	1.30 × —	1.12 × 0.61	0.13		3号溝に切られる
42号土坑	72-105	横丸方	N-51-W	1.34 × 1.24	1.01 × 0.80	0.32	上部器2点	
43号土坑	56-93	不整	N-23-E	1.05 × 0.98	0.85 × 0.78	0.18	頭部器1点	
44号土坑	45-73	不整	—	1.51 × 1.50	1.36 × 0.34	0.23	上部器6点	4号溝に切られる
45号土坑	43-69	横円	N-66-E	1.29 × —	1.07 × —	0.17	十輪器3点 瓦文土器1点	5号溝に切られる
1号ビット	27-34	円	—	0.36 × 0.28	0.24 × 0.16	0.15		
2号ビット	27-35	横円	—	0.42 × 0.36	0.18 × 0.06	0.52	上部器1点	
3号ビット	27-35	横円	—	0.48 × 0.38	0.27 × 0.26	0.28	上部器1点 西側1点	
4号ビット	25-53	横円	—	— × 0.35	0.27 × 0.22	0.21		
5号ビット	26-52	横円	—	0.50 × 0.40	0.44 × 0.32	0.08	十輪器1点	6号ビットを切る
6号ビット	25-52	円	—	0.24 × —	0.19 × —	0.08		5号ビットに切られる
7号ビット	26-51	横円	—	0.39 × 0.27	0.08 × 0.08	0.30	上部器1点	
8号ビット	23-47	円	—	0.30 × 0.29	0.19 × 0.17	0.05	頭部器1点	
9号ビット	25-47	円	—	0.25 × 0.23	0.19 × 0.18	0.04		
10号ビット	25-47	円	—	0.36 × 0.32	0.23 × 0.22	0.35	上部器1点	
11号ビット	22-46	円	—	0.30 × 0.28	0.23 × 0.22	0.05	十輪器1点	
12号ビット	23-44	円	—	0.38 × 0.33	0.23 × 0.22	0.26	十輪器5点	
13号ビット	23-43	円	—	0.40 × 0.34	0.23 × 0.22	0.24		
14号ビット	23-43	円	—	0.54 × 0.46	0.43 × 0.30	0.24	上部器1点	
15号ビット	22-41	円	—	0.44 × 0.42	0.36 × 0.32	0.28		
16号ビット	21-44	円	—	0.58 × 0.49	0.36 × 0.24	0.38	十輪器1点	
17号ビット	23-41	円	—	0.32 × 0.30	0.16 × 0.12	0.23		
18号ビット	23-41	円	—	0.31 × 0.28	0.23 × 0.22	0.12		
19号ビット	23-41	円	—	0.32 × 0.35	0.10 × 0.08	0.19		
20号ビット	21-41	横円	—	0.36 × 0.32	0.25 × 0.22	0.08		4号土坑を切る
21号ビット	26-54	円	—	0.34 × 0.25	0.18 × 0.14	0.31		
22号ビット	26-51	円	—	0.39 × 0.35	0.30 × 0.26	0.21	上部器1点	
23号ビット	29-49	円	—	0.39 × 0.33	0.27 × 0.24	0.12	上部器2点	
24号ビット	28-49	横丸方	—	0.43 × 0.25	0.38 × 0.18	0.13		25号ビットを切る
25号ビット	28-49	横円	—	— × 0.42	— × 0.37	0.14	上部器1点	24号ビットに切られる
26号ビット	27-49	円	—	0.30 × 0.26	0.21 × 0.18	0.14		28号ビットに切られる
27号ビット	27-49	横円	—	— × 0.26	— × 0.19	0.04		27号ビットを切る
28号ビット	26-49	横円	—	0.39 × 0.50	0.39 × 0.35	0.25	上部器1点	

No	グリッド	形態	主軸	上端 長径×短径	下端 長径×短径	深さ	出土遺物	参考
29号ピット	28-48	円		0.36×0.31	0.21×0.21	0.13		
30号ピット	28-48	円		0.38×0.34	0.28×0.23	0.10		
31号ピット	27-46	円		0.26×0.24	0.19×0.16	0.13		
32号ピット	25-45	円		0.39×0.29	0.07×0.06	0.25		
33号ピット	25-44	楕円		0.51×0.42	0.34×0.29	0.26		
34号ピット	25-43	円		0.38×0.34	0.25×0.24	0.21		
35号ピット	25-42	円		0.34×0.26	0.18×0.14	0.17		
36号ピット	26-45	円		0.36×0.34	0.25×0.24	0.14		
37号ピット	28-41	楕円		0.30×0.27	0.24×0.21	0.06		
38号ピット	18-19	円		0.43×0.40	0.35×0.34	0.40		
39号ピット	18-20	円		0.43×0.42	0.42×0.41	0.42	土師器1点	
40号ピット	13-10	円		0.39×0.31	0.26×0.21	0.11		
41号ピット	14-18	円		0.31×0.26	0.21×0.19	0.45		
42号ピット	17-34	円		0.38×0.33	0.35×0.32	0.34	土師器2点	
43号ピット	17-35	円		0.34×0.29	0.27×0.27	0.23		
44号ピット	17-36	円		0.30×0.28	0.28×0.23	0.43	土師器1点	
45号ピット	19-35	円		0.45×0.41	0.34×0.23	0.48		
46号ピット	15-28	円		0.44×0.42	0.34×0.32	0.12	鐵文1点	
47号ピット	14-25	楕円		0.54×0.44	0.42×0.34	0.07	+土師器7点	
48号ピット	13-23	円		0.48×0.38	0.28×0.24	0.60		

今溝出土の灰釉陶器皿である。2は6号溝出土・鉢釉印花文瓶子胴部下半の破片である。いわゆる梅瓶である。胴部を印花手法により模もしくは梅の花と唐草文で埋めている。古瀬戸中II期に比定される。破片となってから被熱しており、内面および断面に焦が付着している。3は12号溝出土の土師器杯で、墨書きがみられる。墨書きは判読不明。4は須恵器坏で11号溝出土。第78図14は3号溝出土の環状鉄製品。15は4号溝出土の断面方形の鉄片。16は5号溝出土鉄片。17は16号溝出土棒状鉄製品。18は9号溝出土上板状鉄製品。いずれも帰属時期も含め用途は不明。第80図6・7は7号溝出土の砥石である。

13号溝

遺構の概要（第73図）

調査区の中央よりやや東、X=37、Y=65グリッド付近に位置する。南北に延び、主軸をN-36°-Wにとる。溝は2段に掘られており、西側の高い部分は、深さ14cmほどでテラス状になっている。深い部分は確認面からの深さ、北側で40cm、南側で35cmで高低差もほとんど認められない。幅は北側で1.7m、中央付近で1.3m、南側で1.0mとなり、南に向かってその幅を減じているが、上段のテラス部分の幅が変化するだけで、底部幅は約40cm前後とそれほど変化をみせない。

出土遺物（第77図）

遺物は30点ほどが出土しているが、平安時代の土師器小破片が多くを占める。しかし、これらは遺構の年代を特定する資料とはなり得ない。5・6は平安時代の土師器杯である。

14号溝

遺構の概要（第74図）

調査区の中央付近、X=35、Y=62グリッドを中心として位置する。東には13号溝が平行しており、北側は風倒木痕によって搅乱を受けている。すぐ西側には、平安時代の堅穴住居群が位置している。溝は主軸をN-50°-Wにとり、13号溝より若干西へずれている。確認面からの深さは、北側、南側とともに50cmほどを割り、高低差もほとんど認められない。溝の断面は東西対称とはならず、西側が50°ほどの角度をもって立ち上がるのに対し、東側では15°ほどと緩やかに立ち上がっている。

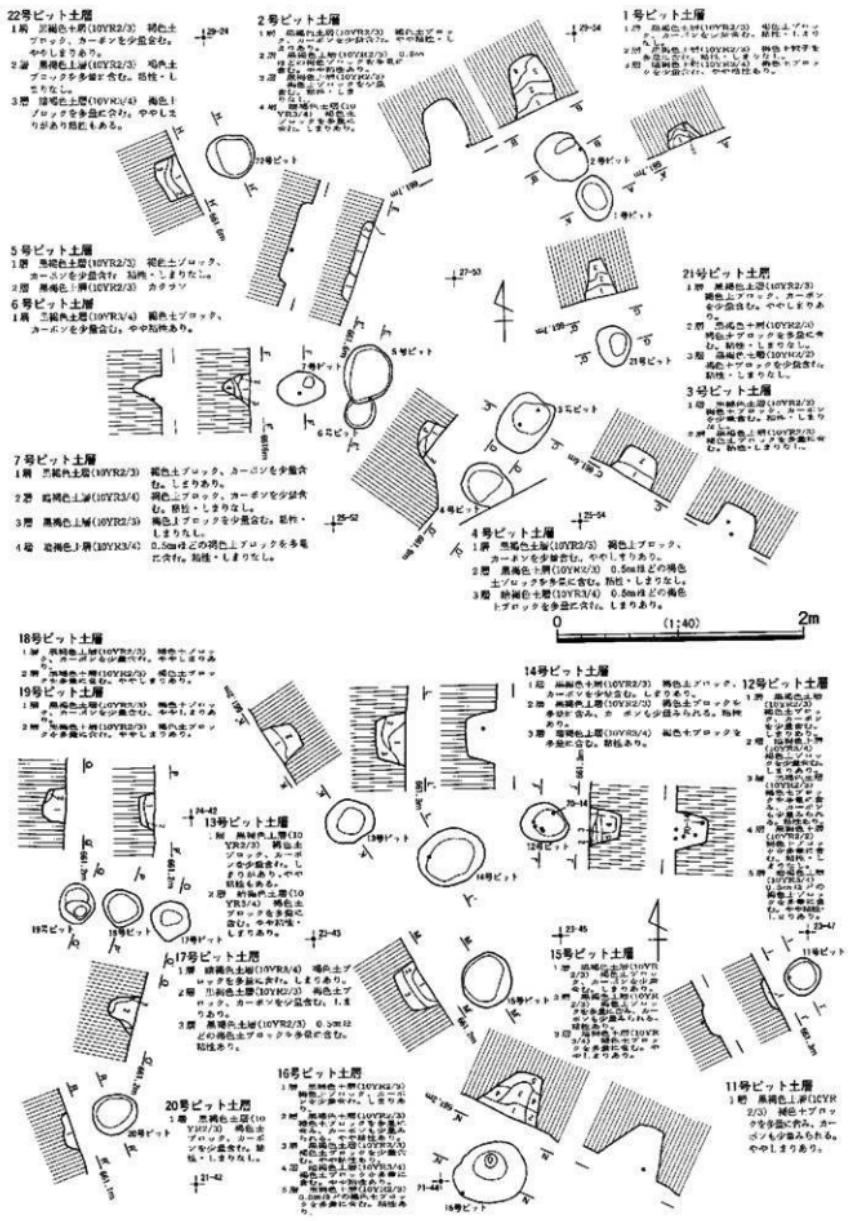
出土遺物

出土遺物は35点ほどが出土しているが、平安時代の土師器小破片が多くを占める。13号溝同様、遺構の年代を決定する資料には適まれていない。また、図化できるような資料も出土していない。

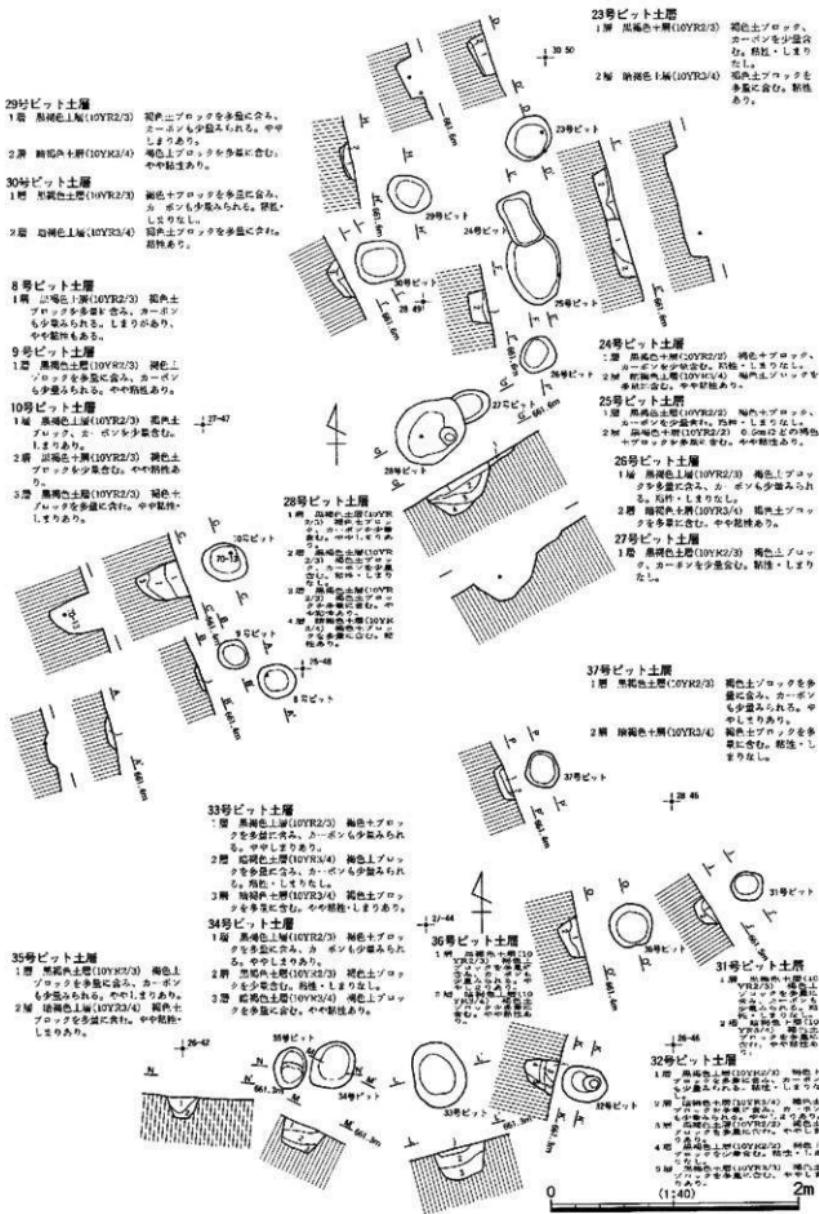
15号溝

遺構の概要（第75図）

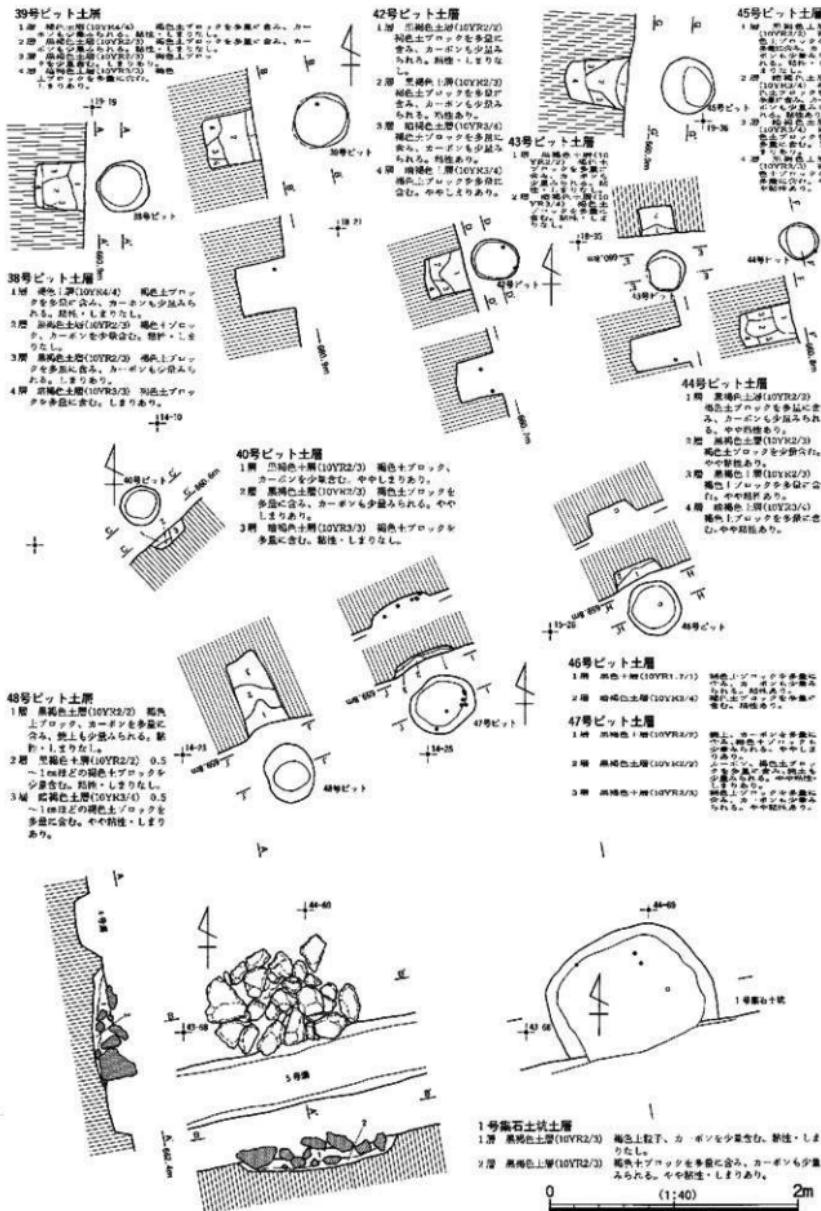
調査区のはば中央、X=30、Y=55グリッドを中心として位置する。北側では2条に分かれ、新旧関係を



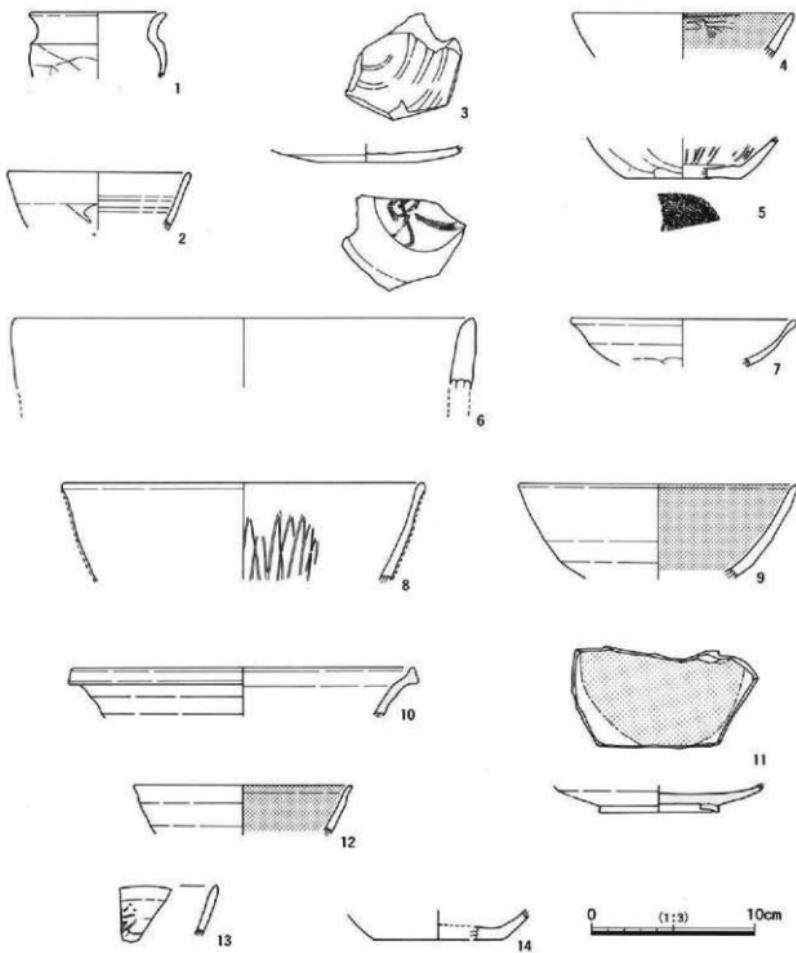
第67図 ピット平面図・断面図(1)



第68図 ピット平面図・断面図(2)



第69図 ピット・土坑平面図・断面図



第70図 土坑・ビット出土土器

持つ。本溝は1～4号住居と重複し、いずれの造構をも切っている。溝は土層観察により、東側の溝が西側の溝を切っており、新しいことがわかった。新15号溝は幅50～60cmを測り、確認面からの深さは15～20cmほどとなるが、北側ではその幅を減じ終息しかかっている。IH15号溝は、北側で幅45cmほど、確認面からの深さ15cmほどを測る。新15号溝は、1・4号住居を切って掘削されているが、重複部分においては溝底面を敞きしめている。地山土を掘削した部分で溝の載もあり調査を実施したが、このような作業は行われていなかつた。住居の覆土が柔らかいため行われたものであろうが、なぜこのような地囲めが必要であったのかは不明である。

出土遺物

本造構は平安時代の堅穴住居跡と重複しているため、平安時代の土師器を中心にも70点ほどが出土しているが、いずれも小破片であり図化できるような資料は出土していない。

16号溝

造構の概要（第76図）

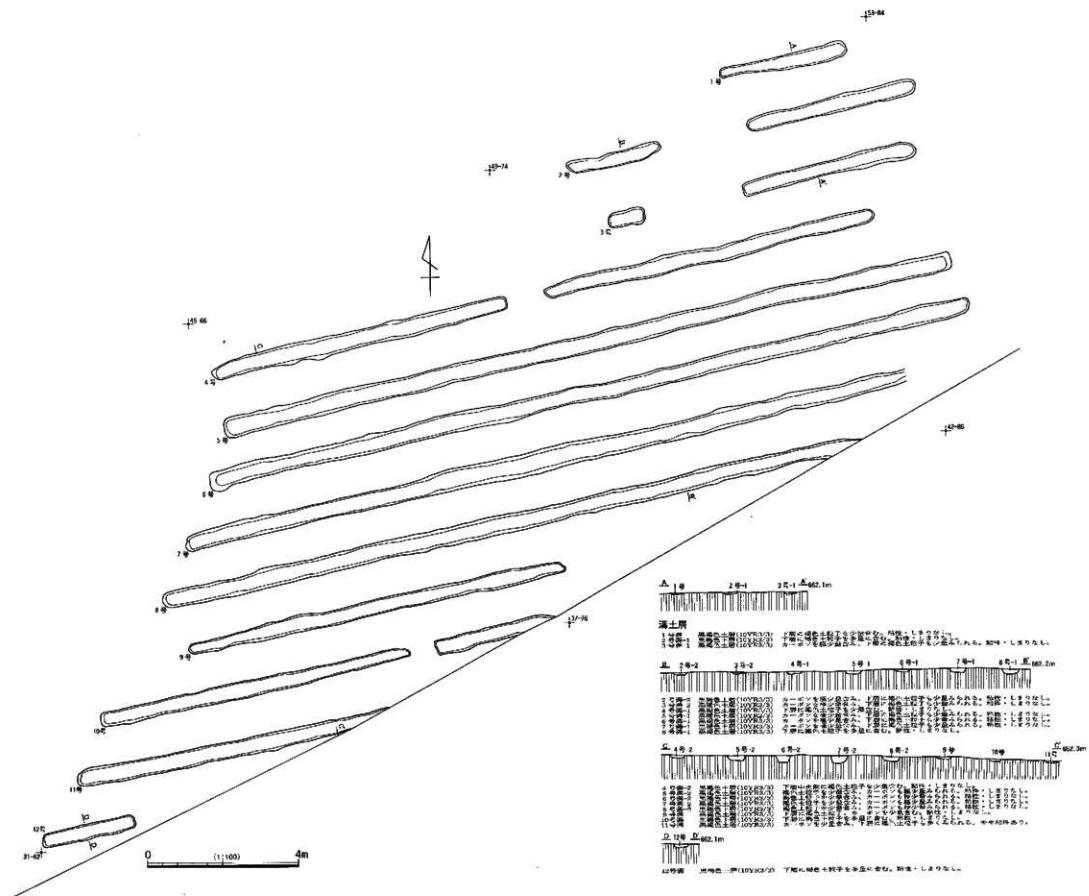
調査区の西側を北東から南東にかけて掘られており、南北方向とともに調査区外に延びている。西隅では6号住居のほぼ中央を通り、床面下まで掘削が及んでいる。土層断面観察から、溝は数回にわたって掘られたようである。溝中にはホップの棚の文線基部もみられ、中には丸太材に鋼線が巻き付けられたものもみられた。溝は、ちょうど畑の境に位置することから、畑の根切り溝であるものと推定された。戦後もホップを栽培していたということであり、最終的には昭和30年代頃に掘削されたものであると思われる。

出土遺物（第77・78図）

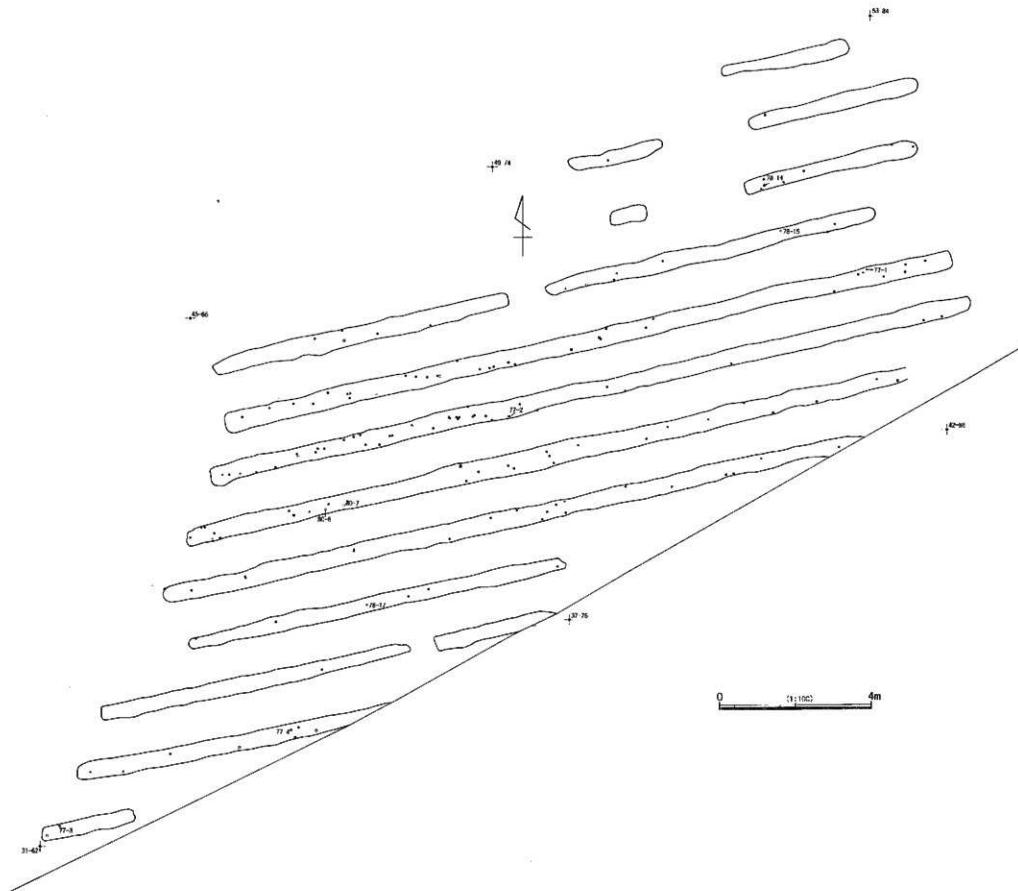
出土遺物はそれほど多くはないが、6号住居を削平している部分では土師器の破片が多くみられた。そのうちのいくつかは6号住居出土遺物と接合関係にある。また、接合関係ない十器類も多くは本来6号住居に属するものとみられる。第77図7・8は土師器壺、9・10は黒色土器壺である。11は土師器壺類、墨書きされているが文字は判読不明。第78図17は棒状鉄製品であるが、用途不明。

造構外出土遺物（第77～80図）

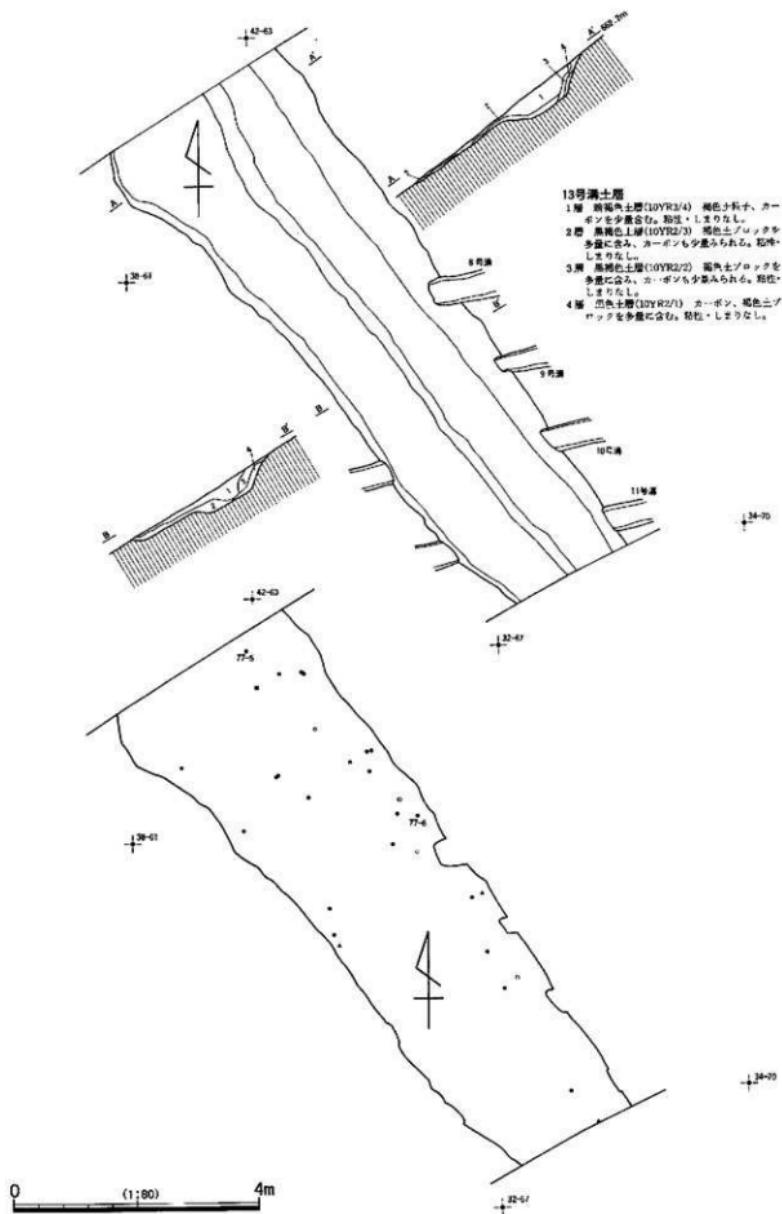
本遺跡において表土剥ぎの段階や精柵の際、造構に伴わない土器が約450点ほど出土・採集されている。調査区西側では、縄文時代中期の土器片が若干出土したが、多くは平安時代の土師器小破片である。第77図12～14は土師器壺であり、12・13には外面上に墨書きがみられる。いずれも判読不明。15は皿形土器。16・17は黒色土器の壺である。18は須恵器壺、19は須恵器壺の底部付近の資料である。第78図19は板状の鉄片であるが、用途不明。20は刀子の破片である可能性がある。第79図6～8は銅鏡で、6は聖宋元寶、7は元祐通寶、8は2/3ほどを欠損するため、祥符の文字しか残存しておらず、祥符元寶になるのか祥符通寶になるのかは不明である。第80図8・9は低石で、いずれも4面使用している。8は穿孔を途中で止めている。



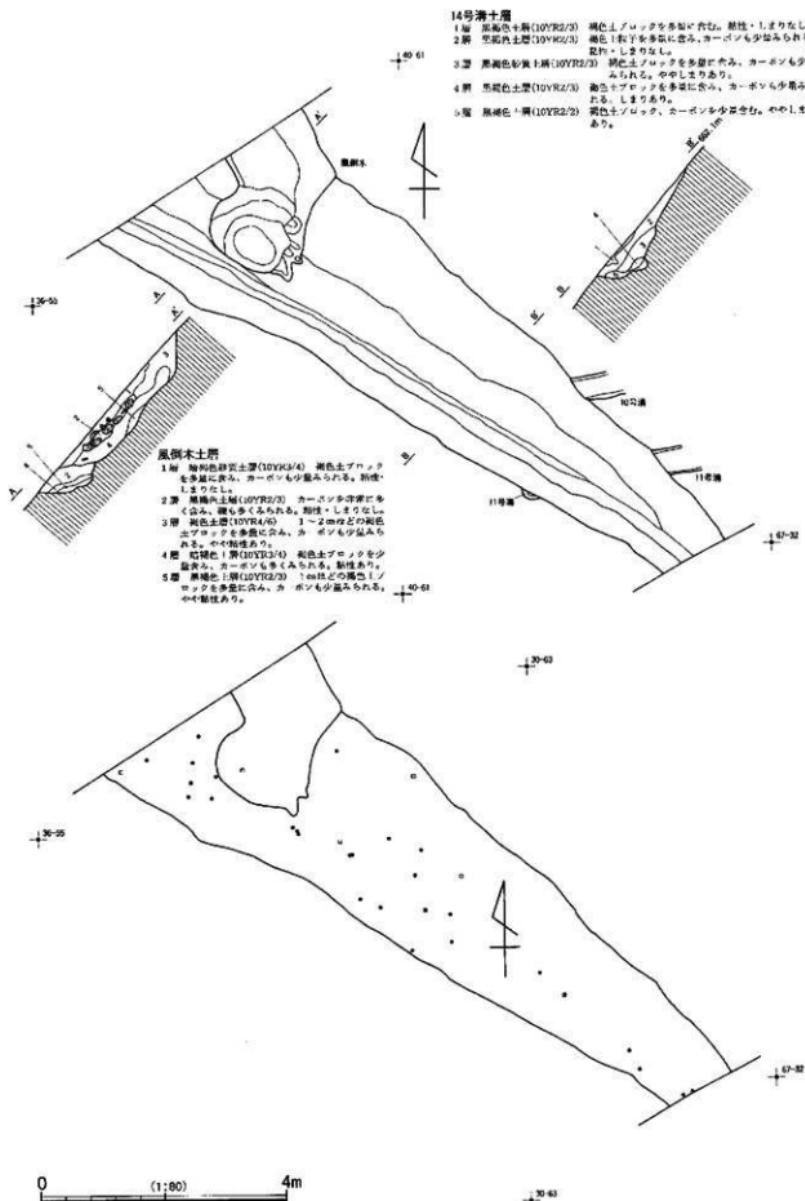
第71図 1~12号溝平面図



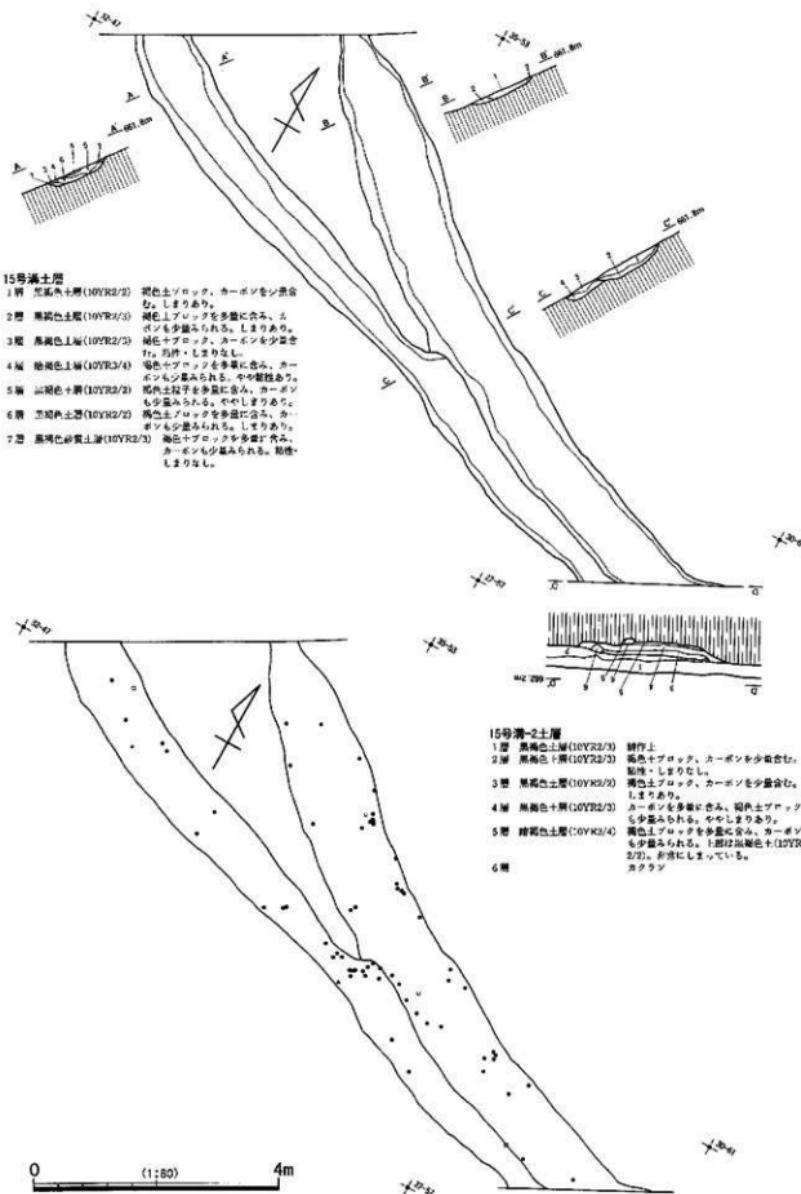
第72図 1~12号溝遺物分布図



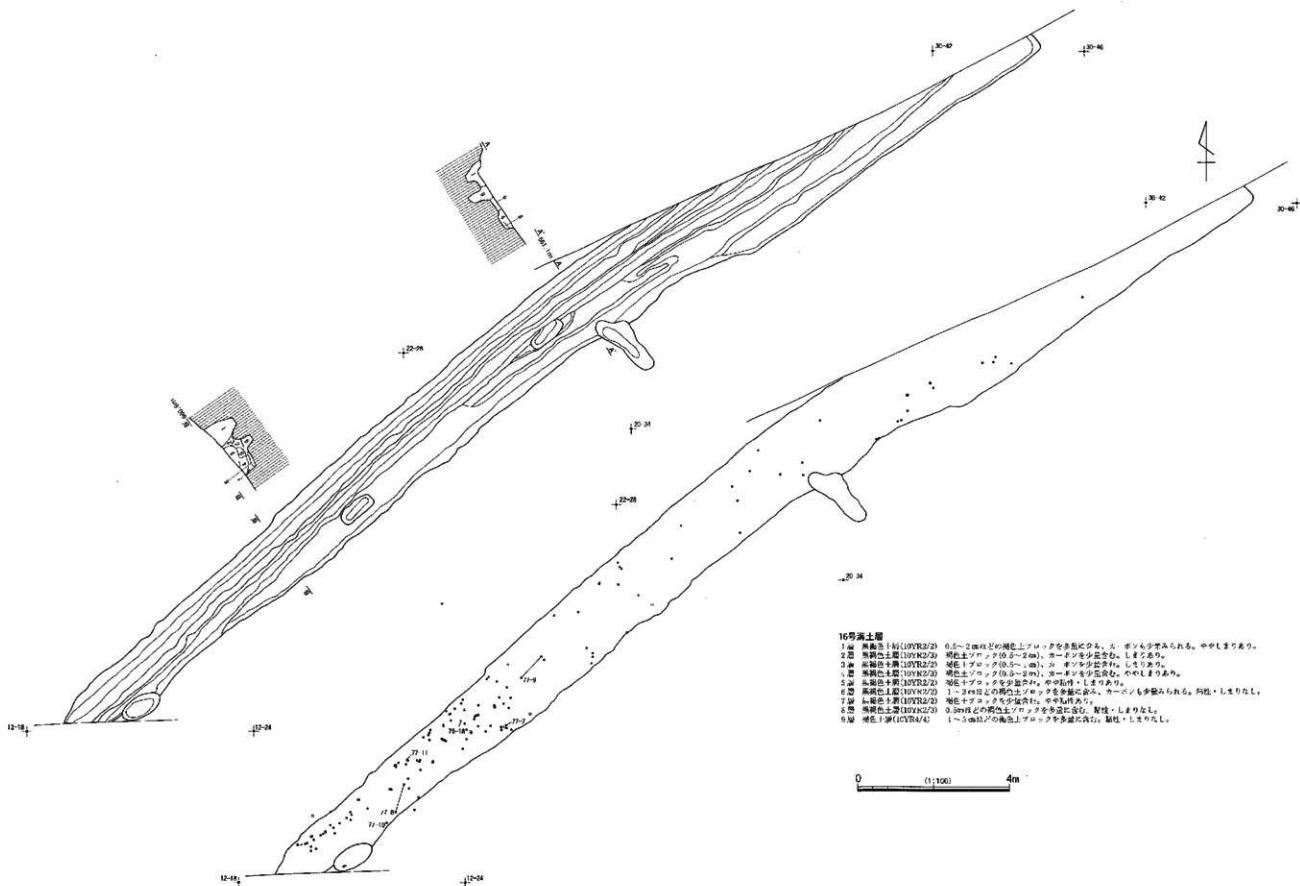
第73図 13号溝平面図・遺物分布図



第74図 14号溝平面図・遺物分布図



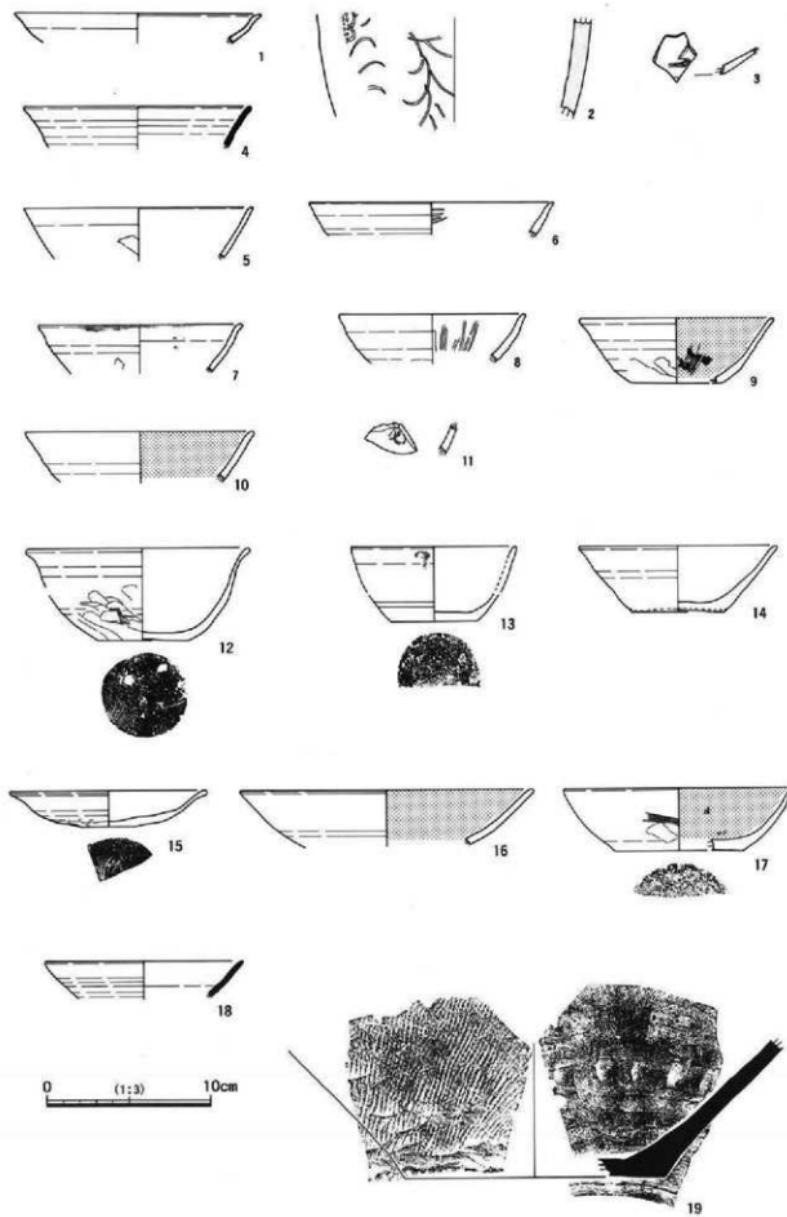
第75図 15号溝平面図・遺物分布図



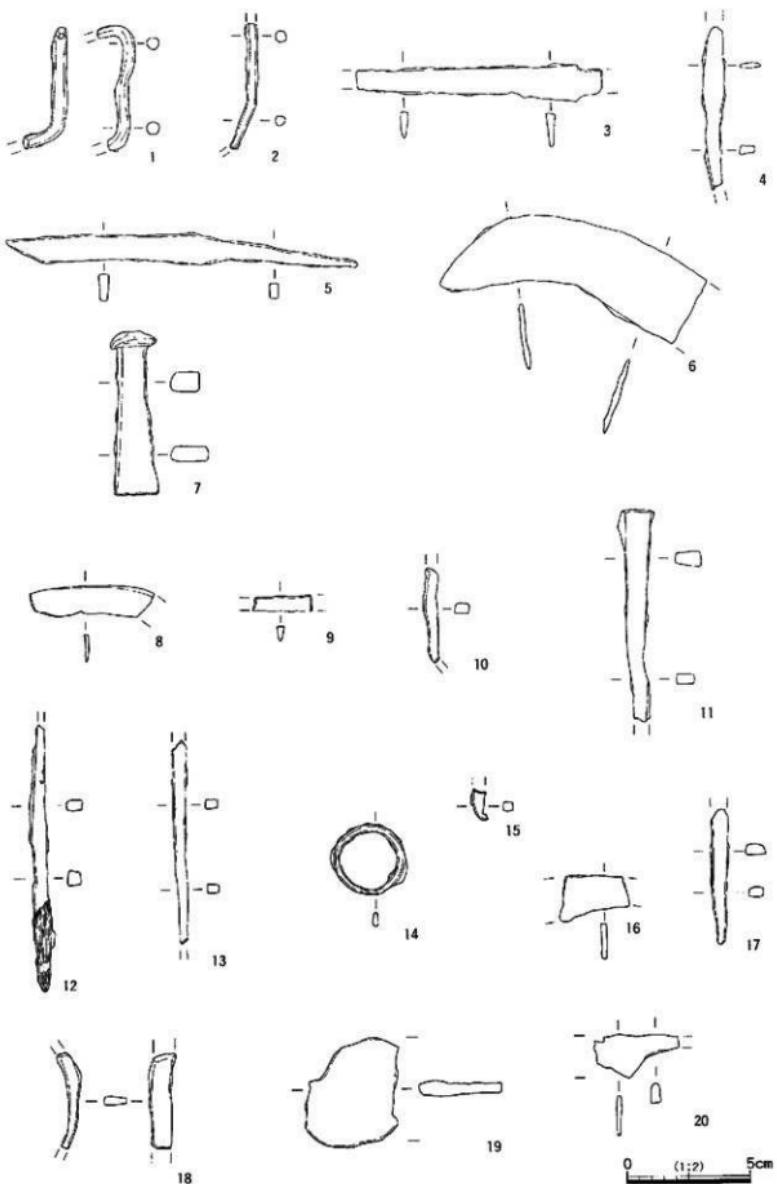
16号溝土層

1. 売糞場土層 (19YK2/2) 0.5~2m程度の褐色土ブロックを多量に含む。丸、ポンも少量みられる。ややしまりあり。
2. 赤褐色土層 (19YK2/2) 暗赤土ブロック (0.5~2m)、カーボンを少量含む。しまりあり。
3. 黄褐色土層 (19YK2/2) 黄褐色土ブロック (0.5~2m)、カーボンを少量含む。ややしまりあり。
4. 褐褐色土層 (19YK2/2) 暗褐色土ブロック (0.5~2m)、カーボンを少量含む。ややしまりあり。
5. 暗褐色土層 (19YK2/2) 暗褐色土ブロックを少量含む。ややしまりあり。
6. 黄褐色土層 (19YK2/2) 黄褐色土ブロックを少量含む。ややしまりあり。
7. 売糞場土層 (19YK2/2) 売糞場土ブロックを少量含む。ややしまりあり。
8. 黄褐色土層 (19YK2/2) 0.5mほどの褐色土ブロックを多量に含む。特徴、しまりなし。
9. 黄褐色土層 (19YK2/2) 1~3cmほどの褐色土ブロックを多量に含む。特徴、しまりなし。

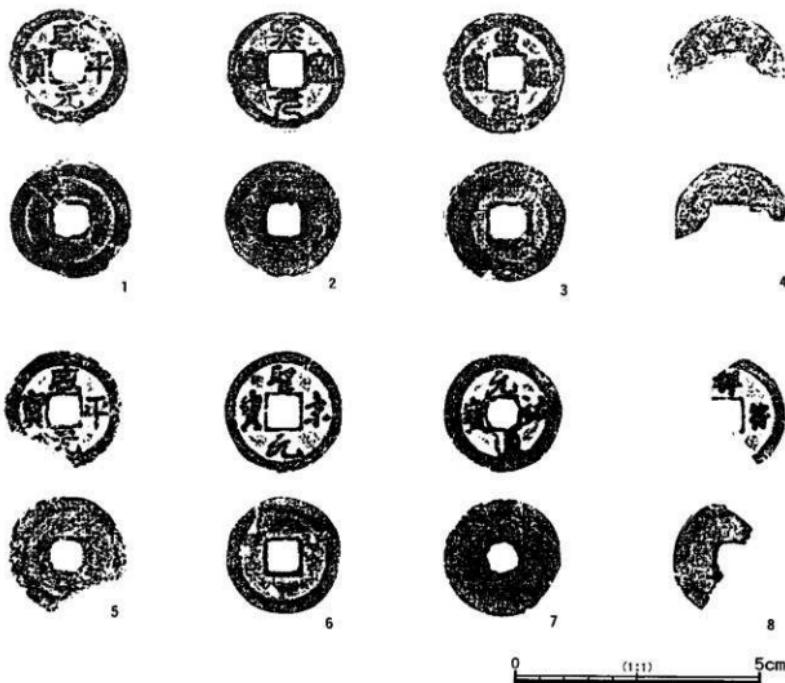
第76図 16号溝平面図・遺物分布図



第77図 满・遺構外出土土器



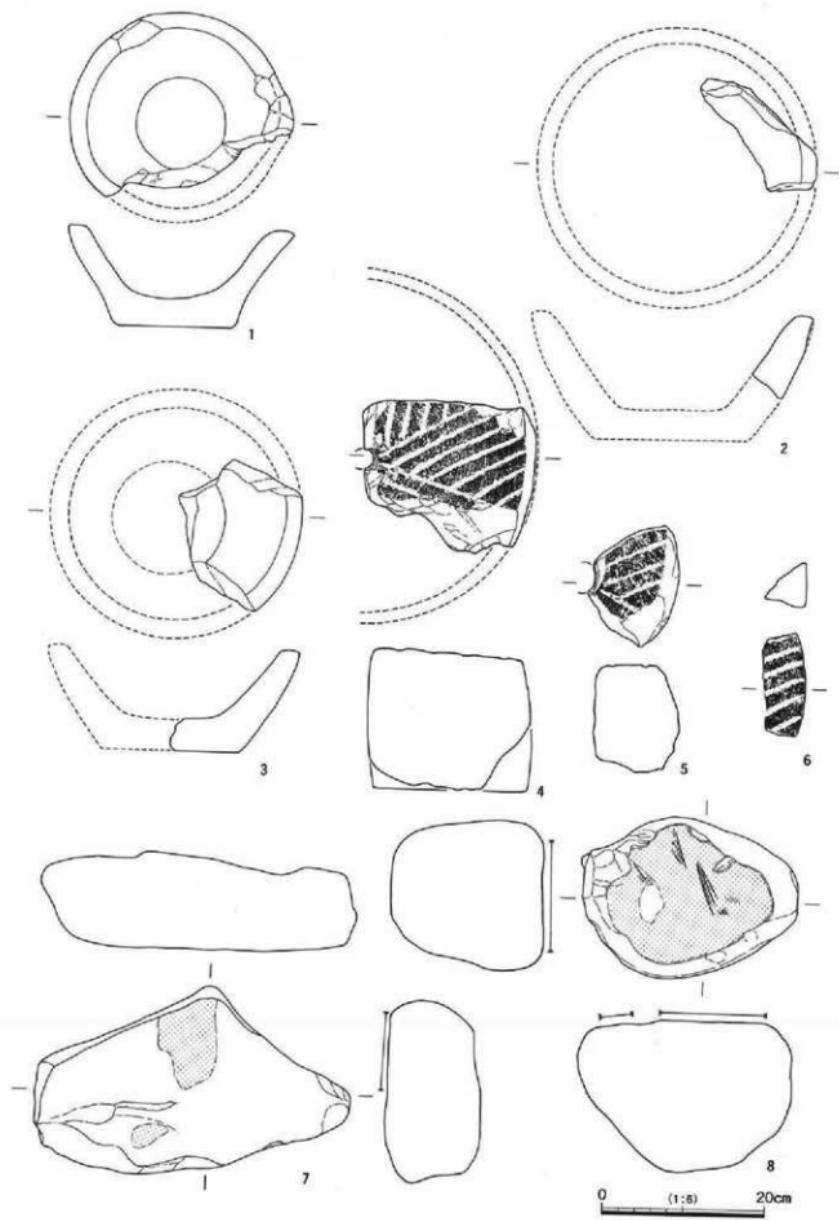
第78図 鉄製品実測図



第79図 錢貨拓影



第80図 土製品・石製品(1) 実測図



第81図 石製品(2) 実測図

第4章 調査の成果

第1節 平安時代の遺構・遺物について

1 遺構の時期

今回の調査によって、平安時代の竪穴住居7軒と小銀治遺構1棟が発見された。甲斐地域の編年でⅩ～Ⅺ期に比定されるものである（山梨県考古学協会 1992）。時期別にみると1・8号住居がⅩ期、3・6号住居・小銀治遺構がⅨ期、2・4・5号住居がⅪ期に属すると思われる。遺構の切り合い関係からも、先後関係に齟齬はみられない。出土上器を個体別にみた場合、8号住居出土高台付杯（第36図5）、6号住出土高台付杯（第34図10）が、ともに口縁部、底部を欠損し法量は不明であるが、体部が内凹する占和を呈しており、甲斐編年Ⅹ期まで遡る資料となるものかもしれない。

住居内からは灰釉陶器もわずかながら出土している。甲斐編年Ⅹ期に比定される3号住居・小銀治遺構出土灰釉陶器では、3号住居出土無頸壺蓋、小銀治遺構出土平瓶がK14段階に比定される。7号住居出土品の中には時期の下るものも併せており、一部混在しているものと思われる。小銀治遺構出土平瓶は、床に据えられたような状況で出土しており、使用されたままの状態であったと思われる。把手や口縁部が欠損しているが、長期にわたる使用によって欠損した状態のまま使用し続けられたものと考えられる。Ⅺ期に比定される4・5号住居から出土している灰釉陶器は、K90段階を主体としている。前段階の1号住居出土灰釉陶器瓦頭部と思われる口縁部破片は、K14段階の可能性もあるが、小破片のため明らかではない。

2 小銀治遺構

小銀治遺構は調査面積もわずかなため、鉄製品や木製品、鉄鋤が出土しているが、遺構南東隅に金床石が据えられていたほかは、鍛冶炉などの施設は確認できず、遺構としてどのような形態を呈するのかは不明である。甲府盆地においても、鍛冶遺構が多数発見されているが、そのほとんどは紺屋遺跡の立地する八ヶ岳山麓とそれに隣接する釜無川流域のみにみられるようである（保坂 1992）。時期的には甲斐編年Ⅶ・Ⅷ期頃から出現するようであり、山麓に集落が出現すると同時に鍛冶遺構もみられるようになる。本遺跡の場合、集落の出現同様その時期よりやや遅れて出現している。八ヶ岳山麓に点在する鍛冶遺構は、広大な八ヶ岳山麓地域の開拓にとって必要不可欠な存在として、その一翼を担っていたものであろう。

本遺跡の小銀治遺構からは、刀子の未製品が出土しており注目される。鍛冶遺構から木製品が出土した例としては、大泉村東姥神B遺跡例がある（柳原 1985）。東姥神B遺跡SB01からは、厚さ1cmほどの長方形を呈した鉄素材と断面方形で棒状を呈した木製品が出土している。棒状の木製品からどのような製品を創り出そうとしたのかまったく不明である。本遺跡の刀子未製品は、刃部が断面方形となっており、木製品であることは明らかである。鉛や莖部などは作り出されており、すでに刀子の形態を呈している。東姥神B遺跡例は、棒状の素材から鍛造によって製品を作り出そうとしているが、本遺跡例の場合、おそらく板状の鉄素材から刀子の形態に切り取った後、刃部を鍛造・研磨することによって製品化しようとしているものと推定される。遺構内からは頭の潰れた蟹が出土しており、鉄の切断に用いたものと思われる。

第2節 中世の遺構について

1 方形竪穴状遺構の諸例

今回の発掘調査によって、中世の建物跡7棟と共生すると考えられる溝3条が発見された。紺屋遺跡から発見された建物跡とそのあり方について観察してみたい。

まず、中世の建物跡については、東日本地域を中心としながらも全国的に発見例があるが、方形のプラン

で深く掘り込んだ施設であることから、堅穴建物、堅穴住居、方形堅穴造築址、方形堅穴状遺構などと呼ばれているものである。しかし、用途が多岐にわたると考えられ、一部の例を除いてそれぞれの遺構についてこれを限定できない原状にあっては、さまざまな名称が用いられるることは致し方ないことともいえる。ここでは、名称の問題については立ち入ることを避け、本報告書の事実記載の中で用いた「方形堅穴状遺構」の名称を統一して用いるため、参考・引用文献の中で用いられた名称とは異なる部分がある。

中世における方形堅穴状遺構が定義されたのは、青森県浪岡城跡の発掘調査報告書においてであった。この中で工藤氏は、方形基調、柱穴などの存在、中世を存続時期とする、炉や竈をもたない、出入口施設として張り出し部をもつなどの点を挙げた（工藤 1983）。しかし、近年の発掘調査例の増加に伴って、方形堅穴状遺構に地域的差違や地域内においても特色がみられるなど、さまざまなパターンが存在することが明らかとなつており、先の定義には必ずしも当てはまらないものも数多くみられる。

ここでは、さまざまな形態が存在する方形堅穴状遺構について、東日本の例を概観する。

東北地方では、城館跡を中心として多くの方形堅穴状遺構の発見例が知られている。おおよそ先の工藤氏が定義した形態をとるが、福島県古館遺跡例では、30棟中19棟が火廻をもつなど普遍性が高いようである（古川ほか 1991・1992）。また、13世紀後半に掘立柱建物から方形堅穴状遺構へ切り替わったことも判明している。さらに、底面中央に柱穴をもつ例からそれをもたない例へと変遷が追えることも明らかとなつた。東北南部の方形堅穴状遺構を考察した飯村氏は、これらの例から、張り出しをもつた出入口施設をもち、堅穴中央に2本の柱穴と壁際に柱穴を配する方形堅穴状遺構から、壁際のみに柱穴をもつ一群、さらには14世紀の後半以降無柱穴の一群へと変遷するとしている。さらにはその過程で人口部施設も消失することを明らかにしている（飯村 1994）。

栃木県下古館遺跡からは、多くの方形堅穴状遺構が発見されている（田代ほか 1995）。平面形は方形を基調とし、正方形、長方形などが多くを占める。堅穴内には柱穴をもつが、その配置はバラエティーに富んでいる。床面は、一部の堅穴において張り床が認められたが、硬化した状況はみられない。火廻は18基から検出されているが、ほとんどが堅穴内のコーナーに設けられている。入口部は地山の一部を掘り残して、壁面の中央ないしは堅穴に向かって左側に構築される例があるようである。形態的には、確認面のレベルとフラットになるもの、スロープ状になるもの、階段状のものがみられる。同じく金山遺跡でも平面プランは方形基調とするが、正方形に近く、対辺壁際の中央にそれぞれ1本ずつの柱穴をもつものと、長方形で長軸方向壁際ないし内側に入った部分に一对の柱穴をもつタイプがみられる。上部は柱穴からすると切り妻となるようである。また、堅穴内には灰や焼土が認められる。地山を掘り残した入口部施設も堅穴中央やコーナーから見つかっている（津野ほか 1997）。

長野県でも全般的に多くの方形堅穴状遺構が発見されている。佐久市大井城跡では、15・6世紀に属する53棟の方形堅穴状遺構が調査されている（小山ほか 1986、小山 1987）。長方形のプランを呈するものが全体の6割ほどを占める。柱穴は普遍的にみられるようであり、壁直下の四隅を基本として設けられている。また、1/3ほどが出入口施設として張り出し部を有する。唯一、26号堅穴の張り出し部直下は埋め戻しにより土間状に盛り上がっており、入口部に伴うステップ状の施設と考えられる。火廻は2棟に認められ、例外的な存在となっている。佐久市金井城跡でも551棟の方形堅穴状遺構が調査されている（小山ほか 1991）。一辺1mほどの小形のものまで、堅穴建物として調査されているために、柱穴をもつものは52棟と少数である。大形の堅穴に限ってみた場合、實際に柱穴列が巡る例が多くみられる。大井城跡の例と同様に、出入口施設としての張り出し部をもつ例が散見される。柱穴は多くが、堅穴中央に向かって内傾した構造であり、壁面に礫を当てた泥瓦屋根の建物であったことが想定されている。中央自動車道建設に伴う松本市内の発掘調査でも、多くの方形堅穴状遺構が調査されている（野村ほか 1990）。時期の下降とともに堅穴の規模が縮小傾向にあることが指摘されており、大形のものに柱穴が設けられる例が多いようである。しかし、それも客体的でしかなく、無柱穴の堅穴がほとんどを占める。火廻や床面の焼上も1階程度の堅穴でしか確認されていない。また、大井城跡で確認された出入口施設の張り出し部はほとんどみられない。

鎌倉周辺では、海浜地域や町壁地域に数多く発見され、中世鎌倉においては普遍的な建物跡のようである（藤木 1989、宗基 1999）。平面は方形ないし長方形を呈し、土台に柱を取り付ける例が多くを占め、柱

穴を配するものは少数のようである。床に火廻をもつ例は少なく、入口部が張り出す例もわずかにみられるだけである（斎木 1989、宗基 1999、佐藤 1999）。

山梨県内においても、県域の北西部にあたる北巨摩郡地域を中心として方形堅穴状遺構の調査例が多くみられる（小宮山 1999）。長坂町小和田遺跡D地区からは、31棟以上の方形堅穴状遺構が発見されている。堅穴内の床には張り床や純化が認められた。また、壁際を主体として柱穴列が認められ、炭化物の積重もみられる。これらの痕跡は、大形の方形堅穴状遺構に付随する傾向が強く、小形のものにはほとんど認められない（小宮山 1999）。明野村寺前遺跡では、戦国期と考えられる10棟ほどの方形堅穴状遺構が発見されている（秋山 2000）。堅穴内において柱穴は明瞭に確認されてはいないが、入口部施設として、堅穴内的一部を埋め戻し、扁平な大形の砾を3段ほど据え付け階段状施設としている。このような施設は他に類例がみられず、本遺跡の方形堅穴状遺構を特徴づけている。その他の遺跡での方形堅穴状遺構は、柱穴や火廻をもたず、方形に掘り窪めただけの遺構が多くを占める。

紺屋遺跡の方形堅穴状遺構は、柱穴を壁際に配し、掘り込みをもった火廻や焼上・炭化物がみられるものが7棟中4棟を占める。火廻の確認されていない4・6・7号方形堅穴状遺構のうち、4・7号堅穴は規模も小さく火廻をもっていない可能性も高いが、6号堅穴は、堅穴中央部が調査区外に位置していることから、火廻をもっていたものと考えられる。これからすれば、壁際に規則的に並ぶ柱穴や火廻をもつものは、大形の方形堅穴状遺構にみられる傾向があることが指摘できる。このことは、小和田遺跡例と共通するものであり、先にみた、東北地方の例を検討した飯村氏の指摘とも通じるものがある。地山掘り残しの入口部施設をもつ例は、山梨県内ではほとんど類例がなく、長坂町小屋敷遺跡（小宮山 1997）、龍舟遺跡（未報告）にその可能性をもつ堅穴が調査されているが、いずれも詳細は不明である。寺前遺跡例は、地山を掘り残してはいないが、堅穴内部に人に部施設を設ける点については紺屋遺跡例と類似しているといえる。先にみたように北巨摩郡地域に隣接する東信地域の大井城跡や小山城跡では、出入り施設は東北地域の例にみられるような張り出しをもつものであり、堅穴内に設けられるものはみられない。紺屋遺跡のような例は、北関東地域にみられるものと類似する。

2 方形堅穴状遺構の性格

方形堅穴状遺構の機能については、居住施設のみならず、作業小屋、倉庫、緊張時における緊急避難小屋（中井 1994）など、さまざまな機能が考えられている。

実際、東北地域では漆を精製するために使用する漉殼が出土したり、鉄鋼用の遺物が出土するなど、一部の方形堅穴状遺構が明らかに工房ないし作業場として使用されていたことがわかっている（高橋信雄 1989）。

中世の方形堅穴状遺構が、古代の堅穴住居に系譜をもって構築されたかどうかについても、この遺構の性格や機能を考える上で重要な意味を持つものと考える。長野県の中世村落を集成・考察した鶴岡氏は、中世の方形堅穴状遺構は古代から継続して營まれたものであり、13・14世紀には上部に存在し、15世紀には掘立住建物の増加に伴って主屋の座をとて代わられる遺跡があることを指摘している（鶴岡 1986）。

東北南部の方形堅穴状遺構を集成した高橋與右衛門氏は、方形堅穴状遺構が「奈良・平安時代から続いた堅穴住居と同じ系譜に入る建築跡」であると指摘する（高橋與右衛門 1992）。床面に勾を設置するかしないかが、住居か倉庫かを決める重要な施設であるとし、勾は時代が下ると設置率が低下する傾向にあることを指摘している。このことは、方形堅穴状遺構が当初住む家であったものから、次第に倉庫や工房などの住居以外の機能へ変化したことを見定しながらも、人が住む「家」、倉庫的な「小屋」、「工房」などさまざまな用途に用いられたことを指摘している。また、方形堅穴状遺構だけで構成される遺跡と掘立住建物と併存する場合ではその性格や機能に違いがあることを考慮する必要があるとも指摘する。

一方、飯村氏は、陸奥南部地域では11世紀には堅穴住居は消滅しているので、中世の方形堅穴状遺構とは系統的には繋がらないとしながら、一時の住居や貯蔵を目的として構築されたことを想定している。また、方形堅穴状遺構が道や川などの「無縫」・「無主」の地に立地し、墓域や宗教施設も隣接することを指摘し、このような遺跡を「宿」「市」「津」ではないかとしている。

鎌倉周辺で多数発見されている、方形堅穴状遺構を検討した宗基氏は、方形堅穴状遺構の分類を行い、その

機能について検討を行っている（宗基 1999）。柱穴建ての小規模なものは住居の可能性があるが、切石を用いた堅牢な構造をもつものは倉庫として機能していたことを想定している。

このようにみてくると、方形堅穴状遺構と呼ばれるものが、さまざまな機能や性格をもっていたことがわかる。先にみた、東北地方の例のように牛廻に伴う明瞭な伴出遺物がある場合を除いて、それぞれの堅穴にその機能を特定することは困難である。また、方形堅穴状遺構がバザエティ・に富んでいることもわかる。しかし、方形堅穴状遺構を概観するなかで、例外はあるものの、堅穴内で使用されたと思われる遺物がほとんどみられないこと、人為的に埋め戻しを行っていることが共通点として指摘できる。方形堅穴状遺構の機能・性格を考える上で、埋め戻すという行為が重要な意味を持つと考えるが、どのような意図で行われたのかは明らかではない。

3 純屋遺跡の遺構配置と構造

7棟の方形堅穴状遺構からは、堅穴内で使用されたような遺物は出土していないが、堅穴の施業にあたって記入した方形堅穴状遺構の使用時期に近いと思われる遺物がわずかではあるが出土している。出土した陶器類は古瀬戸・常滑を産地としているものである。古瀬戸製品はほとんどが後Ⅰ期に比定されるものである（藤澤 1996）。2号方形堅穴状遺構出土の碗形鉢が後Ⅱ期まで下る可能性はあるが、おおよそ14世紀後半の資料とすることができる。一方常滑製品は愛・広川窯とも口縁部の形態から中野編年の9期に比定されるものであり、15世紀前半の所産であるとされる（中野 1994）。このことから本遺跡の方形堅穴状遺構群は、14世紀末から15世紀代にかけて構築されたものと考えられる。なお、4・6・7号方形堅穴状遺構からは時期を特定するような遺物の出土はないが、6号方形堅穴状遺構は1号方形堅穴状遺構に切られしており、その時期をおおよそ推定することはできる。また、周辺からも16世紀代と思われるような遺物が出土していないことから、4・7号方形堅穴状遺構も遅くとも15世紀後半に構築されたものと考えられる。

第1章第5節の遺跡概要の項でも触れたが、本調査区において中世の建物跡である方形堅穴状遺構は、調査区中央よりやや東側の微高地東端にまとまって構築されていた。前年度の町教育委員会による第1次調査では、現在の県道脇から中世と推定される側溝を作った道路状遺構が検出されている。遺構の一部は現在の県道下にあり、県道沿い上に構築されているものと考えられ、主軸をN-32°Wにとる。また、本調査区の位置する地点は、南北に細長い尾根上にあり、尾根のほぼ中央には13~15号の3条の溝が南北に掘られている。それぞれの溝は平行して掘られているため、新旧関係は不明であるが、平安時代の堅穴住居を切っていることから中世の溝であることが推定された。そのうち東側に位置する13号溝は、主軸をN-36°Wとほぼ道路状遺構と平行に掘られており、13号溝が道路状遺構を意識して掘られたことが窺える。方形堅穴状遺構は、この道路状遺構と溝に囲まれた地点に立地する。調査面積が限られていることもあり推定の域ではないが、本遺跡の溝跡は道路状遺構に対し、約70mの間隔をもってコの字状に配され、中世の建物群を取り囲んでいたものと考えられる。この区画の外側にあたる溝西側では、中世の建物群はまったく検出されていない。また、道路状遺構に近い地点では、道路から35m前後の幅をもって建物群などの遺構がまったくみられない無遺構地帯となっている。このような例は、遺跡の規模が大きく異なるが栃木県下古館遺跡でも同様なあり方を示している。ただし、龍角西遺跡として調査した道路状遺構東側は、東へ向かう谷地形となっており、方形堅穴状遺構が2棟ほど検出されているほか、区画溝などは発見されていない。

本遺跡の方形堅穴状遺構内からは古瀬戸・常滑をはじめとする陶器類が出土している。これらは直接方形堅穴状遺構内で使用されたものではないが、区画内のいずれかの遺構に伴うものであり、これらのなかには梅瓶や祖母澳の茶壺、天目茶碗などの一般的な集落遺跡ではみられないような遺物も出土しており、方形堅穴状遺構のみで構成された遺跡であるとは考えがたい。方形堅穴状遺構以外に掘立柱建物跡などの遺構群が調査区外に展開しているものと思われる。おそらく本遺跡は、溝に囲まれた屋敷跡になるのではないかと考える。また、溝から西へ90mほどの南北に長い尾根縁辺部からは、五輪塔の集積地点2カ所のほか、中世の墓と考えられる土坑9基、火葬施設ないし火葬墓2基などが発見されており、屢敷地からやや離れた所に墓地を造っていたことがわかる。

以上のように、本遺跡の遺構配置は、道路状遺構を基点としてコの字状に巡る溝のなかに建物群が配置さ

れ、羨敷跡の外側に墓地が設けられるという、計画的な遺構配置がなされていたことが理解される。さらに方形堅穴状遺構付近に掘立柱建物の痕跡がまったくみられないことから、区画内においても計画的に遺構の配置が行われていたものと考えられる。

方形堅穴状遺構が掘立柱建物に対し、社会的に從属的な位置にあったとする考え方があるが、本遺跡の状況もそのような状況を示す可能性もある。しかし、掘立柱建物と伴出する方形堅穴状遺構群が、非日常的もしくは非常常的な施設だとするならば、上記のような考え方はできないことも指摘しておきたい。

方形堅穴状遺構が廃棄されるにあたって、人為的に埋め戻されたと考えられる例が多いことは先にも触れたが、本遺跡でも7棟中6棟が埋め戻しを行っている。埋め戻された土のなかには地山上のロームブロックが多量に混入していた。地山上がブロック状になっており、覆土下層からもみられたことから、埋め戻しにあたって遺構周辺の堆積土を埋め戻しに使用したのではなく、方形堅穴状遺構を掘り上げた土を埋め戻しているものと考えられる。このことは、方形堅穴状遺構を掘り上げた土を遺構周辺に川のように積んでおいたと考えるのは合理的ではなく、周提帯のように周辺に盛り上げていたか、土葺屋根状にしていた可能性がある。方形堅穴状遺構で土をかぶせた陸屋根構造をもつ例は、長野県遊光遺跡において検出されている（気賀沢ほか 1990）。また、島原の乱廻屏風にも土屋根構造の方形堅穴状遺構が描かれている（中井 1994）。

検出された方形堅穴状遺構の壁は、垂直に立ち上がっており崩落したような状況はみられなかった。方形堅穴状遺構の使用期間は短期間で埋め戻されたという指摘もあるが、遺存状況が良好なことから壁板を張っていたものと考えられる。この壁板は、隙間に立てられた柱によって支えられていたものと考えられるが、6号方形堅穴状遺構や3号方形堅穴状遺構の初期の柱穴のように、壁から内側に柱穴が配置されている場合については、どのように壁板を支えていたのかは不明である。

床の構造については、鎌倉周辺などの調査でその構造を知ることができる（齋木 1989）。根太材に釘を用いて板材を貼っている良好な事例が紹介されており（齋木 1999）、方形堅穴状遺構の床構造を知ることができるが、本遺跡の方形堅穴状遺構がこのような床板を使用したのかどうかは不明である。本遺跡の場合、床の硬化が認められるものが多く、とくに出入口施設付近の硬化は顯著であったことから、土間であったか、根太等を用いず板材を敷いたような簡素な構造であった可能性が高い。

引用・参考文献

- 秋山生子 2000 「寺前遺跡」『山梨考古』第75号 山梨県考古学協会
- 大川柏・竹下次作・井出佐重 1941 「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」『史前学雑誌』13 史前学会
- 櫛原功一 1985 『東幡神B遺跡』 大泉町教育委員会
- 工藤清泰 1983 『浪岡城跡』 浪岡町教育委員会
- 気賀沢進ほか 1990 『反目・逆光・駿河・小林遺跡』 発掘調査報告第29集 上伊那地方事務所・駿河市教育委員会
- 小宮山隆 1996 『北村遺跡』 長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 長坂町教育委員会・坂北土地改良事務所
- 小宮山隆 1997 『小屋敷遺跡』 長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集 長坂町教育委員会・坂北土地改良事務所
- 小宮山隆 1999 『北口摩の中世窓穴造構』『山梨考古学論集N』 山梨県考古学協会
- 小山岳夫 1987 『大井城跡の窓穴状造構』『長野県考古学会誌』54 長野県考古学会
- 小山岳夫ほか 1986 『大井城跡』 佐久市教育委員会
- 小山岳夫ほか 1991 『今井城跡』 佐久市教育委員会
- 齊木秀雄 1989 「方形窓穴建築式の構造」『よみがえる中世』3 武士の都 鎌倉 平凡社
- 齊木秀雄 1999 「鎌倉の町屋 一方形窓穴建築式と板壁獨立柱建物一」『帝京大学山梨文化財研究所報』第37号 帝京大学山梨文化財研究所
- 佐藤仁彦 1999 「鎌倉の方形窓穴建物」『帝京大学山梨文化財研究所研究所報』第37号 帝京大学山梨文化財研究所
- 宗堯秀明 1999 「方形窓穴建物の機能と変遷 - 中世東国の中地下式建物 - 」『考古学研究』第46巻第3号 考古学研究会
- 鈴柄俊夫 1986 「長野県の中世村落について」『長野県考古学会誌』50号 長野県考古学会
- 高橋信雄 1989 「職園期の工人集落 一「窓穴状建物群」一」『よみがえる中世』4 北の中世 津軽・北海道 平凡社
- 高橋與右衛門 1992 「発掘された中世の建物」『北の中世』 日本エディタースクール出版部
- 田代 隆ほか 1995 『下古越遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第166集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 津野 仁ほか 1997 『金山遺跡V』 栃木県埋蔵文化財調査報告第187集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 中井 均 1994 「「民衆」と「城館研究試論」 一特に考古学的資料を中心に一」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第5集 帝京大学山梨文化財研究所
- 中野晴久 1991 「赤羽・中野「牛丼地における編年について」」『中世當滑焼をめぐる』資料集 日本福祉大学知多平島総合研究所
- 水井久美男編 1994 「中世の出土銭 出土銭の調査と分類一」 兵庫埋蔵銭調査会
- 野代幸和 1997 『御谷場遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第135集 山梨県教育委員会
- 野村一寿ほか 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 一松本市内その1一 総論編』 長野県教育委員会ほか
- 藤澤良祐 1996 「瀬戸」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界 ~その生産と流通~』 瀬戸市教育委員会・(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 保坂康夫 1992 「山梨県下の平安時代殿舎遺構の様相」『山梨県考古学協会誌』第5号 山梨県考古学協会
- 村松生幸 1998 「龍角西遺跡」「八ヶ岳考古」(平成9年度年報) 北巨摩市町村文化財担当者会
- 村松佳季 1999 a 「龍角西遺跡」「八ヶ岳考古」(平成10年度年報) 北巨摩市町村文化財担当者会
- 村松佳季 1999 b 「御坂遺跡」「八ヶ岳考古」(平成10年度年報) 北巨摩市町村文化財担当者会
- 八巻与志夫ほか 1986 『山梨県の中世城跡 一分布調査報告書一』 山梨県教育委員会
- 山梨県考古学協会 1992 『甲斐型土器 一その編年と年代一』 甲斐型土器研究グループ第1回研究集会資料

第2表 出土遺物観察表(土器)

1. 遺物（く）は遺迹に埋蔵である。

2. 直径は、最も太いものより、縦横直徑のうちのものをす。また、これらが軽微な差異に有するものである。

3. 小括記の（）内は、その器形・大きさ・断面等を簡介しない。

4. 肉厚の（）は壁の厚さを示す。

件号	名	遺物名	系	上	記	附	標	出處(cm)	形	形	外		内		底		外		内	
											高	幅	長	幅	長	幅	長	幅	長	幅
12 1 1 1号房 11	土器	小口	火	(16.0)	—	—	ヲヨナガリ、火文	シラマガリ、火文	シラマガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 2 1 1号房 60	土器	耳	火	(11.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 3 1 1号房 178	土器	耳	火	(11.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 4 1 1号房 75	土器	耳	火	(12.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 5 1 1号房 2 瓶	二輪器	火	(12.0)	—	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 6 1 1号房 47	土器	耳	火	(5.0)	—	—	ナガラ、火文	ナガラ、火文	ナガラ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 7 1 1号房 76,77,90	土器	耳	火	(4.8)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 8 1 1号房 107 155,161,175,179,185	土器	耳	火	(12.0)	6.0	5.65	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 9 1 1号房 64	土器	耳	火	(12.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 10 1 1号房 146	土器	耳	火	(9.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 11 1 1号房 171,18,32,115	土器	耳	火	(16.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 12 1 1号房 45	土器	耳	火	(11.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 13 1 1号房 181	土器	耳	火	(11.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 14 1 1号房 135,157,165,175,179,185	土器	耳	火	(6.0)	—	—	ナガラ、火文	ナガラ、火文	ナガラ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 15 1 1号房 181	土器	耳	火	(12.0)	6.0	5.65	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 16 1 1号房 125,131,140,146,152,161,170,176	土器	耳	火	(38.0)	8.0	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 17 1 1号房 134	土器	耳	火	(12.0)	6.0	5.65	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
12 18 1 1号房 146	土器	耳	火	(10.6)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 1 2 2号房 64	土器	耳	火	(12.0)	12.0	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 2 2 2号房 146	土器	耳	火	(10.6)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 3 2 2号房 188	土器	耳	火	(4.6)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 4 2 2号房 199	土器	耳	火	(4.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 5 2 2号房 175,181,188,196,210	土器	耳	火	(14.8)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 6 2 2号房 202,203,205	大輪器	火	火	(13.0)	4.2	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 7 2 2号房 145	土器	耳	火	(15.6)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 8 2 2号房 147	土器	耳	火	(14.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 9 2 2号房 249	土器	耳	火	(14.8)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 10 2 2号房 146	土器	耳	火	(14.8)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 11 2 2号房 138	土器	耳	火	(14.0)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	
16 12 2 2号房 163	土器	耳	火	(15.2)	—	—	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	ヨロクナガリ、火文	火	—	—	—	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	ヨウカヒル、火文	火	—	—	

原種	通称	本上	花	葉	果	形	果	花	葉	根	皮	肉	色	味	特	性	原产地	備考	
16 13 2号梅 1.5t	梅胡桃	1.5t	白	圆	一	6.0	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 14 2号梅 1.85-2.10t	土桔梗	—	白	圆	—	6.0	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 15 2号梅 3.0t	毛毛梅	—	白	圆	—	12.0	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 16 2号梅 1.9t	赤毛梅	—	白	圆	—	10.2	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 17 2号梅 2.0t	毛毛梅	—	白	圆	—	12.0	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 18 2号梅 0.8-0.85t	土桔梗	—	白	圆	—	—	—	ナガサギ	ナガサギ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 19 2号梅 1.7t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ナガサギ	ナガサギ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 20 2号梅 1.7t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ナガサギ	ナガサギ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 21 2号梅 1.6t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ナガサギ	ナガサギ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 22 2号梅 0.3t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ナガサギ	ナガサギ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 23 2号梅 0.2t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ナガサギ	ナガサギ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
16 24 2号梅 0.28t	毛毛梅	—	白	圆	—	28.0	—	—	ナガサギ	ナガサギ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—
16 25 2号梅 0.17t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ナガサギ	ナガサギ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 1 3号梅 0.6t-0.9t 5.0t	毛毛梅	—	白	圆	—	13.2	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 2 3号梅 1.2t	毛毛梅	—	白	圆	—	13.2	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 3 3号梅 1.25t	毛毛梅	—	白	圆	—	13.2	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 4 3号梅 1.48t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 5 3号梅 0.9t	毛毛梅	—	白	圆	—	11.6	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 6 3号梅 0.6t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 7 3号梅 1.16t	毛毛梅	—	白	圆	—	15.4	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 8 3号梅 1.05t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 9 3号梅 1.17t-1.19t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 10 3号梅 1.11-1.14t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 11 3号梅 0.6t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 12 3号梅 0.76-0.82t 3.0t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 13 3号梅 1.19t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 14 3号梅 0.2-0.6t 1.6t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 15 3号梅 0.76t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 16 3号梅 1.84-1.88t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 17 3号梅 1.38t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 18 3号梅 1.11t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 19 3号梅 0.78t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 20 3号梅 0.6t-1.0t 3.0t-3.8t 3.85t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
20 21 3号梅 1.5t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
25 1 4号梅 0.65-0.8t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	
25 2 4号梅 0.25-0.59t	毛毛梅	—	白	圆	—	—	—	ロカボナダ	ロカボナダ	—	白	白、赤、黑色	—	—	—	—	—	—	

測定番号	測定年	測定月	E _r	±	R _o	標高	22形 日出式	22形 日落式	門 門	門 門	壁 壁	壁 壁	色 色	調 調	施 施	土 土	気 気	水分 水分	調 調	
30 - 3	5年2月	223					—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
30 - 4	5年3月	290					—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
30 - 5	5年4月	11, 12, 207, 253, 254					要 要 要	(6.0)	(6.0)	ハタケ、 ハタケ、 ハタケ	ハタケ、 ハタケ、 ハタケ	ハタケ、 ハタケ、 ハタケ	ハタケ、 ハタケ、 ハタケ	白、赤、 白、赤、 白、赤	2.575±0.5	2.575±0.5	2.575±0.5	2.575±0.5	2.575±0.5	
30 - 6	5年5月	237					要 要 要	(29.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
30 - 7	5年6月	199, 225, 252, 253, 254,					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(30.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
30 - 8	5年7月	45					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	4.6	4.6	ロクナガ、 ロクナガ、 ロクナガ	ロクナガ、 ロクナガ、 ロクナガ	ロクナガ、 ロクナガ、 ロクナガ	ロクナガ、 ロクナガ、 ロクナガ	白、赤、 白、赤、 白、赤	2.575±0.5	2.575±0.5	2.575±0.5	2.575±0.5	2.575±0.5
35 - 1	6年1月	265					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 2	6年2月	1.4					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 3	6年3月	197					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 4	6年4月	212					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 5	6年5月	226, 253					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 6	6年6月	1, 216					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 7	6年7月	4, 60, 146, 245, 257					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 8	6年8月	344					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 9	6年9月	257					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 10	6年10月	144					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 11	6年11月	215					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 12	6年12月	8					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 13	6年1月	16					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 14	6年2月	96					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 15	6年3月	136					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 16	6年4月	40					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 17	6年5月	42, 65, 251, 275, 282					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 18	6年6月	230					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 19	6年7月	248					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 20	6年8月	231					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 21	6年9月	96					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 22	6年10月	50					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 23	6年11月	87					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35 - 24	6年12月	17					土野鷺 土野鷺 土野鷺	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

品目	番号	通称名	取扱上	地	種類	原形	分類	分量(g)	分量(g)	色	味	香	味	香	味	香
37 6 8-番茶 51	3	西高砂	口吸	西高砂	ロカボナ	ロカボナ	葉片	1.50	1.50	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
37 7 8-番茶 2	3	西高砂	口吸	西高砂	ロカボナ	ロカボナ	葉片	1.50	1.50	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
37 8 8-番茶 15	3	土佐茶 煎	口吸	(30.0)	—	—	葉片	—	—	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
38 1 8-番茶 9.10.15.40.煎陳茶外355	1	山元茶	煎	11.0	4.4	3.85	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
38 2 8-番茶 11.15.17.20.24	2	山元茶	煎	11.2	4.5	4.1	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
38 3 8-番茶 107	3	山元茶	煎	15.0	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 4 小倉茶 145	4	土佐茶 煎	口吸	(12.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 5 小倉茶 70~94	5	山元茶 煎	口吸	(13.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 6 小倉茶 100	6	二輪脚 煎	口吸	(14.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 7 小倉茶 60	7	土佐茶 14	口吸	(14.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 8 小倉茶 105	8	土佐茶 煎	口吸	(15.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 9 小倉茶 99	9	山元茶 煎	口吸	(12.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 10 小倉茶 210	10	土佐茶 煎	口吸	(12.0)	(7.0)	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 11 小倉茶 93	11	土佐茶 14	口吸	(9.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 12 小倉茶 106.113	12	十輪脚 煎	口吸	—	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 13 小倉茶 21.86.77	13	土佐茶 21	口吸	(12.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 14 小倉茶 96	14	七輪脚 煎	口吸	(12.8)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 15 小倉茶 97.100.102.(31)	15	土佐茶 14	口吸	(12.0)	5.5	4.05	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 16 小倉茶 106	16	山元茶 煎	口吸	13.0	5.5	4.3	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 17 小倉茶 36.90.144~16.148~150	17	土佐茶 煎	口吸	(13.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 18 小倉茶 109~115~116~130~122	18	山元茶 煎	口吸	(16.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 19 小倉茶 156	19	土佐茶 煎	口吸	(14.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 20 小倉茶 166	20	七輪脚 煎	口吸	(7.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 21 小倉茶 114	21	山元茶 煎	口吸	(15.4)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 22 小倉茶 16.122	22	十輪脚 煎	口吸	(16.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 23 小倉茶 225.260	23	七輪脚 21	口吸	(11.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 24 小倉茶 234	24	七輪脚 21	口吸	(11.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 25 小倉茶 234~25.46.126.131.178	25	七輪脚 21	口吸	(11.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
39 26 小倉茶 235	26	七輪脚 21	口吸	(11.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
40 1 小倉茶 86.89.129~130.157	1	十輪脚 煎	口吸	(26.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
40 2 小倉茶 227	2	土佐茶 煎	口吸	(28.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
40 3 小倉茶 21.12	3	七輪脚 21	口吸	(22.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
40 4 小倉茶 136~141.173~155.168	4	七輪脚 21	口吸	(22.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
40 5 小倉茶 225	5	七輪脚 21	口吸	(26.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
40 6 小倉茶 227	6	土佐茶 煎	口吸	(28.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
40 7 小倉茶 21.12	7	七輪脚 21	口吸	(22.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
40 8 小倉茶 136~141.173~155.168	8	七輪脚 21	口吸	(22.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無
40 9 小倉茶 225	9	七輪脚 21	口吸	(26.0)	—	—	ロカボナ	ロカボナ	葉片	白	甘酸	無	甘酸	無	甘酸	無

年次	番号	種類	数	上	No.	品種	形	花	葉	果	根	莖	葉	花	果	根	莖	葉	花
77	3	12号外	1	土植	秆	—	—	ロカナダ	ロカナダ	—	5257N6	(未)	白、赤、黒色子	白	—	—	—	—	
77	4	11号外	1	土植	秆	(14.0)	—	—	ロカナダ	ロカナダ	—	5161	白、赤、黒色子	白	—	—	—	—	
77	5	13号外	36	土植	秆	(14.0)	—	—	ロカナダ	ロカナダ	—	5YK5G	白、赤、黒色子	白	—	—	—	—	
77	6	13号外	7	土植	秆	(15.0)	—	—	ロカナダ	ロカナダ	—	7-3166	白、赤、黒色子	白	—	—	—	—	
77	7	14号外	130	土植	秆	(12.3)	—	—	ロカナダ	ロカナダ	—	明治前 2.57Bz/G	(未)	白、赤、黒色子	白	5/12	内外混生性有	引田A?	
77	8	16号外	125(114)	土植	秆	(11.4)	—	—	ロカナダ	ロカナダ	—	51766	白、赤、黒色子	白	10/20	—	—	—	
77	9	16号外	35, 36	土植	秆	(12.0)	—	4.0	ロカナダ	ロカナダ	—	51766/8	(未)	赤色子	白	12/12	黑色土苔		
77	10	16号外	127	土植	秆	(14.0)	—	—	ロカナダ	ロカナダ	—	—	白、赤、黒色子	白	6/10	黑色	—	—	
77	11	16号外	10	土植	秆	—	—	—	ロカナダ	ロカナダ	—	51766/9	(未)	口紅子	白	—	—	—	
77	12	16号外	205, 206	土植	秆	13.5	3.4	—	ロカナダ	ロカナダ	—	明治後 2.57Bz/G	(未)	白、赤、黒色子	白	6/6	70	墨色	
77	13	通野外	348	土植	秆	(10.0)	5.0	—	ロカナダ	ロカナダ	—	2.57Bz/G	(未)	白、赤、黒色子	白	40/50	外海野行	無	
77	14	通野外	358	土植	秆	12.0	5.6	4.0	ロカナダ	ロカナダ	—	2.57Bz/G	(未)	白、赤、黒色子	白	65/70	通野外野	無	
77	15	水底	—	土植	秆	12.0	3.5	2.0	ロカナダ	ロカナダ	—	5YK6-2.57	(未)	白、赤、黒色子	白	30/30	水底	無	
77	16	通野外	387, 389	土植	秆	16.0	—	—	ロカナダ	ロカナダ	—	5.6	白、赤、黒色子	白	—	—	—	—	
77	17	通野外	231	土植	秆	14.0	7.8	3.8	ロカナダ	ロカナダ	—	5YK6/7.1	(未)	白、赤、黒色子	白	10/30	通野外	無	
77	18	通野外	67	土植	秆	12.0	—	—	ロカナダ	ロカナダ	—	5YK6/2	(未)	白、赤、黒色子	白	10/30	通野外 1mにわたり薄く生長		
77	19	通野外	238	土植	秆	—	16.0	—	ダツ	ダツ	—	5YK6-2.57	(未)	白、赤、黒色子、小管	白	10/30	—		

第3表 墓書・線刻土器一覧表

図版	番号	出土遺物	取上 No	基準・線刻内容	種別	記録部位／状況	備考	
12	8	1号住居	24,55,56,72,85,87,91,92, 119,124,125,146,147,149, 204,217,219	<input type="checkbox"/>	土師器 ノ彫器	环 体部・外周／	文字かどうか不明	
12	15	1号住居	103,131,138～139,197,201	東	土師器	环 体部・外周／		
16	4	2号住居	199	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周+底部・外周／		
16	6	2号住居	202,204,205	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／	「千」の可能性が高い。	
16	13	2号住居	154	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／	黑色土器	
16	19	2号住居	120	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
16	20	2号住居	170	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／	黑色土器	
16	21	2号住居	155	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
16	22	2号住居	63	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
16	23	2号住居	26	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
20	4	3号住居	48	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
20	5	3号住居	91	<input type="checkbox"/>	三	土師器 ノ彫器	环 体部・外周／	
20	10	3号住居	111,134	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
20	18	3号住居	11	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
20	19	3号住居	136	<input type="checkbox"/>	死物陶器	环 体部・外周／	墨刀ではない可能性もある	
25	2	4号住居	523,539	山	土師器	环 体部・外周／	縦短卜因	
25	11	4号住居	526	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
25	12	4号住居	496,587,588,596,157,44	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
25	13	4号住居	522,524	<input type="checkbox"/>	長	土師器	环 体部・外周/倒位	
25	16	4号住居	1,2,10,151,271,436,542 ～546,619,652	休 カ	土師器	环 体部・外周/倒位	黑色土器	
25	19	4号住居	541	<input type="checkbox"/>	體 力	土師器 ノ彫器	环 体部・外周/倒位 黑色土器	
25	21	4号住居	574	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／	黑色土器	
25	26	4号住居	209	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／	黑色土器	
25	27	4号住居	506	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
25	28	4号住居	753	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
29	5	5号住居	109,213,215	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
29	18	5号住居	238,262	<input type="checkbox"/>	長	土師器 ノ彫器	环 体部・外周/倒位	
29	22	5号住居	143	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
29	25	5号住居	173	<input type="checkbox"/>	長	土師器 ノ彫器	环 体部・外周/倒位	
29	26	5号住居	110	<input type="checkbox"/>	土師器 ノ彫器	环 体部・外周／		
29	27	5号住居	171,183	<input type="checkbox"/>	本	土師器 ノ彫器	环 体部・外周/倒位	
29	28	5号住居	82	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
29	29	5号住居	17	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
35	1	6号住居	235	足 足	土師器	环 体部・外周+体部・外周/横位	体部外周对称位置	
35	4	6号住居	212	<input type="checkbox"/>	伯	土師器	环 体部・外周／	
35	6	6号住居	1,216	<input type="checkbox"/>	伯	土師器	环 体部・外周／	
35	11	6号住居	218	<input type="checkbox"/>	伯	土師器	环 体部・外周／	
35	12	6号住居	8	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周/底部・外周／		
39	1	小殿門遺構	9,10,15,41,高梅外305	庄	土師器	环 体部・外周／		
39	3	小殿門遺構	107	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
39	4	4号住居	7	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
39	8	5号窓穴	147	<input type="checkbox"/>	朽	土師器 ノ彫器	环 体部・外周／	
39	11	7号窓穴	112	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／	黑色土器	
70	3	7号土坑	3,5	東 カ	土師器	环 体部・外周／		
70	13	10号ビット	1	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
77	3	12号溝	1	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
77	11	16号溝	10	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		
77	12	溝構外	205,黄板	上 カ	土師器	环 体部・外周／		
77	13	造構外	348	<input type="checkbox"/>	土師器	环 体部・外周／		

第4表 遺物観察表(金属製品)

回数	番号	川上名	通上No.	種類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
78	1	川上正義	121	機械部品	鉄	4.17	0.52	0.59	5.41 用途不明
78	2	川上正義	135	機械部品	鉄	5.07	0.48	0.45	2.57 用途不明
78	3	川上正義	131	機械部品	鉄	9.01	1.16	0.35	9.59
78	4	川上正義	36	機械部品	鉄	6.53	0.56	0.23	3.11
78	5	川上正義	127	機械部品	鉄	14.45	1.05	0.40	9.183 未製品
78	6	川上正義	161	機械部品	鉄	10.30	3.19	0.39	62.92
78	7	川上正義	106	機械部品	鉄	6.31	0.53	0.53	36.15
78	8	川上正義	235	小物	鉄	5.07	1.14	0.15	4.35 用途不明
78	9	川上正義	100	機械部品	鉄	2.43	0.59	0.32	1.37 ノッチ
78	10	川上正義	244	機械部品	鉄	3.85	0.47	0.42	2.14 用途不明
78	11	川上正義	14	機械部品	鉄	8.69	0.81	0.56	15.48 用途不明
78	12	川上正義	75, 76	機械部品	鉄	10.36	0.45	0.58	7.83 未製品
78	13	川上正義	1	機械部品	鉄	8.35	0.48	0.42	6.75 用途不明
78	14	川上正義	4	機械部品	鉄	3.15(外) 3.15(内)	2.95(外) 2.95(内)	0.29	4.36 用途不明
78	15	川上正義	11	機械部品	鉄	1.16	0.46	0.37	0.65 用途不明
78	16	川上正義	116	機械部品	鉄	2.91	1.22	0.33	3.94 刀刃なし
78	17	川上正義	9	機械部品	鉄	5.50	0.70	0.30	3.63 細かい
78	18	川上正義	4	機械部品	鉄	3.86	0.83	0.38	4.73 用途不明
78	19	川上正義	178	機械部品	鉄	4.37	3.47	0.15	24.42 用途不明
78	20	川上正義	258	機械部品	鉄	3.43	1.75	0.19	3.46 ノッチ

第5表 遺物観察表(貨物)

回数	番号	出荷地	販工%	品名	外寸(cm)	空き(cm)	重さ(g)	材質	寸法	備考	販售年
79	1	中国	2.1	底平ガラス	2.41	2.43	0.73	(1.72)	底平 蓋付	底平付 蓋付	1986
79	2	中国	3.8	底平ガラス	2.38	2.39	0.80	2.46	底平 蓋付	底平付 蓋付	1986
79	3	中国	2.1	空室付ガラス	2.42	0.79	2.17	2.46	底平 蓋付	底平付 蓋付	1986
79	4	中国	8	不規	2.38	0.75	(0.77)	底平 蓋付	底平 蓋付	1986	
79	5	中国	5	底平ガラス	2.38	0.71	(0.76)	底平 蓋付	底平 蓋付	1986	
79	6	中国	15	底平ガラス	2.44	0.74	2.57	底平 蓋付	底平 蓋付	1986	
79	7	中国	277	底平ガラス	2.43	0.73	2.28	底平 蓋付	底平 蓋付	1986	
79	8	中国	304	底平ガラス	2.38	0.66	(1.28)	底平 蓋付	底平 蓋付	1986	

第6表 遺物観察表(土・石製品)

回数	番号	川上正義	通上No.	種類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
80	1	5号柱	234	土	土	5.3	—	1.75	0.5(±5%)	11.96
80	2	小便器	96	土	土	5.9	1.8	0.6(±5%)	8.92	
80	3	6号柱	53	砂岩	砂岩	4.2	3.0	—	45.22	
80	4	3号柱	18	瓦	瓦	9.6	—	—	106.83	
80	5	3号柱	19, 61	瓦	瓦	8.5	2.7	2.3	106.92	
80	6	3号柱	9	瓦	瓦	3.4	2.4	1.3	11.83	
80	7	7号柱	11	瓦	瓦	2.65	2.05	1.3	14.16	
80	8	通水管	27	瓦	瓦	8.3	2.3	—	107.65	
80	9	通水管	53	瓦	瓦	4.1	1.35	—	15.83	
81	1	3号柱	63, 65	瓦	瓦	25.7(口付)	15.0(底付)	—	12.25	片口付
81	2	3号柱	66	瓦	瓦	(34.3) a	—	—	—	—
81	3	3号柱	67, 15, 62	瓦	瓦	(30.5) a	(17.0) (底付)	—	12.63	1.14
81	4	3号柱	69	瓦	瓦	(42.0) (付)	—	—	6.84	—
81	5	3号柱	12	瓦	瓦	—	—	—	13.3	2.22
81	6	3号柱	202	瓦	瓦	—	—	—	0.34	—
81	7	3号柱	203	瓦	瓦	22.3	11.35	—	13.54	—
81	8	3号柱	68	瓦	瓦	26.0	19.4	—	18.6	—

直並は株子丸の重量であり、()は見付重量である。

直並

项目	指标	单位	2018年			2019年			2020年		
			完成数	增长%	目标数	完成数	增长%	目标数	完成数	增长%	目标数
一、综合类	企业数量	户	106	-1.86	106	106	-0.93	106	106	-0.93	106
	营业收入	亿元	20.63	11.77	20.63	20.63	0.00	20.63	20.63	0.00	20.63
	利润总额	亿元	1.59	10.47	1.59	1.59	0.00	1.59	1.59	0.00	1.59
二、科技创新类	企业数量	户	106	-1.86	106	106	-0.93	106	106	-0.93	106
	研发投入	亿元	2.03	2.78	2.03	2.03	0.00	2.03	2.03	0.00	2.03
三、绿色发展类	企业数量	户	106	-1.86	106	106	-0.93	106	106	-0.93	106
	绿色产值	亿元	10.09	10.09	10.09	10.09	0.00	10.09	10.09	0.00	10.09
四、社会效益类	企业数量	户	106	-1.86	106	106	-0.93	106	106	-0.93	106
	吸纳就业	人	354	0.00	354	354	0.00	354	354	0.00	354
五、转型升级类	企业数量	户	106	-1.86	106	106	-0.93	106	106	-0.93	106
	技术改造	亿元	0.25	10.00	0.25	0.25	0.00	0.25	0.25	0.00	0.25
六、开放合作类	企业数量	户	106	-1.86	106	106	-0.93	106	106	-0.93	106
	出口额	亿元	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
七、公共服务类	企业数量	户	106	-1.86	106	106	-0.93	106	106	-0.93	106
	纳税额	亿元	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
八、其他类	企业数量	户	106	-1.86	106	106	-0.93	106	106	-0.93	106
	其他	亿元	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

第 一 章									
一、概 述									
二、地 球									
三、太 阳									
四、月 球									
五、行 星									
六、恒 星									
七、星 系									
八、总 结									

科目	期初借方	期初贷方	本期借方	本期贷方	本期发生额		
					增加	减少	余额
库存现金	200	200					
银行存款	200	200					
短期借款							
交易性金融资产							
其他债权投资							
长期股权投资							
投资性房地产							
固定资产							
无形资产							
长期待摊费用							
递延所得税资产							
其他非流动资产							
流动资产合计	200	200					
长期应收款							
长期股权投资减值准备							
可供出售金融资产减值准备							
持有至到期投资减值准备							
长期应付款							
预计负债							
递延所得税负债							
其他非流动负债							
非流动负债合计							
流动负债合计							
所有者权益							
实收资本(股本)	500	500					
资本公积	500	500					
盈余公积	500	500					
未分配利润	500	500					
所有者权益合计	500	500					
负债和所有者权益总计	200	200					

章	节	目	页数
第一部分 总论			
第一章 地理环境与区域划分			
1.1	地理环境的特征	1	1~8
1.2	中国的自然环境	2	9~16
1.3	中国的区域划分	3	17~24
第二部分 各区域地理			
第三部分 中国农业地理			
第四部分 中国人口地理			
第五部分 中国工业地理			
第六部分 中国交通运输地理			
第七部分 中国城市地理			
第八部分 中国旅游资源			
第九部分 中国政治地理			
第十部分 中国民族地理			
第十一部分 中国历史地理			
第十二部分 中国军事地理			
第十三部分 中国生态地理			
第十四部分 中国灾害地理			
第十五部分 中国教育地理			
第十六部分 中国旅游地理			
第十七部分 中国农业区划			
第十八部分 中国交通运输区划			
第十九部分 中国城市区划			
第二十部分 中国旅游资源区划			
第二十一部分 中国民族区划			
第二十二部分 中国灾害区划			
第二十三部分 中国生态区划			
第二十四部分 中国教育区划			
第二十五部分 中国军事情报地理			
第二十六部分 中国军事情报区划			
第二十七部分 中国军事情报研究			

章	节	目	页数
第一部分 总论			
第二部分 各区域地理			
2.1	全国概况	1	1~8
2.2	各区域概况	2	9~16
第三部分 中国农业地理			
第四部分 中国人口地理			
第五部分 中国工业地理			
第六部分 中国交通运输地理			
第七部分 中国城市地理			
第八部分 中国旅游资源			
第九部分 中国政治地理			
第十部分 中国民族地理			
第十一部分 中国历史地理			
第十二部分 中国军事地理			
第十三部分 中国生态地理			
第十四部分 中国灾害地理			
第十五部分 中国教育地理			
第十六部分 中国旅游地理			
第十七部分 中国农业区划			
第十八部分 中国交通运输区划			
第十九部分 中国城市区划			
第二十部分 中国旅游资源区划			
第二十一部分 中国民族区划			
第二十二部分 中国灾害区划			
第二十三部分 中国生态区划			
第二十四部分 中国教育区划			
第二十五部分 中国军事情报地理			
第二十六部分 中国军事情报区划			
第二十七部分 中国军事情报研究			

项目	指标	单位		备注
		数量	金额	
一、资产总计				
流动资产				
货币资金	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
应收账款	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
预付账款	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
存货	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
流动资产合计		3,480,000.00	3,480,000.00	
长期股权投资	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
固定资产	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
无形资产	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
长期待摊费用	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
递延所得税资产	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
其他资产	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
资产总计		3,480,000.00	3,480,000.00	
二、负债和所有者权益总计				
流动负债				
短期借款	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
应付账款	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
预收账款	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
应付职工薪酬	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
应交税费	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
应付股利	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
其他流动负债	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
流动负债合计		3,480,000.00	3,480,000.00	
非流动负债				
长期借款	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
应付债券	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
长期应付款	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
专项应付款	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
预计负债	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
递延所得税负债	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
其他非流动负债	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
非流动负债合计		3,480,000.00	3,480,000.00	
所有者权益				
实收资本	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
资本公积	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
盈余公积	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
未分配利润	元	1,160,000.00	1,160,000.00	
所有者权益合计		3,480,000.00	3,480,000.00	
负债和所有者权益总计		3,480,000.00	3,480,000.00	

おわりに

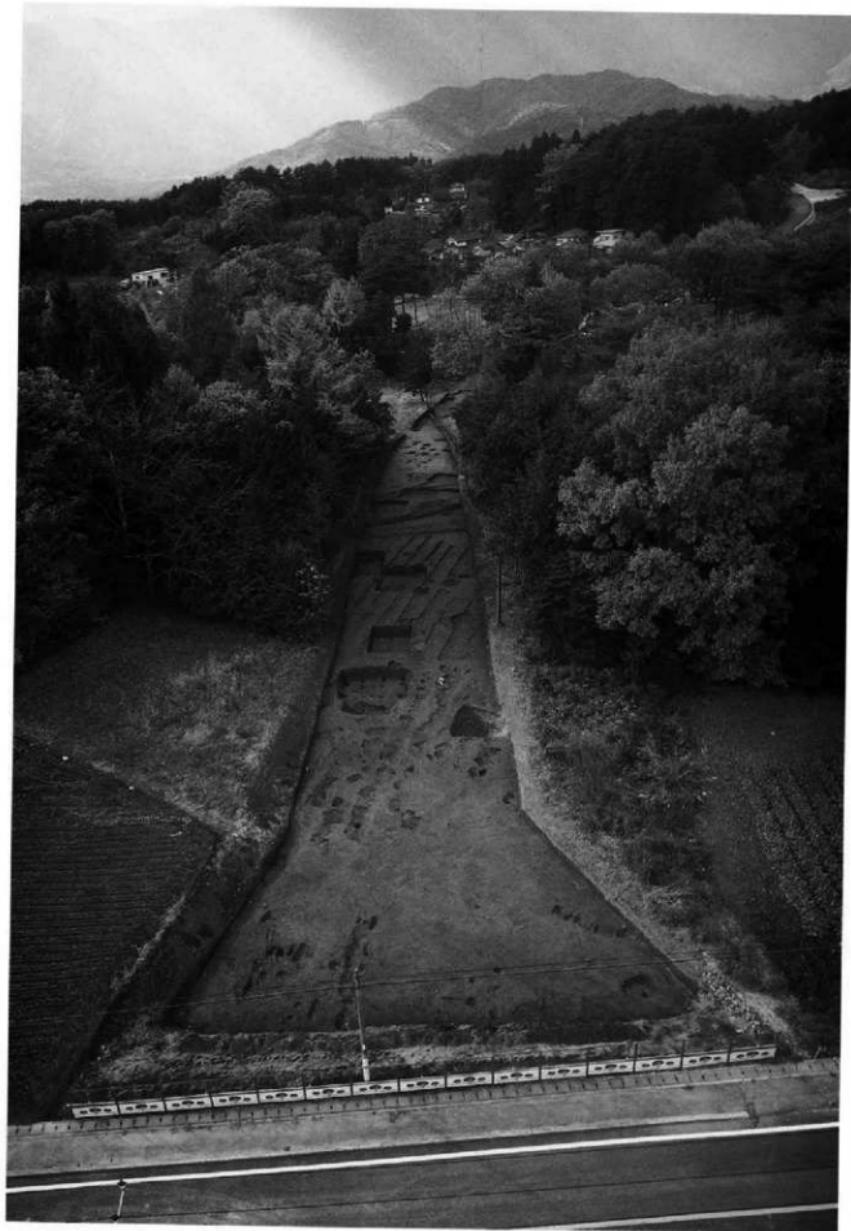
今回の発掘調査は、広域営農団地農道建設に伴う発掘調査ということもあり、調査幅10mほどとわずかなものであったが、平安時代の小鍛冶遺構を作り集落、中世の溝に囲まれた建物群などを発見することができた。幸い前年度には町教育委員会によって、周辺の遺跡の発掘調査がなされ、道路状遺構や墓地などが発見されたため、中川における耕作遺跡周辺の土地利用をある程度推定することができた。

調査区の北と南側は杉や桧が植林されており、その木陰は標高660mを越える高地の涼風とも相まって、暑い夏の調査からわれわれを救ってくれた。また、樺などの雜木林には樹液を求めてカブト虫、クワガタをはじめ多くの昆虫が群がっていた。とくにオオムラサキの里らしく、オオムラサキが乱舞する姿は炎天下での発掘調査にひとときの憩いをもたらしてくれた。

しかし、暑い夏に恩恵を受けた木陰も11月を迎えると、調査の進展を妨げる存在となってしまった。1日中日光の当たらない調査区では、写真撮影もままならず、霜柱も午前中触れないままであった。また、雜木林の枯葉は、八ヶ岳風の強風にのり調査区内に舞り注いだ。

このように、今回の発掘調査は、とくに季節を感じることのできる調査でもあった。

最後に、発掘調査から報告書刊行にあたりご協力を賜った関係機関、ご教示をいただいた方々、炎天下のなか深い堅穴の中でひたすら土を掘り上げ、写真撮影の際枯葉を追いかけていたくなど発掘調査に参加された方々、限られた時間のなかで報告書刊行に向け整理作業に従事された方々、以上の方々に厚くお礼申し上げます。



調査区全景 (1)

図版2



1 調査区全景 (2)



2 調査区中央付近航空写真 (1)



1 調査区西側航空写真



2 調査区中央付近航空写真 (2)

図版4



1 調査前状況 (1)



2 調査前状況 (2)



1 調査風景 (1)



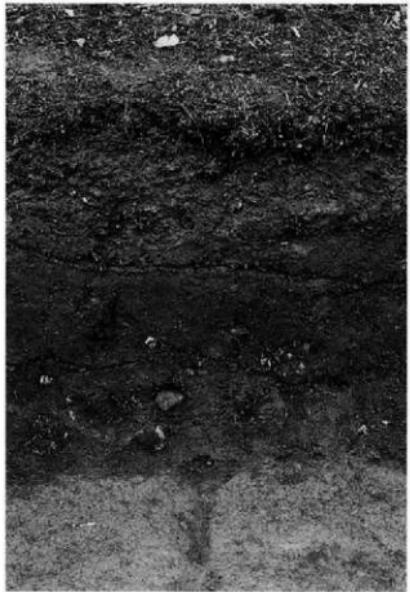
2 調査風景 (2)



3 調査風景 (3)



4 調査風景 (4)



5 遺跡基本土層 (西側)



6 遺跡基本土層 (東側)

图版 6



1 1号壁穴住居全景



2 同遗物出土状况 (1)



1 1号竪穴住居遺物出土状況（2）



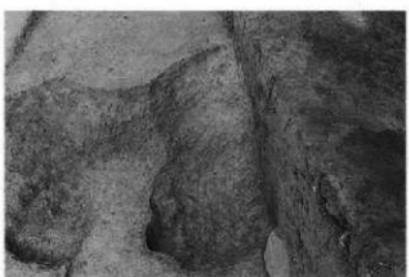
2 同遺物出土状況（3）



3 同カマド



4 同カマド遺物出土状況



5 同旧カマド



1 2号竖穴住居全景



2 同遗物出土状况 (1)



1 2号竖穴住居遺物出土状況（2）



2 同カマド検出状況



3 同カマド



4 同カマド遺物出土状況



5 3号竖穴住居全景

図版10



1 3号竪穴住居遺物出土状況（1）



2 同遺物出土状況（2）



3 同カマド



4 同カマド検出状況



5 同カマド遺物出土状況



1 4号竖穴住居全景



2 同遗物出土状况 (1)

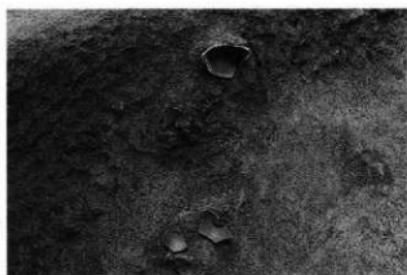
図版12



1 4号竪穴住居遺物出土状況（2）



2 同遺物出土状況（3）



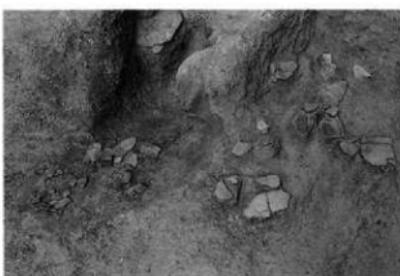
3 同遺物出土状況（4）



4 同遺物出土状況（5）



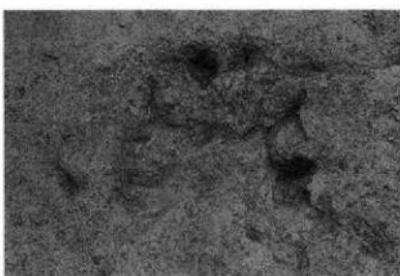
5 同カマド



6 同カマド遺物出土状況



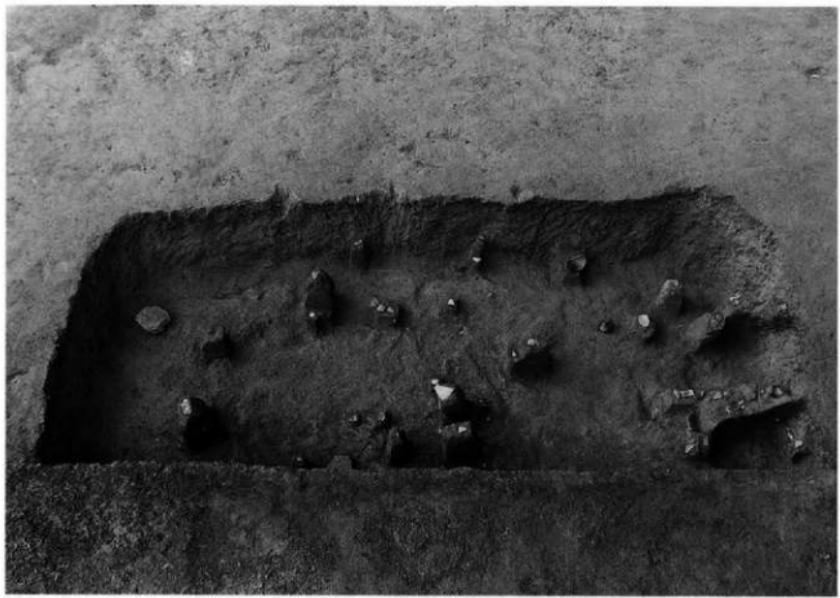
7 同カマド石組み状況



8 同旧カマド



1 5号堅穴住居全景



2 同遺物出土状況 (1)



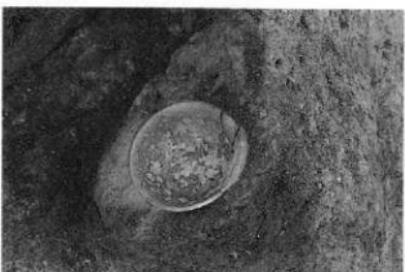
1 5号竖穴住居出土物出土状况 (2)



2 6号竖穴住居全景



1 6号竪穴住居遺物出土状況（1）



2 同遺物出土状況（2）



3 同カマド



4 同カマド遺物出土状況



5 8号竪穴住居全景



1 1号小银冶遗构全景



2 同遗物出土状况 (1)



1 1号小窑内土坑



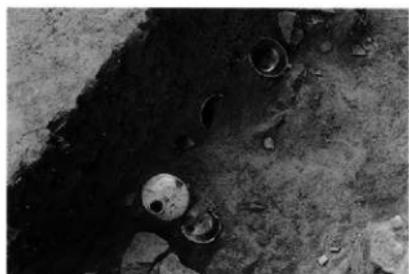
2 同遗物出土状况 (2)



3 同遗物出土状况 (3)



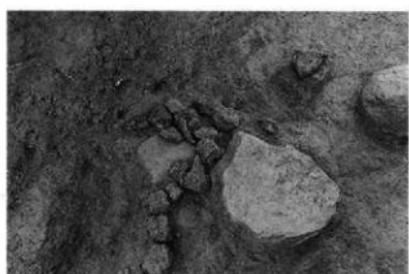
4 同遗物出土状况 (4)



5 同遗物出土状况 (5)



6 同遗物出土状况 (6)



7 同遗物出土状况 (7)



8 同遗物出土状况 (8)

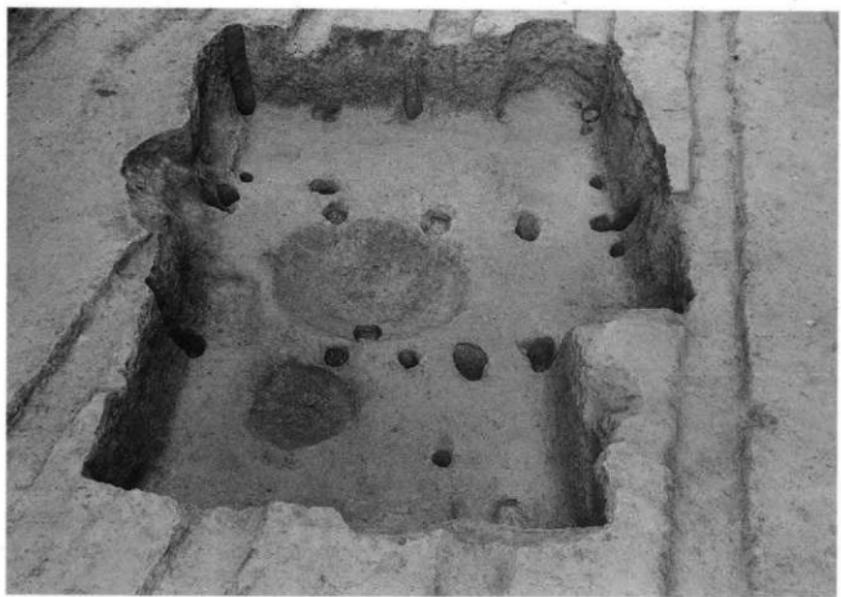
図版18



1 1・2・4・6・7号方形竖穴状遗構全景



2 1・2号方形竖穴状遗構全景



1 1号方形竪穴状遺構全景 (1)



2 同全景 (2)



1 1号方形竖穴状遗構露出状况（1）



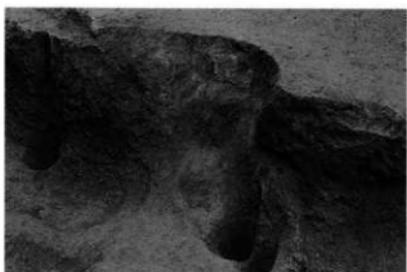
2 同様検出状况（2）



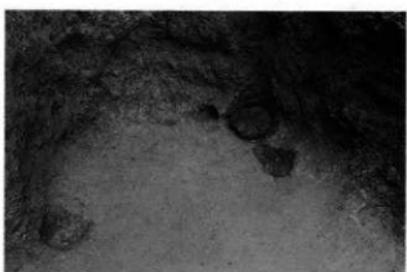
1 1号方形竪穴状遺構土層堆積状況(1)



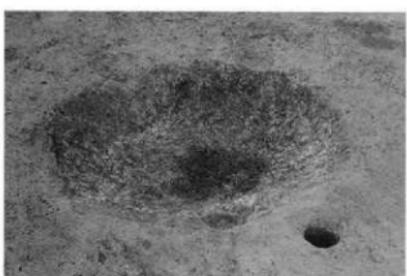
2 同土層堆積状況(2)



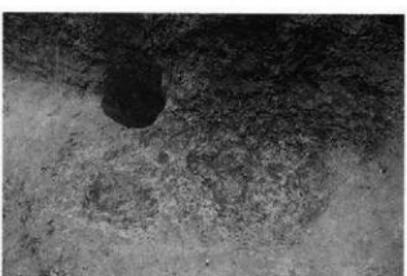
3 同出入口施設



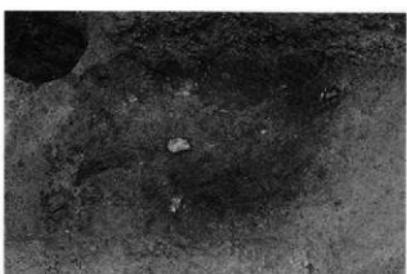
4 同張り出し部



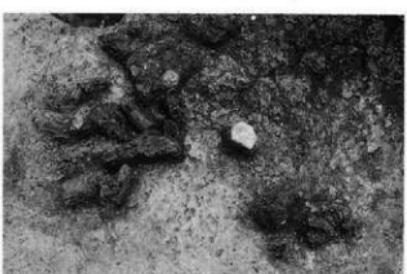
5 同1号火坑



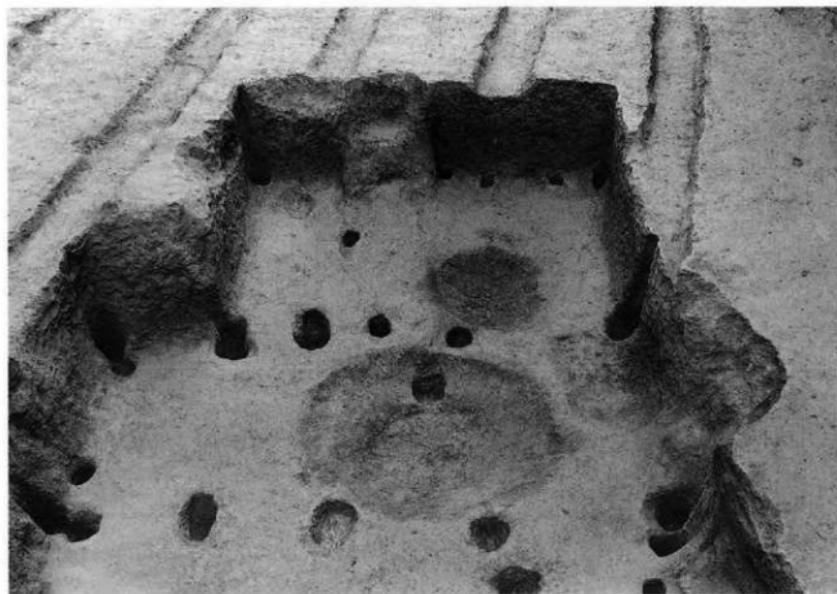
6 同2号火坑



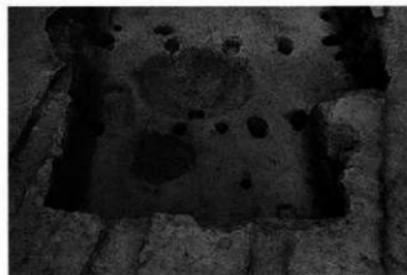
7 同2号火坑炭化物検出状況



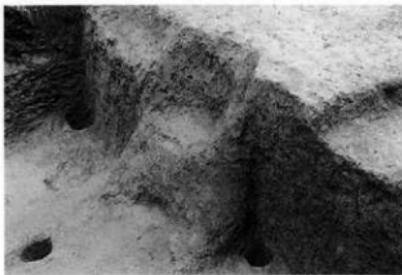
8 同2号火坑炭化物・遺物出土状況



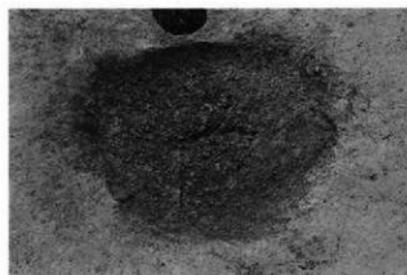
1 2号竖方形穴状遗構全景 (1)



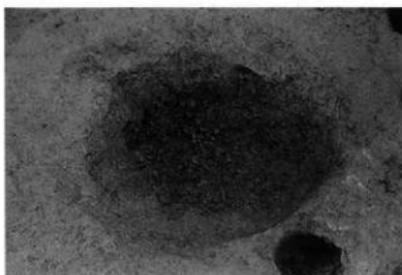
2 同全景 (2)



3 同出入口施設



4 同火坑



5 同火坑炭化物出土状况



1 3号方形竪穴状造構全景 (1)



2 同全景 (2)



1 3号方形竖穴状遗物（1）



2 同遗物出土状况（1）



1 3号方形竪穴状遺構礫検出状況 (2)



2 同様検出状況 (3)



3 同様検出状況 (4)



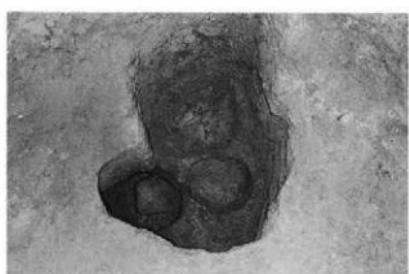
4 同様検出状況 (5)



5 同様検出状況 (6)



6 同出入口施設



7 同柱穴検出状況 (1)



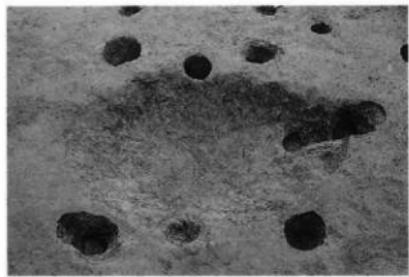
8 同柱穴検出状況 (2)



1 3号方形竖穴状遗构遗物出土状况 (2)



2 同遗物出土状况 (3)



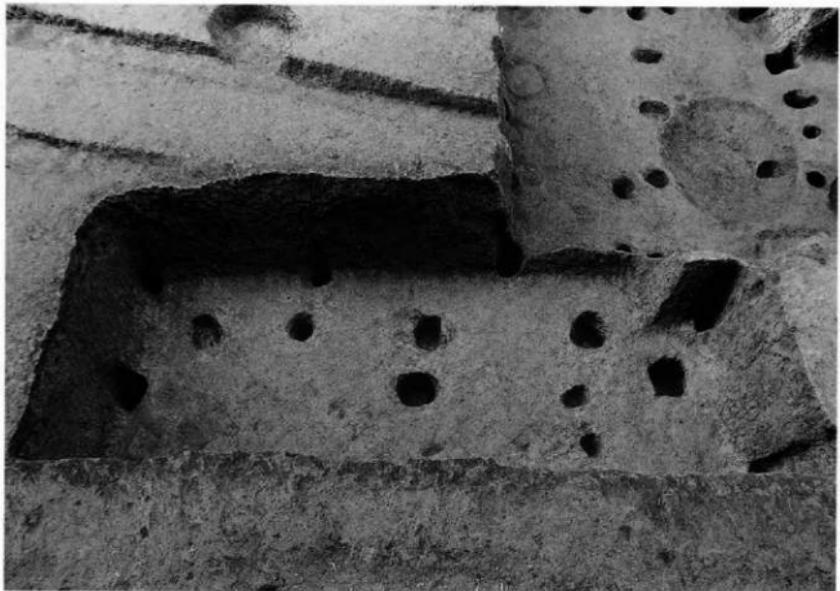
3 同火处



4 同火处遗物出土状况



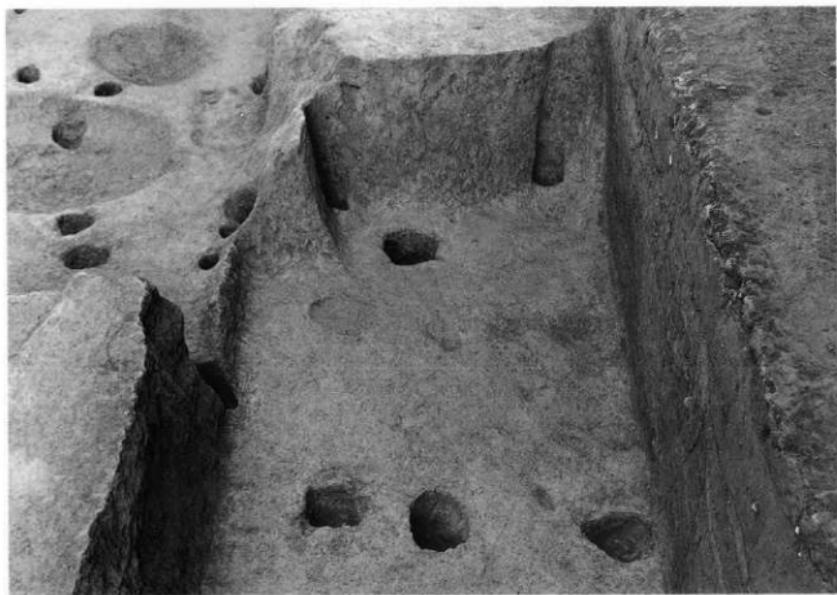
5 4·6·7号方形竖穴状遗构全景 (1)



1 4·6·7号方形竖穴状遗構全景 (2)



2 4号方形竖穴状遗構全景 (1)



1 4号方形竖穴状遗構全景 (2)



2 6号方形竖穴状遗構全景



1 4·6·7号方形竖穴状遗構土層堆積狀況 (1)



2 同土層堆積狀況 (2)



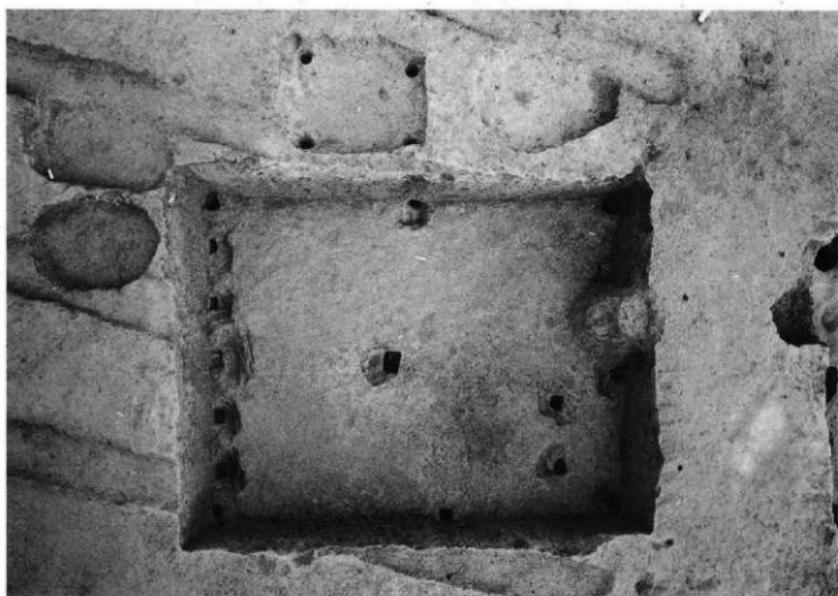
3 6号方形竖穴状遗構土層堆積狀況



4 4·6号方形竖穴状遗構土層堆積狀況



5 7号方形竖穴状遗構全景



1 5号方形竖穴状遗構全景 (1)



2 同全景 (2)



1 5号方形堅穴状遺構焼土検出状況（1）



2 同土層堆積状況（1）



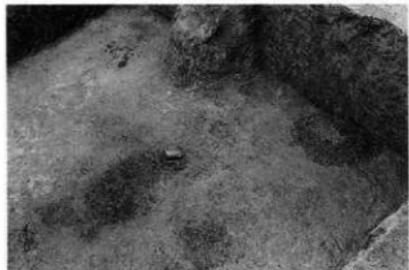
3 同土層堆積状況（2）



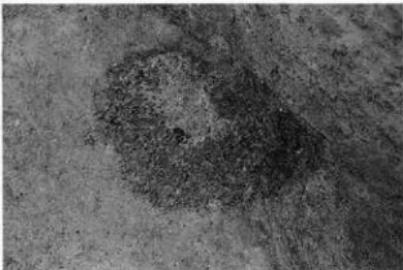
4 同出入口施設



5 同柱穴列検出状況



1 5号方形竖穴状遗构填土情况(2)



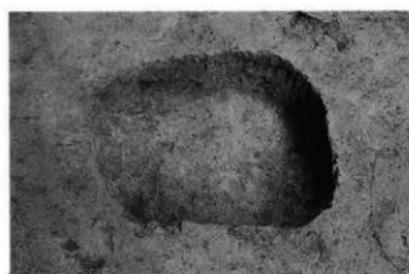
2 同烧土情况(3)



3 7·9号土坑



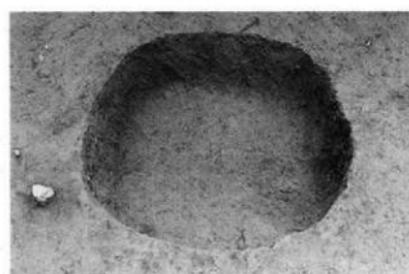
4 8号土坑



5 13号土坑



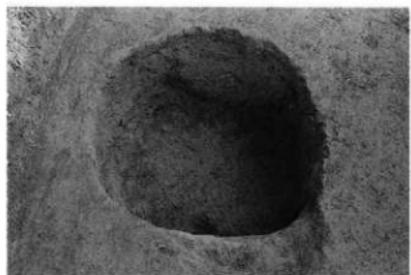
6 15号土坑情况



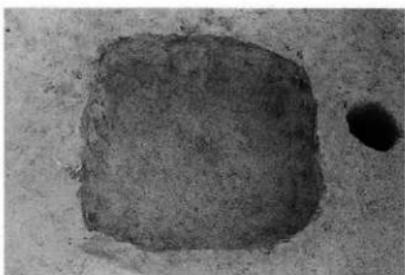
7 20号土坑



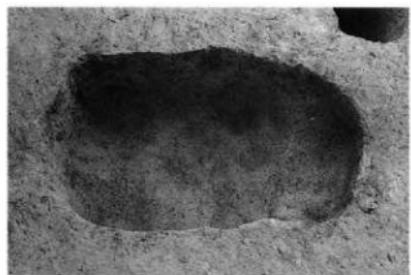
8 21号土坑



1 23号土坑



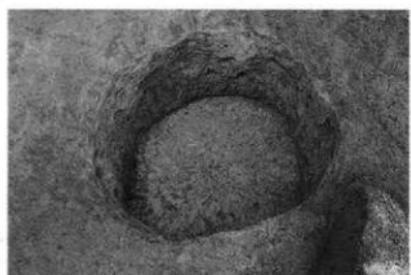
2 25号土坑・41号ピット



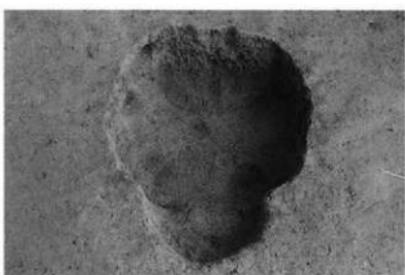
3 31号土坑



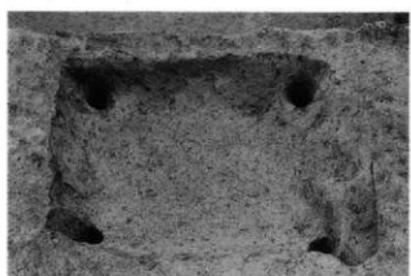
4 35号土坑



5 36号土坑



6 30・39号土坑



7 40号土坑



8 3～7・21号ピット



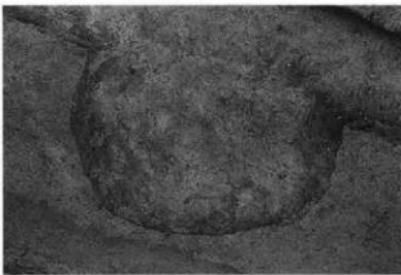
1 38・39号ビット



2 40号ビット



3 1号集石土坑



4 同穴掘



5 1~12号溝全景



1 1~8号溝



2 13号溝全景



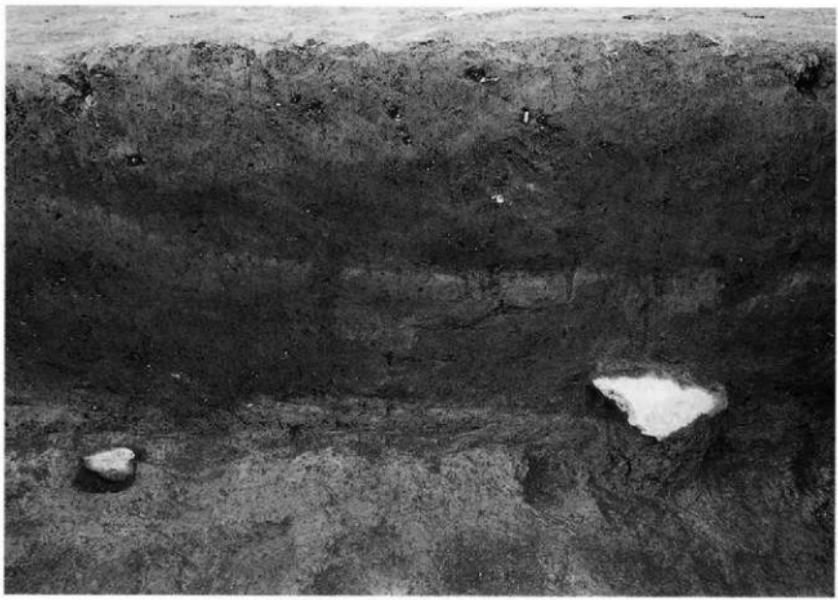
1 14号溝全景



2 13·14号溝全景



1 15号溝全景



2 同土層堆積狀況



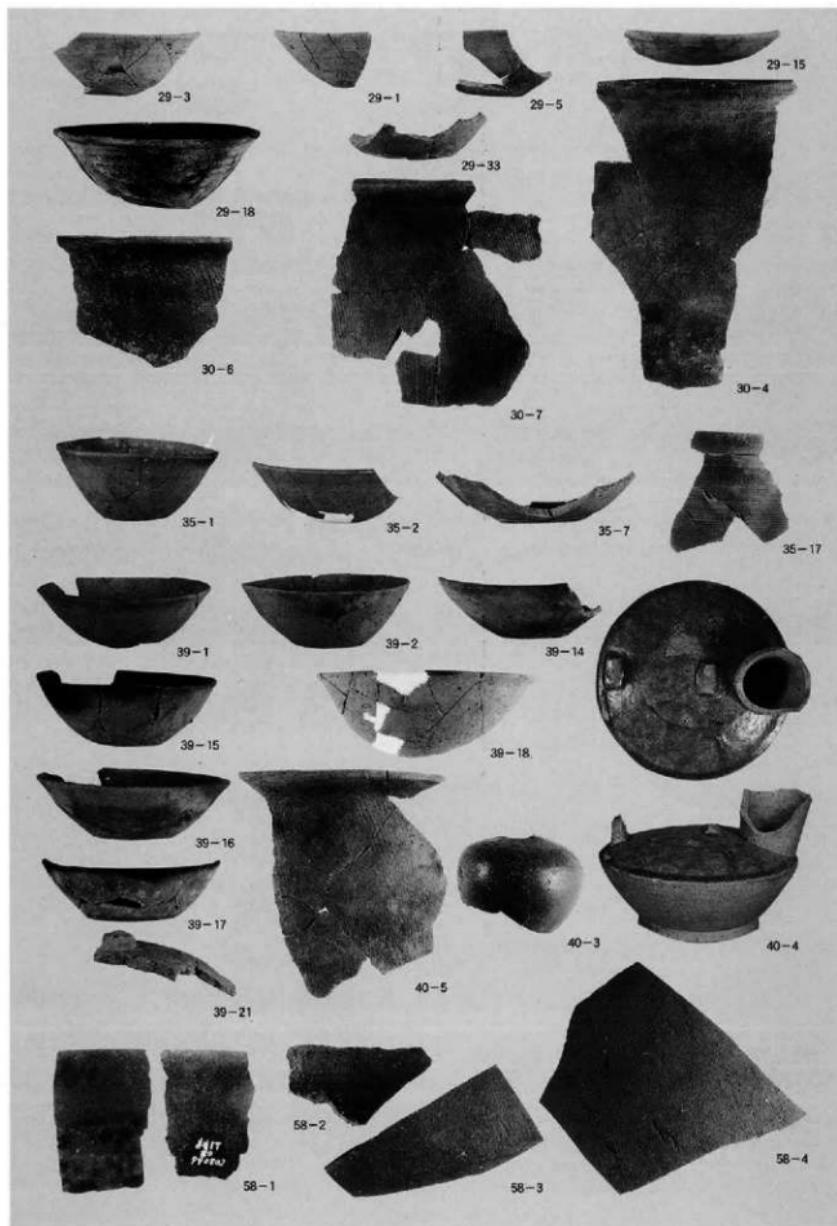
1 16号溝全景 (1)



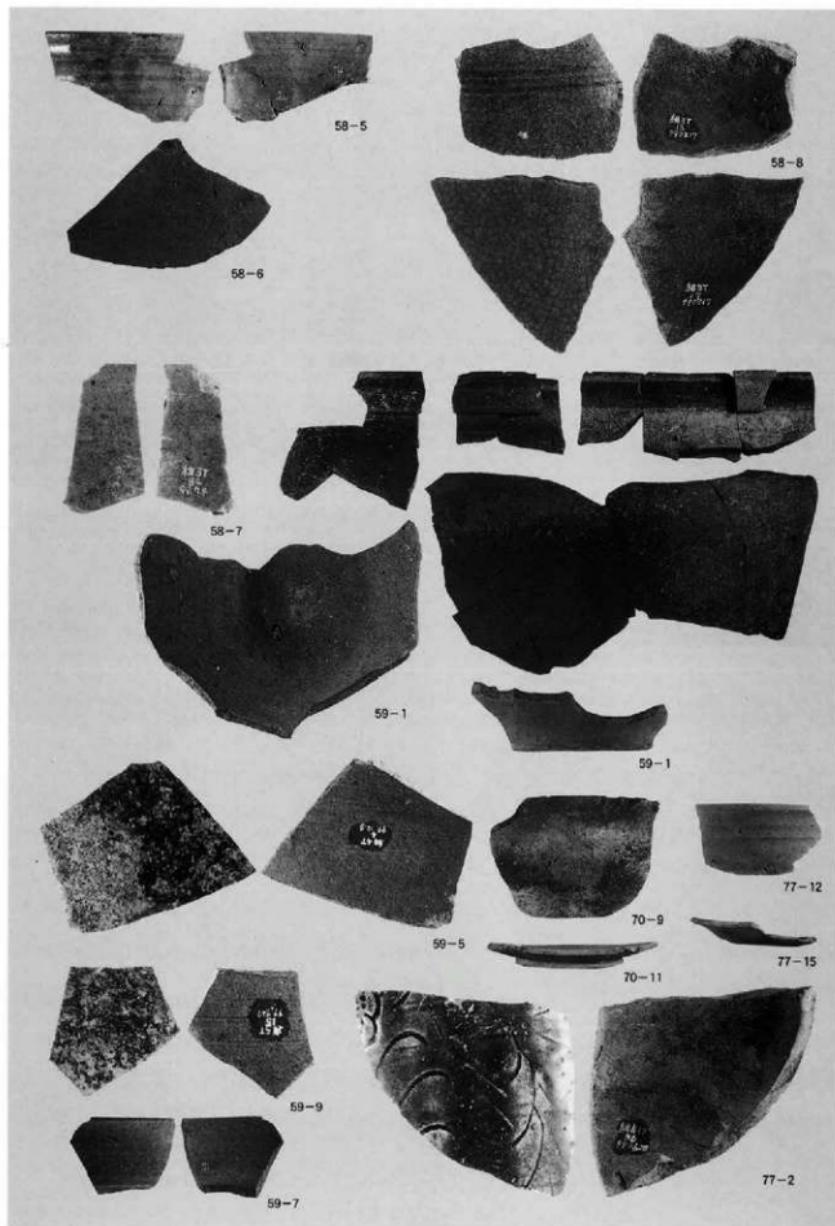
2 同全景 (2)



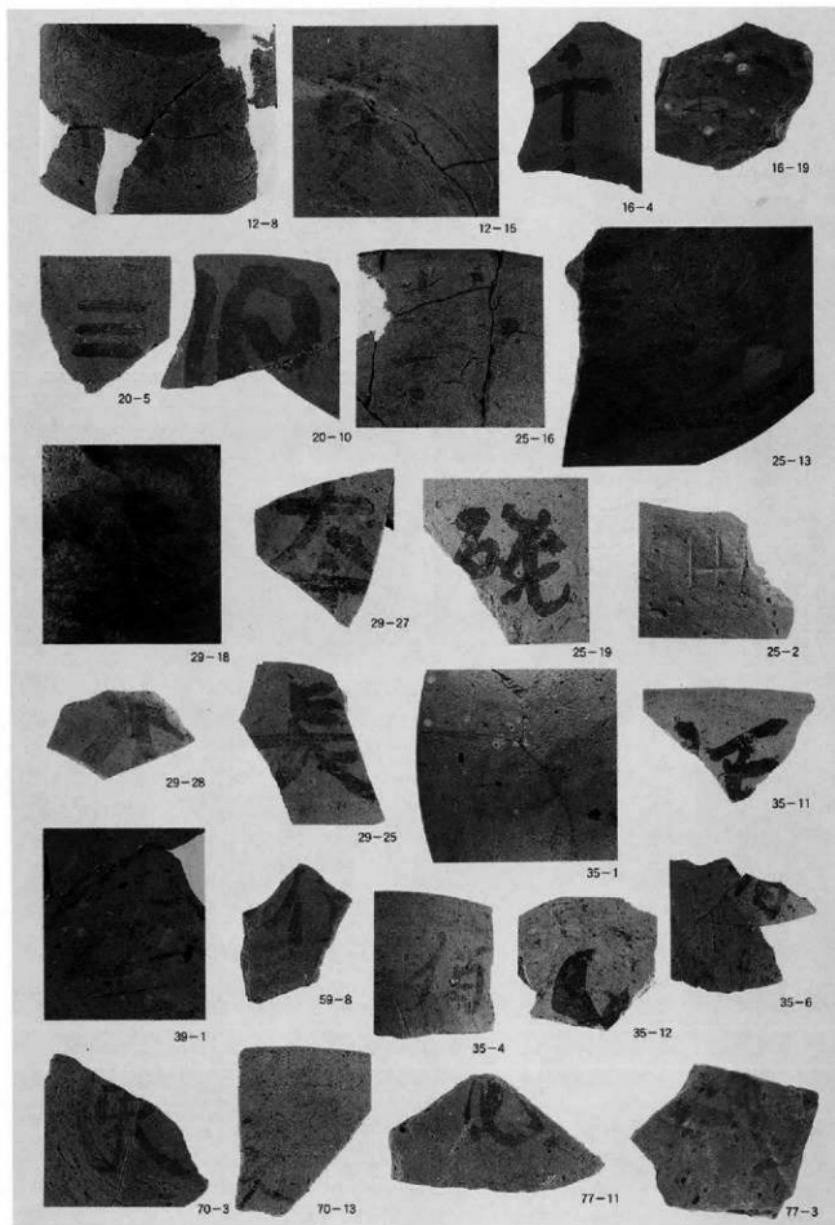
出土土器 (1)



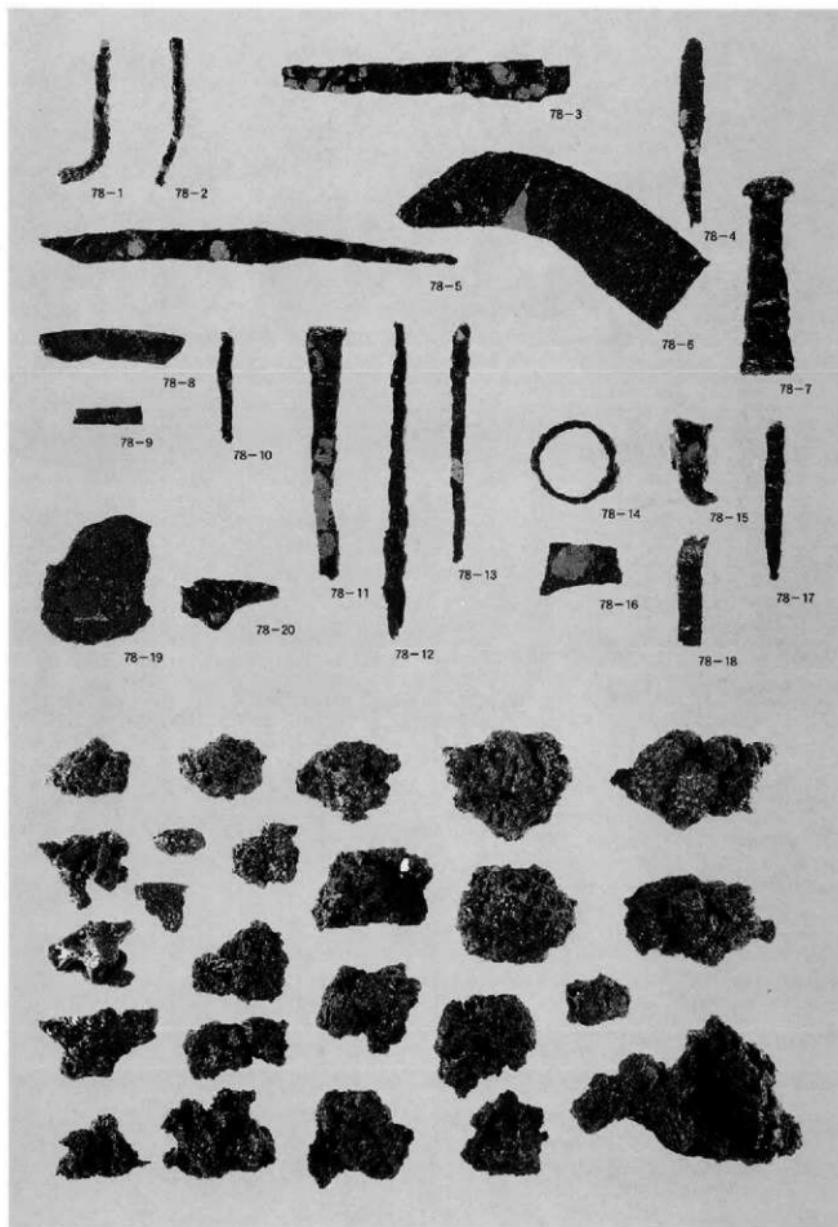
出土土器 (2)



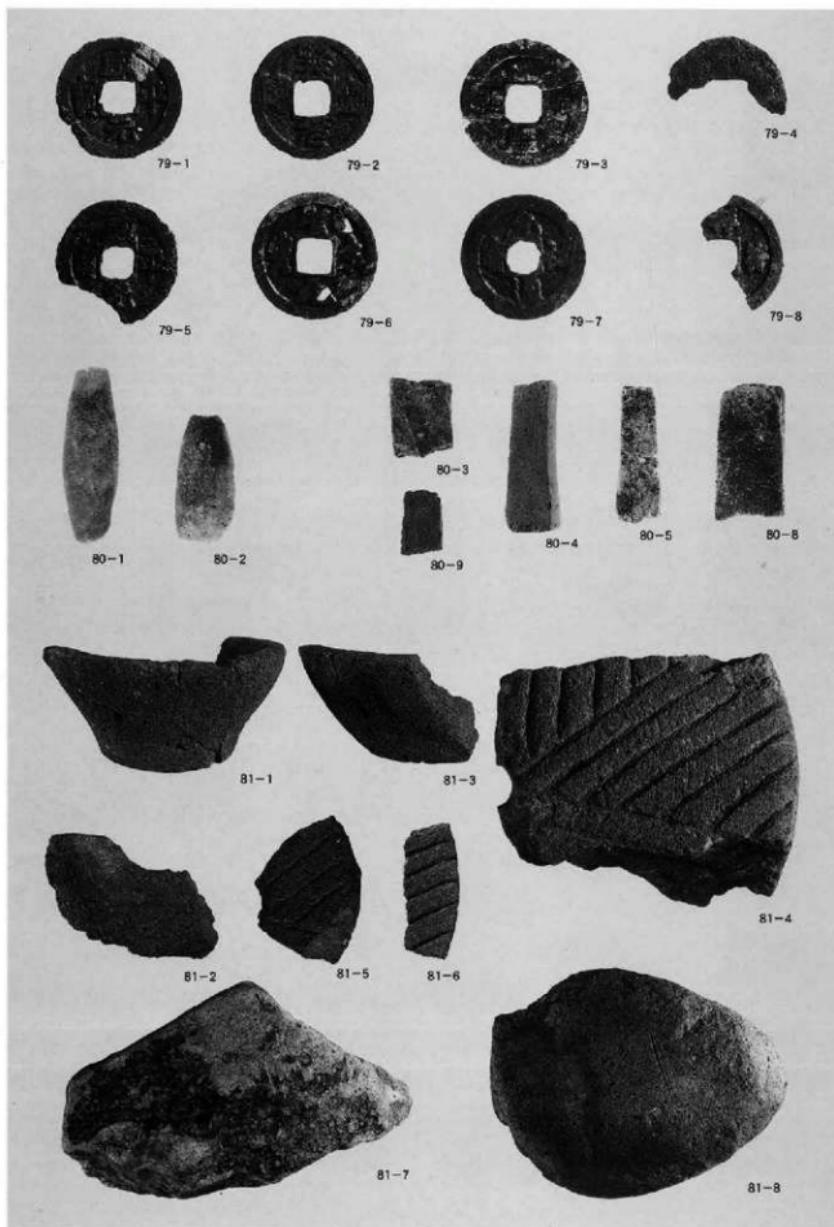
出土土器 (3)



墨書土器



鉄製品・鉄滓



銭貨・土製品・石製品

紺屋遺跡報告書抄録

ふりがな	こんやいせき
書名	紺屋遺跡
副題	第2次発掘調査報告書
シリーズ	長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第19集
著者名	宮澤公雄
発行者	紺屋遺跡発掘調査団・長坂町・県北土地改良事務所
編集機関	紺屋遺跡発掘調査団
住所・電話	〒406-0032 山梨県東八代郡石和町四日市場1566 財団法人山梨文化財研究所内 TEL 055-263-6441
印刷所	株式会社
印刷日	2000年3月25日
発行日	2000年3月31日
所在地	山梨県北巨摩郡長坂町下条字紺屋1480-1外
地図名	25,000分の1地形図 長坂
位置	北緯 35° 48' 21" 東経 138° 22' 45"
標高	661m
市町村コード	19405
調査区域	駒井広域農業地区農道整備事業
調査期間	1999年6月2日～12月10日
調査面積	1,400m ²
主な時代	平安時代、中世
主な遺構	平安時代の住居跡7軒、平安時代の小銀治遺構1棟、中世の建物跡7棟、中世の溝跡3条、近世以降の溝跡13条、土坑44基、集行土坑1基、ピット48基
主な遺物	平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器および鉄製品、中世の陶器・鐵貨・鉄製品・石製品など
特殊遺構	平安時代の小銀治遺構
特殊遺物	平安時代墨書き土器・刀子未製品、中世陶器（古瀬戸印花文瓶子・祖母娘茶壺・鉄鍔人形茶碗）・石碑

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 第19集

紺屋遺跡

—第2次発掘調査報告書—

2000年3月25日 印刷

2000年3月31日 発行

編集・発行 紺屋遺跡発掘調査団（財団法人山梨文化財研究所内）
山梨県東八代郡石和町四日市場1566 TEL 055-263-6441

印 刷 無エンドレス
山梨県山梨市上石森123

TEL 0553-22-4574

